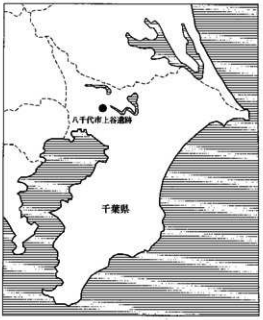
千葉県八千代市

上　谷　遺　跡

（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

— 第4分冊 —



2004

大成建設株式会社

八千代市遺跡調査会

序　　文

八千代市は千葉県の北西部に位置し、東京への通勤圏内として様々な住宅団地が造られてまいりました。特に昭和20年代末からの八千代台団地の計画・造成・建設と30年代初頭の入居開始は、今となっては小規模な住宅団地となってしまいましたが、全国に先駆けて造られた「団地」として「住宅団地発祥の地」の記念碑的なものとなっております。その後、昭和40年代にはいると、数多くの住宅団地が造成され、人口の増加はめざましいものがありました。これに伴い八千代市の姿は、純農業地帯から住宅都市へとその趣を変えてまいりました。

一方、住宅としての発展に伴う宅地開発などによって失われていく埋蔵文化財を保護するために、発掘調査等を行いその保護に努めてまいりました。そして八千代市の大地には、およそ三万年前の昔である旧石器時代から多くの人々が暮らしを営んできたことが、これらの発掘調査によって次第に分かってきております。また、新川流域の奈良・平安時代のムラの跡からは数多くの墨書土器が出土しており、全国的にみても八千代市はその出土数において有数の地となっております。

このようななかで、八千代市の北東部の保品・神野・米本地区にわたる地区に「(仮称) 八千代カルチャータウン」の開発が計画されたのは、昭和40年代のことと聞いております。しかしこの開発事業予定区域内には、多くの遺跡の所在が知られておりました。そして、これら埋蔵文化財の保護のために、その取り扱いについて、関係諸機関による慎重な協議が重ねられてまいりました。その結果、遺跡の一部を現状保存し、保存の困難な地区についてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は八千代市遺跡調査会の手により、昭和63年３月から平成11年３月にかけて行われました。この長い期間に調査を行った遺跡は９遺跡34地点に及び、旧石器時代から中世・近世に至る貴重な成果を得ることができました。そして平成11年度は整理作業の準備期間にあて、平成12年４月より順次、本整理作業を進めておるところです。

本書はこの９遺跡のうち、上谷遺跡の発掘調査の成果の一部をまとめたものです。上谷遺跡では主に旧石器時代から縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代の人々の暮らしの跡が残されておりましが、その調査の成果を５地区に分け、５分冊によって報告することとなっております。今回、ここに報告いたしますⅣ地区では、特に奈良・平安時代のムラの跡から、その当時の人々の暮らしに伴う遺物も数多く出土しております。また、土器に文字を記した墨書土器と呼ばれるものが数多く出土し、当時の人々の暮らしの一端が明らかとなってまいりました。この成果をまとめた本書が、学術資料としてはもとより、文化財保護に広く地域の歴史に興味を持たれる方々によって活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまでの長い期間にわたってご協力いただきました大成建設株式会社をはじめといたしまして、数々のご指導・ご助言をいただいた千葉県教育委員会等の諸機関並びに関係諸氏に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査及び整理作業に従事された方々に深く感謝いたすところです。

平成16年12月

八千代市遺跡調査会
会　長　三浦　幸子

例　　言

1．本書は、『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』である。
2．上谷遺跡を５つの地区に分割し、各地区ごとに報告する予定である。報告書は、上谷遺跡で５分冊となる予定である。
3．本書は、上谷遺跡全５分冊のうちの第４分冊である。本書で報告する地区は、上谷遺跡のⅣ地区である。
4．上谷遺跡は、千葉県八千代市保品字上谷1786他外に所在する。
5．上谷遺跡の発掘調査及び整理作業は、大成建設株式会社の委託により、千葉県教育委員会・八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。
6．発掘調査の実施期間、調査面積等については、第１章に記載した。
7．整理作業及び報告書刊行作業は、初期整理及び整理の一部を武藤健一・蕨茂美が行い、その後の整理を朝比奈竹男・宮澤久史が担当し、平成15年９月１日～平成16年５月31日までの期間実施した。
8．本書の執筆・編集は朝比奈竹男が行った。
9．本書の図版作成及び編集・レイアウト作業は、一部を除き、DTP(Desktop Publishing=コンピュータによる版下作成)システムによるデジタル化を図り、伊勢田めぐみ（株式会社東京航業研究所）が担当した。
10．発掘調査における航空写真及び遺構図・全測図・地形図の作成は、要航業株式会社・株式会社東京航業研究所が行った。
11．整理作業及び報告書刊行作業におけるDTPシステムによるデジタル化作業全般において、株式会社東京航業研究所の協力を得た。
12．遺物の実測図及びトレース図の作成については、一部を除き株式会社東京航業研究所に委託した。
13．上谷遺跡の内容については本書をもって正式報告とし、年報その他において公表された内容と相違する点については、本書の記述により訂正させていただくものとする。
14．発掘調査に伴う出土品及び図面・写真等の記録類は、八千代市教育委員会が保管している。
15．出土文字資料の判読・解説については、国立歴史民俗博物館平川南教授にご指導をいただいた。
16．発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の機関及び諸氏をはじめとする多くの方々からご指導、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。（五十音順・敬称略）

千葉県教育庁文化財課　八千代市教育委員会　（財）千葉県文化財センター　（財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財センター　（財）印旛郡市文化財センター

青沼道文　阿部寿彦　安藤広道　大沢　孝　小笠原永隆　小川和博　小倉淳一　柿沼修平
川端弘士　菊池健一　黒沢　浩　郷堀英司　関口達彦　佐藤順一　田形孝一　高花宏行
田川　良　田中英世　仲村　浩　平川　南　深谷　昇　藤岡孝司　峰村　篤　村松　篤
山岸良二

凡　　例

1．遺構番号は発掘調査時には、遺構種別ではなく調査地区ごとの通番号を付与した。遺物の注記、図面・写真への記録はこれによった。しかし、本書では遺構別に通番号を新たに付与し直したこの遺構番号については、第１章に新旧番号の対照表を掲載したので参照していただきたい。

2．本書の挿図において使用した地図は以下の通りである。いずれも一部改変・合成して使用している。

図１　国土地理院発行　1/25,000地形図　「小林」「佐倉」「白井」「習志野」（平成12年発行）

図２　大成建設株式会社発行　1/40,000　Ｙ．Ｋ．プロジェクト　空中写真測量図（昭和63年発行）

3．本書の挿図において、方位の表示のないものについては、公共座標に基づく座標北を上としている。

4．本書の遺構実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 図中及び本文中における方位は、公共座標に基づく座標北を示している。

(2) 縮尺率は原則として以下のとおりとするが、これ以外のものについては、図中に示したスケールを参照されたい。

住居跡　1/80　掘立柱建物　1/80　方形周溝墓　1/100　土坑　1/50　溝　1/50　炉穴　1/50

(3) 住居跡平面図に使用した一点鎖線は、床の硬化範囲を示している。

(4) 遺構実測図で使用した波線は、推定復元線を示している。

(5) 遺構実測中のスクリーントーンの表示は原則として以下のとおりであるが、個々については実測図脇に表示した凡例を参照されたい。

火床　竈　焼土　粘土　柱痕　貝

(6) 竈のある住居跡にあっては、長軸と短軸の距離及び方位は、各コーナーから対角線に線を引いた上で住居の中心を出し、その中心の壁間での計測値を出した。また、主軸は煙道にて計測した。

5．本書の遺物実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 縮尺率は原則として以下のとおりであるが、個々については図脇に示したスケールを参照されたい。

土器実測図　1/4　土器拓影図　1/4　土製品　1/3　石器・石製品　1/2　1/3　1/4

鉄器・鉄製品　1/4　銅製品　1/2　支　脚　1/4

須恵器　釉薬　磨耗痕　赤彩　黒色処理・煤・繊維土器

(2) 遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下のとおりである。

(3) 墨書・朱書は以下のスクリーントーンで表現した。墨書・朱書は不明瞭な部分が多いため、明瞭な部分はベタ塗りで、不明瞭な部分は20%のトーンをかけて処理した。さらに文字の輪郭がはっきりしている部分は縁取りを行った。なお、推定復原部分は破線で示した。

墨書　墨書（不明瞭部分）　朱書　朱書（不明瞭部分）

6．本書の遺物写真における用例は以下のとおりである。

(1) 写真図版中における遺物番号は、本文中における遺物番号と一致している。

(2) 写真図版中の遺物写真縮尺は、墨書土器等を除き、概ね遺物実測図と同じとした。

7．墨書土器の判別にあたっては、赤外線投射カメラによってモニター観察を行った。また、報告書の写真作成については、文字判読を優先したため一部コンピュータによって画像処理を行った。

8．本書では土器に刻まれた文字のうち、土器の焼成前に刻まれたものを「篦（ヘラ）書」、土器の焼成後に刻まれたもの「線刻」として区分している。

9．鉄製品及び銅製品は、株式会社東京航業研究所が、X線による撮影後、写真から実測を行った。

10．遺構図は、セクション図を優先させている。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表目次
写真図版目次

第1章　上谷遺跡Ⅳ地区の概要・・・・・・1
第1節　上谷遺跡Ⅳ地区の調査の経緯・・1
第2節　上谷遺跡Ⅳ地区の概要と調査の概要・・4
第2章　遺構及び遺物・・・・・・・・・・8
第1節　縄文時代・・・・・・・・・・・・8
第1項　炉穴・・・・・・・・・・・・・8
第2項　土坑・・・・・・・・・・・・119
第2節　弥生時代　・・・・・・・・・・154
第3節　奈良・平安時代・・・・・・・・177
第1節　竪穴住居跡・・・・・・・・・177
第2節　掘立柱建物跡・・・・・・・・279
第3節　柱列・・・・・・・・・・・・408
第4節　土坑・・・・・・・・・・・・419
第5節　溝状遺構節・・・・・・・・・437
第3章小　結・・・・・・・・・・・・・440
第1節　縄文時代・・・・・・・・・・・440
第1項　炉穴
第2項　中期・五領ヶ台期について・440
第2節　弥生時代・・・・・・・・・・・440
第3節　奈良・平安時代弥生時代・・・441
第1項　墨書土器について・・・・・441
第2項　上谷遺跡Ⅳ地区の長文・人面土器・・441

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

図 1　上谷遺跡位置図（1/50,000）・・・・1
図 2　（仮称）八千代カルチャータウン開発
　　事業関連遺跡地形図・・・・・・2
図 3　上谷遺跡本調査地区割図・・・・・2
図 4　上谷遺跡Ⅳ地区遺構配置図・・・・3
図 5　上谷遺跡基本土層図・・・・・・・4
図 6　上谷遺跡Ⅳ地区
　　縄文時代遺構配置図・・・・・・・9
図 7　F151,F152・・・・・・・・・・・・11
図 8　F153,F154,F155,F156,F157,F158・・・13
図 9　F159・・・・・・・・・・・・・・・14
図 10　F160・・・・・・・・・・・・・・・15
図 11　F161・・・・・・・・・・・・・・・16
図 12　F162,F163・・・・・・・・・・・・17
図 13　F163（2）・・・・・・・・・・・・18
図 14　F164,D208・・・・・・・・・・・・20
図 15　F165・・・・・・・・・・・・・・・20
図 16　F166・・・・・・・・・・・・・・・21
図 17　F168a.b・・・・・・・・・・・・・22
図 18　F168,F169,F170,F171・・・・・・・23
図 19　F170（2）・・・・・・・・・・・・24
図 20　F172・・・・・・・・・・・・・・26
図 21　F173・・・・・・・・・・・・・・27
図 22　F174a.b,D217・・・・・・・・・・・27
図 23　F174a.b,D217（2）・・・・・・・・28
図 24　F175,F176, F177,F178・・・・・・・29
図 25　F179,F180・・・・・・・・・・・・30
図 26　F181,F182,F183・・・・・・・・・・31
図 27　F184,F185,F186・・・・・・・・・・32
図 28　F184,F185,F186（2）・・・・・・・33
図 29　F187,F188・・・・・・・・・・・・34
図 30　F189,F190,F194・・・・・・・・・・36
図 31　F191・・・・・・・・・・・・・・・37
図 32　F192,F193・・・・・・・・・・・・37
図 33　F195,F196,D230・・・・・・・・・・39
図 34　F195,F196（2）・・・・・・・・・・40
図 35　F197,F198・・・・・・・・・・・・41
図 36　F198（2）・・・・・・・・・・・・42
図 37　F199,F200,F201・・・・・・・・・・43
図 38　F199,F200,F201（2）・・・・・・・44
図 39　F02,F203・・・・・・・・・・・・・45
図 40　F204,F205,F206,F207・・・・・・・・47
図 41　F205,F206,F207（2）・・・・・・・48
図 42　F208,F209・・・・・・・・・・・・48
図 43　F208,F209（2）・・・・・・・・・49
図 44　F210・・・・・・・・・・・・・・・51
図 45　F210（2）F211,F212・・・・・・・ 52
図 46　F211,F212・・・・・・・・・・・・53
図 47　F213・・・・・・・・・・・・・・・54
図 48　F214・・・・・・・・・・・・・・・55
図 49　F215・・・・・・・・・・・・・・・56
図 50　F216・・・・・・・・・・・・・・・57
図 51　F217・・・・・・・・・・・・・・・58
図 52　F218・・・・・・・・・・・・・・・58
図 53　F219・・・・・・・・・・・・・・・59
図 54　F220火床新旧関係・・・・・・・・・60
図 55　F220・・・・・・・・・・・・・・・61
図 56　F220（2）・・・・・・・・・・・・63
図 57　F220（3）・・・・・・・・・・・・64
図 58　F221・・・・・・・・・・・・・・・65
図 59　F222,D245・・・・・・・・・・・・66
図 60　F223・・・・・・・・・・・・・・・67
図 61　F224・・・・・・・・・・・・・・・68
図 62　F225,F226,F227,F228・・・・・・・69
図 63　F229,F230,F231,F232・・・・・・・71
図 64　F230,F232（2）・・・・・・・・・72
図 65　F233,F234・・・・・・・・・・・・73
図 66　F235・・・・・・・・・・・・・・・73
図 67　F236・・・・・・・・・・・・・・・75
図 68　F237,D254,F238,F239,F240・・・・・76
図 69　F238,F239,F240（2）・・・・・・・77
図 70　F241・・・・・・・・・・・・・・・78
図 71　F242a.b,D260a.b・・・・・・・・・79
図 72　F424a.b,D260a.b・・・・・・・・・80

図 73　F243,F244,F245,F246 ・・・・・・・・・81
図 74　F247,F248,D262 ・・・・・・・・・・・83
図 75　F247,F248,D262（2）・・・・・・・・84
図 76　F249,F250,F251・・・・・・・・・・・86
図 77　F252,F253a・b,D265・・・・・・・・・87
図 78　F254,F255,F265 ・・・・・・・・・・・88
図 79　F254,F255,F265（2）・・・・・・・・89
図 80　F256・・・・・・・・・・・・・・・90
図 81　F257,F258・・・・・・・・・・・・・91
図 82　F259・・・・・・・・・・・・・・・92
図 83　F260,F261・・・・・・・・・・・・・93
図 84　F262・・・・・・・・・・・・・・・94
図 85　F263・・・・・・・・・・・・・・・95
図 86　F264・・・・・・・・・・・・・・・96
図 87　F265a.b・・・・・・・・・・・・・・97
図 88　F266・・・・・・・・・・・・・・・97
図 89　F267・・・・・・・・・・・・・・・99
図 90　F268,F269・・・・・・・・・・・・100
図 91　F170,F271・・・・・・・・・・・・101
図 92　F272・・・・・・・・・・・・・・102
図 93　F273,F274,F275,F276,F277・・・・・103
図 94　F278a.b.c.d・・・・・・・・・・・・105
図 95　F279,F280,F281・・・・・・・・・・106
図 96　F282,F283・・・・・・・・・・・・107
図 97　F284・・・・・・・・・・・・・・108
図 98　F285・・・・・・・・・・・・・・・110
図 99　F286,F287,F288・・・・・・・・・・111
図100　F289,F290,F291・・・・・・・・・・112
図101　F292,F273a.b・・・・・・・・・・・114
図102　F293a.b.c.d・F294・・・・・・・・・115
図103　F295,F296,F297・・・・・・・・・・116
図104　F298,F299,F300,F301・・・・・・・118
図105　D185,D186,D187,D188・・・・・・・119
図106　D189,D190・・・・・・・・・・・・121
図107　D191・・・・・・・・・・・・・・122
図108　D192・・・・・・・・・・・・・・123
図109　D193,D195,D196・・・・・・・・・125
図110　D199a.b・・・・・・・・・・・・・126
図111　D209・・・・・・・・・・・・・・127
図112　D210,D212a,D213,D214・・・・・・129
図113　D212a（2）・・・・・・・・・・・130
図114　D215,D216,D218・・・・・・・・・131
図115　D217・・・・・・・・・・・・・・132
図116　D220・・・・・・・・・・・・・・133
図117　D225,D232,D233,D235・・・・・・134
図118　D225,D232,D233,D235（2）・・・・135
図119　D234・・・・・・・・・・・・・・136
図120　D236D237,D238・・・・・・・・・139
図121　D246,D247,D248,D249,D250・・・・140
図122　D248,D249,D250（2）・・・・・・144
図123　D251,D252,D253,D255,D256,D258・・143
図124　D251,D253,D256,D258（2）・・・・144
図125　D257・・・・・・・・・・・・・・146
図126　D259,D261b,D263,D266,d267・・・・147
図127　D263（2）・・・・・・・・・・・148
図128　D263（3）,D266・・・・・・・・・149
図129　D269,D270,D271・・・・・・・・・152
図130　D274・・・・・・・・・・・・・・153
図131　上谷遺跡遺跡Ⅳ地区
　　弥生時代遺構配置図・・・・155
図132　A185B・・・・・・・・・・・・・157
図133　A186・・・・・・・・・・・・・・158
図134　A187・・・・・・・・・・・・・・159
図135　A191・・・・・・・・・・・・・・160
図136　A192・・・・・・・・・・・・・・162
図137　A205・・・・・・・・・・・・・・163
図138　A205（2）・・・・・・・・・・・164
図139　A208・・・・・・・・・・・・・・166
図140　A208（2）・・・・・・・・・・・167
図141　A213・・・・・・・・・・・・・・169
図142　A213（2）・・・・・・・・・・・170
図143　A214・・・・・・・・・・・・・・171
図144　A221・・・・・・・・・・・・・・172
図145・A221（2）・・・・・・・・・・・173
図146・A223・・・・・・・・・・・・・・175
図147・A223（2）・・・・・・・・・・・176
図148・上谷遺跡Ⅳ地区
　　奈良・平安時代遺構配置図・・・177
図149・A185a.b・・・・・・・・・・・・180
図150　A187・・・・・・・・・・・・・・181

図151・A187（2）・・・・・・・・・・・・182
図152　A188・・・・・・・・・・・・・・・184
図153　A189・・・・・・・・・・・・・・・186
図154　A189（2）・・・・・・・・・・・・187
図155　A189（3）・・・・・・・・・・・・188
図156　A189（4）・・・・・・・・・・・・189
図157　A192・・・・・・・・・・・・・・193
図158　A192（2）・・・・・・・・・・・・194
図159　A193・・・・・・・・・・・・・・・195
図160　A193（2）・・・・・・・・・・・・196
図161　A193（3）・・・・・・・・・・・・197
図162　A194・・・・・・・・・・・・・・200
図163　A194（2）・・・・・・・・・・・・201
図164　A195・・・・・・・・・・・・・・204
図165　A196・・・・・・・・・・・・・・205
図166　A196（2）・・・・・・・・・・・・206
図167　A197・・・・・・・・・・・・・・208
図168　A198・・・・・・・・・・・・・・210
図169　A198（2）・・・・・・・・・・・・211
図170　A199・・・・・・・・・・・・・・215
図171　A199（2）・・・・・・・・・・・・216
図172　A200・・・・・・・・・・・・・・216
図173　A201・・・・・・・・・・・・・・218
図174　A201（2）・・・・・・・・・・・・219
図175　A202a・b・・・・・・・・・・・・222
図176　A202a・b（2）・・・・・・・・・・223
図177　AA202a・b（3）・・・・・・・・・224
図178　A203・・・・・・・・・・・・・・226
図179　A203（2）・・・・・・・・・・・・228
図180　A204・・・・・・・・・・・・・・230
図181　A204（2）・・・・・・・・・・・・230
図182　A206a・b・・・・・・・・・・・・233
図183　A206a・b（2）・・・・・・・・・・234
図184　A206a・b（3）・・・・・・・・・・236
図185　A206a・b（4）・・・・・・・・・・236
図186　A206a・b（5）・・・・・・・・・・237
図187　A208・・・・・・・・・・・・・・239
図188　A208（2）・・・・・・・・・・・・240
図189　A209・・・・・・・・・・・・・・243
図190　A209（2）・・・・・・・・・・・・244
図191　A209（3）・・・・・・・・・・・・245
図192・A209（4）・・・・・・・・・・・・246
図193　A209（5）・・・・・・・・・・・・247
図194　A210・・・・・・・・・・・・・・252
図195　A210（2）・・・・・・・・・・・・253
図196　A211・・・・・・・・・・・・・・256
図197　A211（2）・・・・・・・・・・・・257
図198　A212・・・・・・・・・・・・・・259
図199　A212（2）・・・・・・・・・・・・260
図200　A215a・b・・・・・・・・・・・・261
図201　A215a・b（2）・・・・・・・・・262
図202　A215a・b（3）・・・・・・・・・263
図203　A216・・・・・・・・・・・・・・267
図204　A216（2）・・・・・・・・・・・・268
図205　A217・・・・・・・・・・・・・・270
図206　A218・・・・・・・・・・・・・・271
図207　A218（2）・・・・・・・・・・・・272
図208　A219・・・・・・・・・・・・・・273
図209　A219（2）・・・・・・・・・・・・274
図210　A222・・・・・・・・・・・・・・275
図211　A224・・・・・・・・・・・・・・277
図212　A225・・・・・・・・・・・・・・278
図213　B056a..b.c.d.z配置図・・・・・・・279
図214　B056a・・・・・・・・・・・・・・280
図215　B056b・・・・・・・・・・・・・・281
図216　B056c・・・・・・・・・・・・・・282
図217　B056z・・・・・・・・・・・・・・283
図218　B056・・・・・・・・・・・・・・284
図219　B057・・・・・・・・・・・・・・285
図220　B058・・・・・・・・・・・・・・286
図221　B058・B059・B060a.z配置図・・・・287
図222　B059・・・・・・・・・・・・・・288
図223　B060a.z・・・・・・・・・・・・・289
図224　B058・B060a.z・・・・・・・・・・290
図225　B061a.b・・・・・・・・・・・・・291
図226　B062・・・・・・・・・・・・・・293
図227　B062（2）・・・・・・・・・・・・294
図228　B061（2）・B062（3）・・・・・・295
図229　B063・B064a.b.c.d.z配置図・・・・・296
図230・B063・・・・・・・・・・・・・・296

図231 B63（2）・・・・・・・・・・・・297
図232・B064a・・・・・・・・・・・・・298
図233 B064a（2）・・・・・・・・・・・299
図234 B064b（3）・・・・・・・・・・・300
図235 B064c・・・・・・・・・・・・・301
図236 B064z・・・・・・・・・・・・・302
図237 B064・・・・・・・・・・・・・302
図238 B065a.b.c.d.z配置図・・・・・・・・303
図239 B0065a・・・・・・・・・・・・・305
図240 B065a（2）・・・・・・・・・・・306
図241 B065b・・・・・・・・・・・・・307
図242 B065c・・・・・・・・・・・・・308
図243 B066・・・・・・・・・・・・・309
図244 B067・・・・・・・・・・・・・310
図245 B068ab.c.d.e.z配置図・・・・・・・311
図246 B068a.b.z・・・・・・・・・・・312
図247 B069・・・・・・・・・・・・・313
図248 B070・・・・・・・・・・・・・314
図249 B071・・・・・・・・・・・・・315
図250 B072a.b・・・・・・・・・・・・316
図251 B072a.b（2）・・・・・・・・・・317
図252 B072a.b（3）・・・・・・・・・・318
図253 B073・・・・・・・・・・・・・319
図254 B074a.b.z・・・・・・・・・・・321
図255 B074a.b.z（2）・・・・・・・・・322
図256 B074a.b.z（3）・・・・・・・・・323
図257 B075・・・・・・・・・・・・・324
図258 B076a.b・・・・・・・・・・・・325
図259 B076a.b（2）・・・・・・・・・・326
図260 B077・・・・・・・・・・・・・336
図261 B078・・・・・・・・・・・・・338
図262 B079・・・・・・・・・・・・・330
図263 B080・・・・・・・・・・・・・330
図264 B080（2）・・・・・・・・・・・331
図265 B080（3）・・・・・・・・・・・332
図266 B081・・・・・・・・・・・・・332
図267・B082・・・・・・・・・・・・・333
図268・B084・・・・・・・・・・・・・334
図269 B083a.b・・・・・・・・・・・・335
図270 B084（2）・・・・・・・・・・・336
図271 B085・・・・・・・・・・・・・337
図272 B086a.b.c.d.z配置図・・・・・・・・338
図273 B086a.c.d.z・・・・・・・・・・・339
図274 B086a.c.d.z（2）・・・・・・・・・340
図275 B086b・・・・・・・・・・・・・341
図276 B087・・・・・・・・・・・・・343
図277 B087（2）・・・・・・・・・・・344
図278 B088・・・・・・・・・・・・・345
図279 B089a.b.z・・・・・・・・・・・346
図280 B089a.b.z（2）・・・・・・・・・347
図281 B089a.b.z（3）・・・・・・・・・348
図282 B090・・・・・・・・・・・・・349
図283 B091・・・・・・・・・・・・・350
図284 B092・・・・・・・・・・・・・351
図285 B093・・・・・・・・・・・・・353
図286 B094・・・・・・・・・・・・・354
図287 B095a.z・・・・・・・・・・・・355
図288 B096・・・・・・・・・・・・・356
図289 B096（2）・・・・・・・・・・・357
図290 B097・・・・・・・・・・・・・358
図291 B097（2）・・・・・・・・・・・359
図292 B098a.b.c・・・・・・・・・・・359
図293 B098a.b.c（2）・・・・・・・・・360
図294 B099・・・・・・・・・・・・・362
図295 B100a.b.z・・・・・・・・・・・363
図296 B100a.b.z（2）・・・・・・・・・364
図297 B101a.z・・・・・・・・・・・・366
図298 B101a.z（2）・・・・・・・・・・367
図299 B101a.z（3）・・・・・・・・・・368
図300 B102a.z・・・・・・・・・・・・369
図301 B102a.z（2）・・・・・・・・・・370
図302 B103・・・・・・・・・・・・・371
図303 B104・・・・・・・・・・・・・372
図304 B105a.z・・・・・・・・・・・・373
図305 B106a.b.z・・・・・・・・・・・375
図306 B106a.b.z（2）・・・・・・・・・376
図307 B106a.b.z（3）・・・・・・・・・378
図308・B106a.b.z（4）・・・・・・・・・378
図309 B107a.z・・・・・・・・・・・・378
図310 B107a.z・・・・・・・・・・・・379

図311 B108・・・・・・・・・・・・・・380
図312 B108（2）・・・・・・・・・・・・381
図313 B108（3）・・・・・・・・・・・・382
図314 B109・・・・・・・・・・・・・・383
図315 B110a.b.z・・・・・・・・・・・・384
図316 B110a.b.z（2）・・・・・・・・・385
図317 B110a.b.z（3）・・・・・・・・・386
図318 B111・・・・・・・・・・・・・・387
図319 B112・・・・・・・・・・・・・・388
図320 B112（2）・・・・・・・・・・・・389
図321 B113・・・・・・・・・・・・・・390
図322 B113（2）・・・・・・・・・・・・391
図323 B114・・・・・・・・・・・・・・392
図324 B115・・・・・・・・・・・・・・393
図325 B116・・・・・・・・・・・・・・394
図326 B117・・・・・・・・・・・・・・395
図327 B118a.b・・・・・・・・・・・・396
図328 B118a.b・・・・・・・・・・・・397
図329 B119・・・・・・・・・・・・・・398
図330 B119（2）・・・・・・・・・・・・399
図331 B120・・・・・・・・・・・・・・400
図332 B120（2）・・・・・・・・・・・・401
図333 B121・・・・・・・・・・・・・・403
図334 B122 404
図335 B123・・・・・・・・・・・・・・405
図336 B124・・・・・・・・・・・・・・406
図337 B124（2）・・・・・・・・・・・・407
図338 I001・・・・・・・・・・・・・・408
図339 I002・・・・・・・・・・・・・・409
図340 D194.D197.D198.D200.D201.D202・・420
図341 D203.D204.D205.D206・・・・・・422
図342 D207・・・・・・・・・・・・・・423
図343 D219・・・・・・・・・・・・・・423
図344 D223.D224.D227.D228.D229・・・・424
図345 D241.D242・・・・・・・・・・・426
図346 D243.D244・・・・・・・・・・・428
図347 D261a.b・・・・・・・・・・・・429
図348 D264.D265・・・・・・・・・・・430
図349 D268・・・・・・・・・・・・・・431
図350 D268（2）・・・・・・・・・・・・432
図351 D273.D275.D276・・・・・・・・・435
図352 E003・・・・・・・・・・・・・・438
図353 E004・・・・・・・・・・・・・・439
図354 上谷遺跡Ⅳ地区墨書出土遺構・・・443
図355 上谷遺跡Ⅳ地区「西」「竹・竹野」「長文」「寺」出土遺構・444

表 目 次

表 1 上谷遺跡新旧遺構番号対照表・・・・5
表 2 F160遺物観察表・・・・・・・・・・16
表 3 F170遺物観察表・・・・・・・・・・25
表 4 F208遺物観察表・・・・・・・・・・50
表 5 F220遺物観察表・・・・・・・・・・64
表 6 F235遺物観察表・・・・・・・・・・74
表 7 F284遺物観察表・・・・・・・・・・109
表 8 D192遺物観察表・・・・・・・・・・124
表 9 D233遺物観察表・・・・・・・・・・136
表10 D250遺物観察表・・・・・・・・・・142
表11 D263遺物観察表・・・・・・・・・・150
表12 A184B遺物観察表・・・・・・・・・・157
表13 A186遺物観察表・・・・・・・・・・159
表14 A191遺物観察表・・・・・・・・・・161
表15 A192遺物観察表・・・・・・・・・・162
表16 A205遺物観察表・・・・・・・・・・165
表17 A208遺物観察表・・・・・・・・・・168
表18 A213遺物観察表・・・・・・・・・・170
表19 A214遺物観察表・・・・・・・・・・171
表20 A221遺物観察表・・・・・・・・・・174
表21 A223遺物観察表・・・・・・・・・・176
表22 A185a・b遺物観察表・・・・・・・・・180

表23　A187遺物観察表・・・・・・・・・・・182
表24　A188遺物観察表・・・・・・・・・・・185
表25　A189遺物観察表・・・・・・・・・・・190
表26　A192遺物観察表・・・・・・・・・・・194
表27　A193遺物観察表・・・・・・・・・・・198
表28　A194遺物観察表・・・・・・・・・・・202
表29　A195遺物観察表・・・・・・・・・・・204
表30　A196遺物観察表・・・・・・・・・・・207
表31　A197遺物観察表・・・・・・・・・・・209
表32　A198遺物観察表・・・・・・・・・・・212
表33　A199遺物観察表・・・・・・・・・・・215
表34　A200遺物観察表・・・・・・・・・・・217
表35　A201遺物観察表・・・・・・・・・・・220
表36　A202遺物観察表・・・・・・・・・・・224
表37　A203遺物観察表・・・・・・・・・・・228
表38　A204遺物観察表・・・・・・・・・・・230
表39　A206遺物観察表・・・・・・・・・・・237
表40　A208遺物観察表・・・・・・・・・・・241
表41　A209遺物観察表・・・・・・・・・・・247
表42　A210遺物観察表・・・・・・・・・・・255
表43　A211遺物観察表・・・・・・・・・・・258
表44　A212遺物観察表・・・・・・・・・・・260
表45　A215a・b遺物観察表・・・・・・・・・265
表46　A216遺物観察表・・・・・・・・・・・268
表47　A217遺物観察表・・・・・・・・・・・271
表48　A218遺物観察表・・・・・・・・・・・273
表49　A219遺物観察表・・・・・・・・・・・275
表50　A222遺物観察表・・・・・・・・・・・276
表51　A224遺物観察表・・・・・・・・・・・277
表52　A225遺物観察表・・・・・・・・・・・278
表53　B056遺物観察表・・・・・・・・・・・284
表54　B058遺物観察表・・・・・・・・・・・290
表55　B059遺物観察表・・・・・・・・・・・290
表56　B060a・z遺物観察表・・・・・・・・・290
表57　B061遺物観察表・・・・・・・・・・・295
表58　B062遺物観察表・・・・・・・・・・・295
表59　B063遺物観察表・・・・・・・・・・・296
表60　B064遺物観察表・・・・・・・・・・・302
表61　B065c遺物観察表・・・・・・・・・・308
表62　B066遺物観察表・・・・・・・・・・・310
表63　B072a・b遺物観察表・・・・・・・・・318
表64　B074遺物観察表・・・・・・・・・・・323
表65　B076遺物観察表・・・・・・・・・・・327
表66　B077遺物観察表・・・・・・・・・・・329
表67　B078遺物観察表・・・・・・・・・・・329
表68　B086遺物観察表・・・・・・・・・・・342
表69　B092遺物観察表・・・・・・・・・・・351
表70　B093遺物観察表・・・・・・・・・・・353
表71　B095遺物観察表・・・・・・・・・・・355
表72　B096遺物観察表・・・・・・・・・・・357
表73　B097遺物観察表・・・・・・・・・・・359
表74　B100遺物観察表・・・・・・・・・・・365
表75　B101遺物観察表・・・・・・・・・・・368
表76　B102遺物観察表・・・・・・・・・・・370
表77　B106遺物観察表・・・・・・・・・・・375
表78　B107遺物観察表・・・・・・・・・・・378
表79　B108遺物観察表・・・・・・・・・・・382
表80　B108遺物観察表・・・・・・・・・・・383
表81　B110遺物観察表・・・・・・・・・・・386
表82　B112遺物観察表・・・・・・・・・・・389
表83　B113遺物観察表・・・・・・・・・・・391
表84　B120遺物観察表・・・・・・・・・・・401
表85　掘立柱建物跡一覧表・・・・・・・・・411
表86　D207遺物観察表・・・・・・・・・・・423
表87　D243遺物観察表・・・・・・・・・・・428
表88　D268遺物観察表・・・・・・・・・・・433
表89　E003遺物観察表・・・・・・・・・・・439
表90　E004遺物観察表・・・・・・・・・・・439
表91　土墨書土器文字資料一覧・・・・・・445

写 真 図 版 目 次

図版 1 上谷遺跡全景（南側から）
上谷遺跡Ⅳ地区遺構検出状況
図版 2 F151,F152,F153,F154,F155,F156,F157,F158,F159,F160,F161,F162,F163,F164,F165,F166,F167,F168
図版 3 F169,F170,F171,F172,F173,F174,F175,F176,F177,F178,F179,F180,F181,F182,F183,F184,F185,F186
図版 4 F187,F188,F189,F190,F191,F193,F194,F195,F196,F197,F198,F199,F200,F201,F202,F203,F204,F205
図版 5 F206,F207,F208,F209,F210,F211,F212,F213,F214,F215,F216,F217,F219,F220
図版 6 F218,F221,F222,F223,F224,F225,F226,F227,F228,F229,F230,F231,F232,F234,F235,F236,F237
図版 7 F238,F239,F240,F241,F242,F243,F245,F246,F247,F248,F249,F250,F251,F252
図版 8 F253,F254,F255,F256,F257,F258,F259,F260,F261,F262,F263,F264
図版 9 F265,F266,F267,F268,F269,F270,F271,F272,F273,F274,F275,F276,F277,F278a,F278,F279,F280
図版 10 F281,F282,F283,F284,F285,F286,F288 F289,F290,F291,F292,F293a,F295,F297,F300
図版 11 D192
図版 12 D186,D187,D192,D193,D209,D210,D211,D212,D214,D215,D216,D217,D219,D221,D226,D236,D237,D239
図版 13 D188,D189,D195,D196,D231,D234,D235,D251
図版 14 D247,D248,D250,D252,D254,D256,D256,D257,D258,D259,D264,D270,D271,D272,D273b,D275
図版 15 A184B,A186,A205,A207,A213,A214
図版 16 A221,A223,A185a・b,A187
図版 17 A188,A189,A192,A193,A194,A195
図版 18 A195(2),A196,A197,A198,A199,A200,A201
図版 19 A202a,A202b,A203,A204,A206a,A206b,A208
図版 20 A209,A210,A211,A212,A215,A216,A217
図版 21 A218,A219,A222,A224,A225,B056,B056(2)
図版 22 B056(3),B057,B058・B059・B060,B062,B063・B064
図版 23 B065・B066,B067,B068,B069,B070,B071,B072
図版 24 B072(2),B073a,B074,B075,B076,B076
図版 25 B078,B079,B080,B081,B082,B083,B084
図版 26 B086,B087,B088,B089,B091,B095,B096・B098
図版 27 B100,B101,B102,B103,B104,B105,B106
図版 28 B108,B110,B111,B112,B113,B114,B115,B116
図版 29 B117,B118,B119,B120,B122,B123,B124
図版 30 I001,I002,D269
図版 31 D197,D198,D202,D203,D204,D205,D206 D207,D208,D223,D224,D225,D228,D229,D230,D242,D243,D245
図版 32 E003,E004
図版 33 遺物 F160,F162,F167,F168,F174
図版 34 遺物・F163,F164,F166
図版 35 遺物・F170,F186,F187,F195,F220
図版 36 遺物・F208,F213,F215,F217,F220
図版 37 遺物・F235,236,F247,F248,F254
図版 38 遺物・FF256,F259,F262F,F264,F272
図版 39 遺物・F278,F280,F284,F293,F295,D238,D250,D251,D258
図版 40 遺物 D263
図版 41 遺物 A184B,A186,A190,A207,A213,A214,
図版 42 遺物 A205
図版 43 遺物 A220,A223,185,A188,
図版 44 遺物 A189
図版 45 遺物 A192,A193
図版 46 遺物 A193（2）,A194

図版 47 遺物 A195,A196,A197,A198
図版 48 遺物 A199,A201,A202,A203
図版 49 遺物 A200,A204,A208
図版 50 遺物 A206
図版 51 遺物 A209
図版 52 遺物 A211（1）
図版 53 遺物 A212,A215,A218,A219,A224
図版 54 遺物 A216,217,A222,A225,B100,B110,B120
図版 55 遺物 B056,B058,B060,B061,B062,B065,D207,E003,E004
図版 55 墨書・線刻・箆描土器（1）
図版 56 墨書・線刻・箆描土器（2）
図版 57 墨書・線刻・箆描土器（3）
図版 58 墨書・線刻・箆描土器（4）

第１章　　上谷遺跡Ⅳ地区の概要

第１節　上谷遺跡Ⅳ地区の調査の経緯

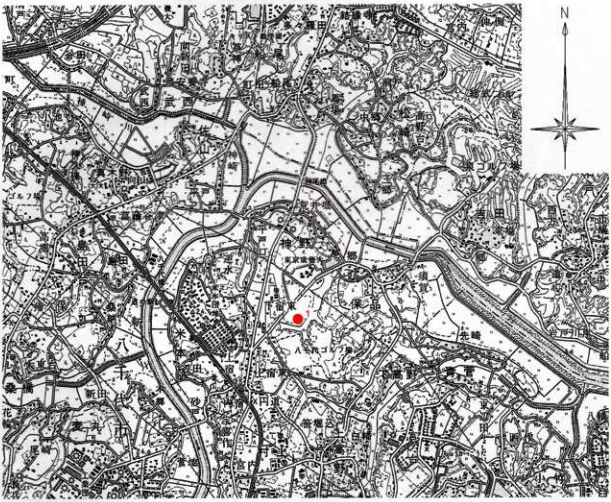


図１　上谷遺跡位置図(1/50,000)

上谷遺跡の調査は（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連区域内における埋蔵文化財発掘調査の一環として、平成４年４月より開始された。例言に記したとおり本報告書は「(仮称）八千代カルチャータウン開発事業埋蔵文化財発掘調査報告書」の８冊目にあたり、上谷遺跡の第４分冊となっている。調査事業全体の経緯については「栗谷遺跡－第１分冊－」を参照いただくこととして、ここでは上谷遺跡Ⅳ地区の調査などについて若干触れておきたい。

上谷遺跡Ⅳ地区の発掘１次本調査は、平成７年７月より平成８年２月にかけて第２次確認調査を行い、奈良・平安時代の竪穴住居跡及び掘立柱建物跡を主体とした集落跡として捉えられた。そしてその確認調査の成果を得て、第２次本調査（平成８年４月より）、第３次本調査（平成９年９月より10年３月）を実施した。このそれぞれの本調査の一部が該当している。調査面積の合計は約22,500㎡あった。

調査においては、調査区を公共座標系にそって設定し、100ｍ方眼でで大グリッドを設定し、その中を10ｍの中グリッド、そしてさらに５ｍの小グリッドを設定し発掘調査を行った。調査はソフトローム上面を遺構確認面として重機による表土層除去を行った。写真撮影などの記録をとりながら、遺構覆土の除去と遺構の精査を行った。測量方法は、遺物については光波測距儀による測量を行い、遺構平面図などについては航空測量を基本として行い、それぞれが補完することとしていた。

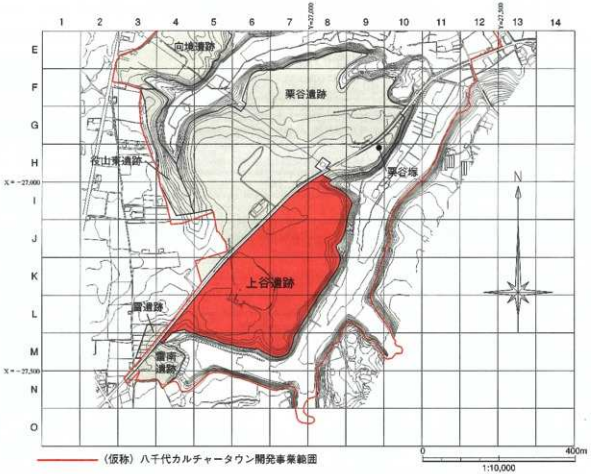


図２　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連遺跡地形図

図３　上谷遺跡本調査地区割図

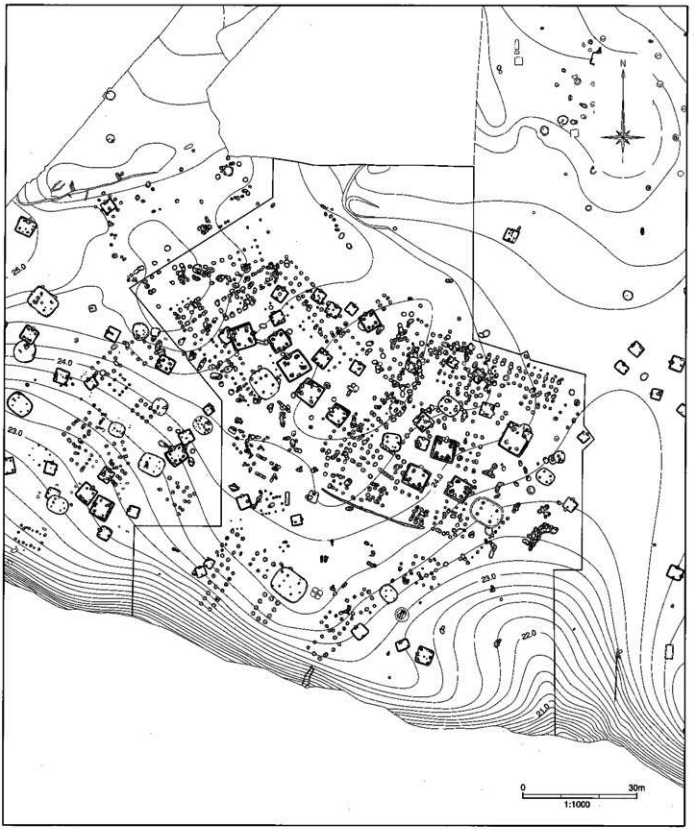


図4　上谷遺跡Ⅳ地区遺構配置図

第２節　上谷遺跡Ⅳ地区の概要と調査の概要

上谷遺跡は千葉県八千代市保品に所在する。下総台地の北西部に位置し、かつての印旛沼の南岸に立地している。下総台地の地形は樹枝状に解析された谷津によって台地と谷津が複雑に入り込み、その谷津に面して遺跡が形成されているが、本遺跡も例外ではなく、台地の北側はかつての印旛沼に面した舌状台地に所在する。そして本遺跡は直線的に印旛沼から北から南に台地の東側に入り込んだ谷津が、大きく西へと屈曲する南と東を谷津に囲まれた舌状台地の基部に所在している。

八千代市は谷津に対して台地の南側が急傾斜となり、北側が緩斜面となる傾向がある。上谷遺跡もその地形の傾向の中にあり、東と南に面した谷津との傾斜は急であり、水田面との比高差は５～６ｍとなっている。調査区の標高は24～25ｍである。なお、Ⅳ地区の調査区北側には現地形では比高差は殆どなく平坦に見えたが、谷頭が入り込んでいた。

なお、栗谷遺跡とは同一の舌状台地であるが、栗谷遺跡は主に北西に形成された集落跡であり、本遺跡は南東に残された遺跡である。先述した谷頭と東から入り込む谷津において、表面観察から分離して捉えられていた遺跡である。

上谷遺跡Ⅳ地区の調査によって検出・調査された遺構は、縄文時代早期後半の炉穴166基・早期後半の土坑63基と中期初頭の土坑１基、弥生時代の竪穴住居跡９軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡38軒、掘立柱建物跡106棟、土坑32基となっている。遺構の主体は縄文時代の炉穴であり、奈良・平安時代の掘立柱建物跡となっている。また、縄文時代中期初頭の五領ヶ台期の土坑には墓壙と想定される遺構も検出している。

また、各時代の遺構の覆土からは、縄文時代の撚糸文系土器片や条痕文系土器片がやや纏まって出土する傾向がある。今回、当該時期の住居跡を検出することはできなかったが、土器片の出土量からその存在を想定させるものであった。特に平坦面には他の時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多く、古い段階において失われた可能性もあることを指摘しておきたい。

なお、本地区の基本土層は、図５に示したとおり、第Ⅰ層表土層（暗褐色土）、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層暗褐色土層、第Ⅳ層ソフトローム漸移層（暗褐色土層）、第Ⅴ層ソフトローム（褐色土層）、第Ⅵハードローム層として捉えられ、上谷遺跡の他地区とも異なりはなかった。遺構検出・確認作業は第Ⅴ層上面にて行った。

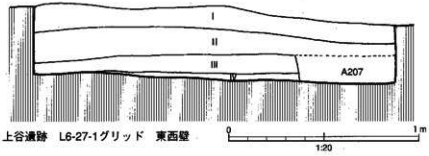


図５　上谷遺跡基本土層図

表1　上谷遺跡新旧遺構番号対照表

新番号	旧番号
竪穴住居跡	
A184B	12-001
A185a	12-002A
A186	12-003
A187	12-004
A188	12-005
A189	12-006
A190	12-007
A191	12-008
A192	12-009
A193	12-010
A194	14-001
A195	14-002
A196	14-003
A197	14-004
A198	14-005
A199	14-006
A200	14-007
A201	13-001
A202a	13-002A
A202b	13-002B
A203	13-003
A204	13-004
A205	13-005
A206a	13-006A
A206b	13-006B
A206c	13-006D
A207	11-001A
A208	11-002
A209	11-003
A210	11-004
A211	11-005
A212	11-006
A213	11-007
A214	11-008
A215a	11-009A
A215b	11-009B

新番号	旧番号
A216	6-009
A217	6-010
A218	7-001
A219	7-002
A220	7-003
A221	7-004
A222	7-005
A223	7-006
A224	7-008
A225	7-009
掘立建物跡	
B056a	12-011A
B056a	12-011B
B056c	12-011C
B056z	12-011Z
B057	12-012
B058	12-013
B059	12-014
B060	12-015
B061a	12-016A
B061b	12-016B
B062	12-017
B063	12-018
B064a	12-019A
B064b	12-019B
B064c	12-019C
B064z	12-019Z
B065a	12-020A
B065b	12-020B
B065c	12-020C
B065z	12-020Z
B066	12-021
B067	12-023
B068a	12-026A
B068b	12-026B
B068z	12-026Z
B069	12-027

新番号	旧番号
B070	14-008
B071	14-009
B072a	14-010A
B072b	14-010B
B073	14-011A
B074a	14-012A
B074b	14-012B
B074z	14-012Z
B075	14-013
B076a	14-014A
B076b	14-014B
B077	14-015
B078	14-016
B079	14-017
B080	13-007
B081	13-008
B082	13-009
B083a	13-010A
B083b	13-010B
B084	13-011
B085	13-012
B086a	13-013A
B086b	13-013B
B086c	13-013C
B086d	13-013D
B086z	13-013Z
B087	13-014
B088	13-015
B089a	13-016A
B089b	13-016B
B089z	13-016Z
B090	13-017
B091	13-019
B092	13-020
B093	13-023
B094	13-026A
B095a	11-011A

新番号	旧番号
B095b	11-011Z
B096	11-012
B097	11-013
B098a	11-014A
B098b	11-014B
B098c	11-014C
B099	11-015
B100a	11-016A
B100b	11-016B
B100z	11-016Z
B101a	11-017A
B101z	11-017Z
B102a	11-018A
B102z	11-018Z
B103	11-019
B104	11-020
B105a	11-021A
B105z	11-021Z
B106a	11-022A
B106b	11-022B
B106z	11-022Z
B107a	11-023A
B107z	11-023Z
B108	11-024
B109	11-026
B110a	11-027A
B110b	11-027B
B110z	11-027Z
B111	6-015
B112	6-016
B113	6-017A
B114	6-018
B115	6-019
B116	7-010
B117	7-011
B118a	7-012A
B118b	7-012B

新番号	旧番号
B119	7-013
B120	7-014
B121	7-015
B122	7-016
B123	7-017
B124	7-018
土坑	
D185	15-009
D186	15-010
D187	15-011
D188	15-012
D189	15-015
D190	15-070
D191	15-074
D192	15-075
D193	15-076B
D194	15-079
D195	15-080
D196	15-085
D197	15-088
D198	12-022
D199a	12-026E
D199b	12-026F
D200	12-026G
D201	12-028
D202	12-030
D203	12-031
D204	12-032
D205	12-033
D206	12-034
D207	12-035
D208	12-036
D209	12-037
D210	12-038
D211	12-039
D212a	12-042C
D212b	12-042D

新番号	旧番号
D213	12-043
D214	12-046
D215	12-048
D216	12-053
D217	12-054A
D218	12-060
D219	14-011B
D220	14-019
D221	14-020
D222	13-006C
D223	13-021
D224	13-022
D225	13-024
D226	13-026B
D227	13-027
D228	13-028
D229	13-029
D230	13-031A
D231	13-032B
D232	13-038
D233	13-043
D234	13-050
D235	13-051
D236	13-054
D237	13-058
D238	13-059
D239	11-001B
D240	11-001C
D241	11-028
D242	11-029
D243	11-030
D244	11-031
D245	11-038B
D246	11-039
D247	11-040
D248	11-052B
D249	11-054

新番号	旧番号
D250	11-056
D251	11-057
D252	11-058
D253	11-059
D254	11-060A
D255	11-062
D256	11-063
D257	11-064
D258	11-065
D259	11-069
D260a	11-070B
D260b	11-070C
D261a	6-011A
D261b	6-011B
D262	6-035B
D263	6-040
D264	6-041C
D265	6-043A
D266	6-044
D267	6-048
D268	7-007
D269	7-042
D270	7-047
D271	7-049
D272a	7-056A
D272b	7-056
D273	7-066
D274	7-067
D275	7-068
D276	7-069
溝状遺構	
E003	11-033
E004	7-020
炉穴	
F151	15-013
F152	15-014
F153	15-016

新番号	旧番号
F154	15-017
F155	15-066
F156	15-067
F157	15-068
F158	15-069
F159	15-073
F160	15-076a
F161	15-089
F162	12-026a
F163	12-029
F164a	12-036A
F164b	12-036B
F165	12-040
F166	12-041
F167a	12-042A
F167b	12-042B
F168	12-044
F169	12-045
F170	12-049
F171	12-050
F172	12-051
F173	12-052
F174a	12-054B
F174b	12-054C
F175	12-055
F176	12-056
F177	12-057
F178	12-058
F179	12-059
F180	12-061
F181	12-062
F182	12-063
F183	12-064
F184	14-018
F185	14-021
F186	14-022
F187	14-023

新番号	旧番号
F188	14-024
F189	14-025
F190	14-026
F191	14-027
F192	14-028
F193	14-029
F194	14-030
F195	13-025
F196a	13-030
F196b	13-031B
F196c	13-031C
F196d	13-031D
F197	13-032A
F198	13-033
F199	13-034
F200	13-035
F201	13-036
F202	13-037
F203	13-039
F204	13-040
F205	13-041
F206	13-042
F207	13-044
F208	13-045
F209	13-046
F210	13-047
F211	13-048
F212	13-049
F213	13-052
F214	13-053
F215	13-055
F216	13-056
F217	13-057
F218	13-060
F219	11-035
F220	11-036
F221	11-037

新番号	旧番号
F222	11-038A
F223	11-041
F224	11-042
F225	11-043
F226	11-044
F227	11-045
F228	11-046
F229	11-047
F230	11-048
F231	11-049
F232	11-050
F233	11-051
F234	11-052A
F235	11-053
F236	11-055
F237	11-060B
F238	11-061
F239	11-066
F240	11-067
F241	11-068
F242a	11-070A
F242b	11-070D
F243	11-071
F244	11-072
F245	11-073
F246	6-17B
F247	6-31
F248	6-35A
F249	6-36
F250	6-37
F251	6-38
F252	6-39
F253a	6-41A
F253b	6-41B
F254	6-042
F255	6-043B
F256	6-045

新番号	旧番号
F257	6-046
F258	6-047
F259	6-049
F260	6-050
F261	6-051
F262	6-052
F263	6-053
F220	7-021
F220	7-022
F220	7-023
F264	7-024
F265a	7-025A
F265b	7-025B
F266	7-026
F267	7-027
F268	7-028
F269	7-029
F270	7-030
F271	7-031
F272	7-032
F273	7-033
F274	7-034
F275	7-035
F276	7-036
F277	7-037
F278a	7-038A
F278b	7-038B
F278c	7-038C
F278d	7-038D
F279	7-039
F280	7-041
F281	7-043
F282	7-044
F283	7-045
F284	7-046
F285	7-048
F286	7-050

新番号	旧番号
F287	7-051
F288	7-052
F289	7-053
F290	7-054
F291	7-055
F292	7-056B
F293a	7-057A
F293b	7-057B
F293c	7-057C
F293d	7-057D
F294	7-058
F295	7-059
F296	7-060
F297	7-061
F298	7-062
F299	7-063
F300	7-064
F301	7-065
その他遮構	
I001	13-018
I002	11-010

第２章　遺構と遺物

ここに報告する上谷遺跡Ⅳ地区は、調査区番号６地区の東側、７調査区・11調査区・12調査区・13・調査区・14調査区・15調査区西側を対象としている。前回、『上谷遺跡－第３分冊－』にて報告したⅢ地区の西隣の地区となっている。そして先述したように本地区では、縄文時代早期後半、弥生時代、奈良・平安時代に至る複合した遺構群を調査した。

南側の谷津と北側の浅い谷頭の挟まれたような調査区であるⅣ地区においては、馬の背状の平坦な面が東西に帯状に開けており、その平坦域を使用するように各時代・時期の遺構が形成されたため、遺構の重複が著しくなっている。このため近似した時期の遺構においては、新旧関係が捉えきれなかった傾向があった。一方、遺構の検出状況は調査区全域に及んでいるが、北側の15調査区は遺構検出が希薄となっていく傾向が窺えた。なお、各遺構の検出は標高23.5～24.5mに立地している。

本地区での遺構調査の主体となる対象遺構は、特に縄文時代早期後半の炉穴群であり、奈良・平安時代の掘立柱建物跡群であった。竪穴住居跡は他の地区に比して少なかった。掘立柱建物跡はこの平坦面にあって集中して建てられており、また、竪穴住居との重複もあり、全ての棟数は捉えきれなかった。

出土遺物は基本的に遺構に伴う縄文式土器（条痕文系・五領ヶ台式）や、弥生式土器（後期主体）、奈良・平安時代の土師器・須恵器であった。弥生式土器の出土は少なく、一方、遺構への流込みと捉えられる縄文時代早期前半の撚糸文系土器群も出土している。また、旧石器時代の石器が出土しているが、精査は行えなかった。

出土遺物の特徴としてはやはり、墨書土器が破片を含めて数多く出土していることである。記された文字は「竹」が多くなってきている。Ⅰ地区から順次、主に使用される文字の異なりが、再確認されたこととなる。特に、Ⅲ地区ではⅡ地区から続く調査区では「得」「万」が主体であったが、順次「竹」への変化がⅣ地区に近づくにつれその傾向が窺えたが、その続きとなってこよう。

以下、時代・遺構別に報告していくこととしたい。

第１節　縄文時代

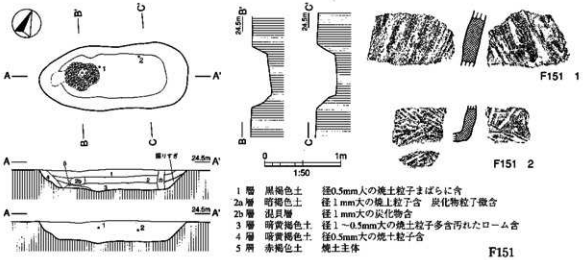
上谷遺跡Ⅳ地区において検出された縄文時代の遺構は、炉穴166基、土坑63基であり、竪穴住居跡は検出できなかった。土坑もその多くが早期後半の条痕文期の所産と捉えられ、当該時期が本地区の主体を占めるものである。

また、中期初頭・五領ヶ台期の墓壙と考えられる土坑も検出された。これはⅡ～Ⅲ地区にて報告した集落と捉えられる竪穴住居跡を含む遺構群からみて、生活領域の異なりを示しているようであった。

第１項　炉　穴

Ⅳ地区における縄文時代の遺構の主体を占めるものが、早期後半・条痕文期の炉穴であった。既に報告しいるⅢ地区ではⅡ地区と異なり、やや炉穴の形成が薄い傾向が窺えた。しかし本遺跡の南西地区に入ってきたⅣ地区では、馬の背状に帯状に東西に広がる台地平坦面を中心に、各時代の遺構と錯綜して形成されていた。この平坦面に弥生時代や奈良・平安時代の竪穴住居跡が営まれており、これらの各竪穴住居跡から条痕文土器片の出土も多いことから、既に失われた炉穴も多々あると考えられ、その分布傾向を捉えることはできなかった。

図6　上谷遺跡Ⅳ地区縄文時代遺構配置図



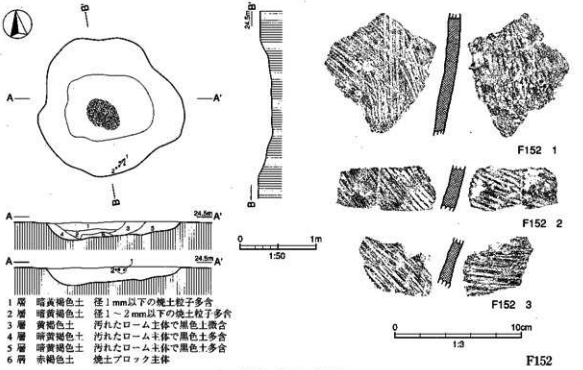


図7　F151・F152

F151

検出地区　L6-13gにて検出した。

遺　構　長軸1.96m×短軸0.83m×深さ0.24～0.28m、長軸の方位はN-67°-Eを測る。平面形は形状の崩れた長楕円乃至砲弾形となっている。坑底の西壁際に赤色硬化（赤化）した火床が1カ所検出され、さらに火床から西壁にかけて火熱痕が認められた。覆土は暗黄褐色の自然堆積後、掘込まれ、小形の貝が投棄されていた。貝はハイガイやマガキであった。また、その後、暗褐色土・黒褐色土の自然堆積であった。

遺　物　条痕文片が若干出土した。1は内外面ともに茎状工具による斜位のナデを施している。2は胴部下端から底部片であるが、内外面とも斜位の条痕文が施され、底部にも認めた。

所　見　調査では捉えられなかったが、炉穴の西壁立上がりの火熱痕は、赤変もしていなかったが、壁の立ち上がりがやや急であり、煙道付の小規模な炉穴かも知れない。

また、貝の投棄時期は貝の構成種から炉穴との時間的な差はなく、条痕文期の所産と捉えた。

F152

検出地区　L6-13gにて検出した。

遺　構　長軸1.92m×短軸1.82m×深さ0.18～0.20m、方位はN-1°-Wを測る。平面形は上場が崩れ不明瞭であるが、基本的には楕円に近い長方形であり、坑底は凹凸が著しい炉穴である。火床は坑底の略中央に、1カ所赤化したものを検出した。覆土は、暗黄褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　覆土から条痕文片が若干出土した。1～3はいずれも条痕文の深鉢胴部片であり、1に一部縦位の条痕文がみられるものの、斜位の施文を基本としている。

所　見　火床の赤化がやや強いことなどから、炉穴の使用期間は長いものと捉えた。

F153

検出地区　L6-13gにて検出した。

遺　構　長軸1.24m×短軸0.76m×深さ0.12～0.16m、方位はN-3°-Eを測る。平面形は長楕円形である。壁は北側が緩やかであり、南側はやや急な立上がりとなっている。坑中央から南側に赤化した火床を検出したが、火床範囲は坑底の2/3を占めていた。覆土は、暗褐色土の自然堆積であった。

遺　物　条痕文片が出土しているが、極めて少ない。

所　見　単独の炉穴である。火床の状態などから、長期間の使用が想定された

F154

検出地区　L6-3gにて検出した。

遺　構　長軸1.20m×短軸0.82m×深さ0.08m、方位はN-63°-Eを測る。平面形は隅丸方形である。掘込みは不明瞭であり、凹凸が著しい浅く凹み状の炉穴である。坑底が大きく赤化した火床が検出された。色調的には鮮やかな赤色を示し、硬化していた。

遺　物　出土した遺物は無かった。

所　見　攪乱も被り、また、掘込みも浅く不明瞭な炉穴である。坑底が広く火床化するなど、炉穴としてはきれいな感じもするが、周辺の遺構状況などから条痕文期の炉穴と捉えている。

F155

検出地区　L5-91gにて検出した。

遺　構　長軸1.36m×短軸1.08m×深さ0.04～0.08m、方位はN-58°-Wを測る。平面形は長楕円形である。凹み状の炉穴である。火床は2カ所検出された。火床aは坑底の西壁際から立上がりにかけて、火床bは坑底中央からやや北東壁寄りに検出されている。

遺　物　条痕文片が出土しているが、極めて少ない。

所　見　火床の新旧関係は覆土の堆積が不明瞭であり、捉えられなかった。

F156

検出地区　L5-91gにて検出した。

遺　構　長軸1.04m×短軸0.72mぱつ深さ0.08m、方位はN-13°-Wを測る。平面形は卵形である。極めて掘込みが浅く、凹み状の炉穴である。火床は坑底の南寄りに検出された。

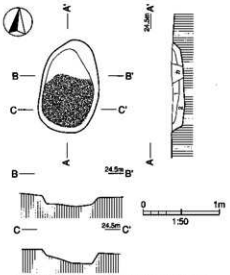
遺　物　遺物は検出されなかった。

所　見　単独の炉穴である。周辺の遺構状況から、条痕文期の所産と捉えている。

F157

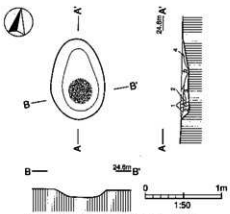
検出地区　L5-91gにて検出した。

遺　構　長軸0.96m×短軸0.80m×深さ0.08m、方位はN-14°-Eを測る。平面形は楕円形である。
火床は坑底中央から北寄りに検出された。



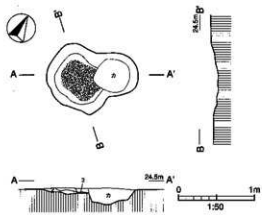
1 層　暗褐色土　径2mm以下の焼土粒子多含
2 層　赤褐色土　焼土主体　黒色土と暗褐色土微含

F153



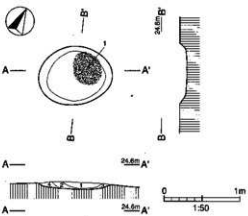
1 層　暗褐色土　焼土微含　ローム微含
2 層　暗褐色土　焼土微含　ローム微含
3 層　赤褐色土　焼土層
4 層　黄褐色土　焼土微含　暗褐土少含

F156



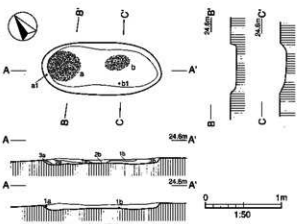
1 層　暗褐色土　径2mm以下の焼土粒子微含
2 層　暗褐色土　径2mm大の焼土粒子・焼土ブロック・ロームブロック含
3 層　赤褐色土　焼土主体としたファイヤーピットの火床部に相当する

F154



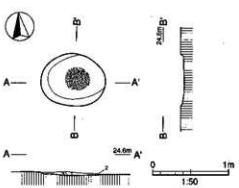
1 層　明褐色土　焼土粒多　ローム粒微含
2 層　暗黄褐色土　ロームが混合　焼土粒少含
3 層　暗褐色土　焼土粒少含　ローム微含
4 層　黄褐色土　ソフトローム主体　ローム微含

F157



1a 層　暗褐色土　焼土微含　ローム微含
2a 層　暗褐色土　焼土多含　ローム微含
3a 層　黄褐色土　焼土微含
1b 層　暗褐色土　焼土多含　ローム少含
2b 層　暗褐色土　ローム多含　焼土少含
3b 層　黄褐色土　焼土少含

F155



1 層　黄褐色土　ローム主体　焼土粒多含
2 層　黄褐色土　ローム主体　焼土粒多含
3 層　暗黄褐色土　ロームと暗褐色土混合　焼土粒微含

F158

図8　F153・F154・F155・F156・F157・F158

遺　　物　　出土遺物は極めて少ない。

所　　見　　ソフトロームを掘凹めただけの、凹み状の極めて浅い炉穴である。このような状態から、炉穴の坑底部が残されたものと捉えた、単独の炉穴である。

F158

検出地区　　L5-91gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.08m×短軸0.84m×深さ0.04m、平面形は楕円形である。極めて掘込みの浅い、凹み状の炉穴であり、東壁側は壁の立上がりは殆ど確認できなかった。火床は、坑底のほぼ中央に検出されている。掘込みが浅いため、覆土は１層のみの把握であった。

遺　　物　　凹み状の炉穴であるためか、遺物の出土はなかった。

所　　見　　遺存状態はF157と近似する、炉穴の坑底部のみが残された遺構である。平面形や火床の位置からみると、一見、炉跡のようでもあるが、しかし覆土や周辺の遺構状況から、条痕文期の炉穴と捉えた。

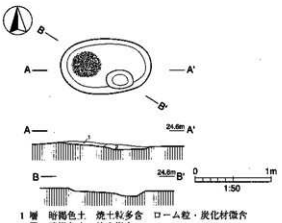


図９　F159

F159

検出地区　　L5-91gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.02m×短軸0.72m×深さ0.04～0.07m、方位はN-90°-Eを測る。平面形は楕円形である。ソフトロームを凹めたような、掘込みの極めて浅い凹み状の炉穴であり、坑底は西壁から東壁に向かって緩く下っている。火床は、坑底の西壁寄りにて検出された。また、坑底の南東壁際には、浅いピットが掘込まれていた。浅い炉穴のため、覆土が自然堆積かどうかは判然としなかった。

遺　　物　　遺物は出土しなかった。

所　　見　　出土遺物は無かったが、覆土や周辺の遺構状況から条痕文期の炉穴と捉えた。

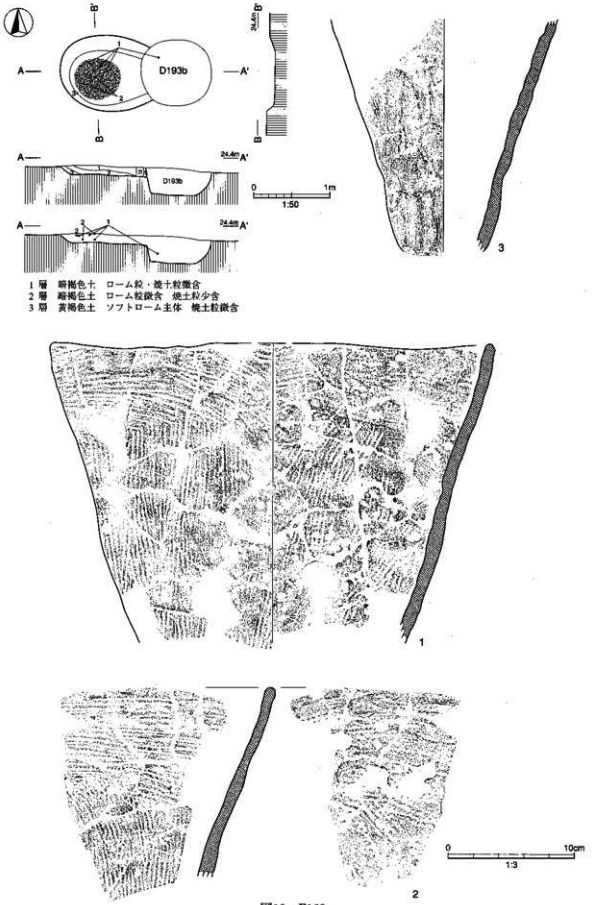
F160

検出地区　　L6-33gにて検出した。D193と重複する。

遺　　構　　長軸(1.04)m×短軸1.00m×深さ0.11m、方位はN-88°-Wを測る。平面形は楕円形である。ソフトロームを浅く掘込んだ、凹み状の炉穴である。西壁側は、重複するD193によって失われている。火床は、坑底の西壁寄りに１カ所検出された。

遺　　物　　出土は炉穴としては多いものであった。しかも大形破片が多く、しかも接合が容易であり、殆どの遺物を図示することができた。大形破片の出土というより、潰れた状態での出土といった方がよいかもしれない。底部片は出土していない。１～２はいずれも条痕文の深鉢であり、３は茎状工具による擦痕状のナデであった。

所　　見　　炉穴としては出土遺物の多い遺構であり、また、覆土が比較的整然と堆積している炉穴でもある。重複した使用の痕跡は窺えず、単独の使用と捉えられた。



1 層　暗褐色土　ローム粒・焼土粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒少含
3 層　黄褐色土　ソフトローム主体　焼土粒微含

図10　F160

表2　F160遺物観察表　　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(344)×－×(238)　小波状 外面　口縁－横位の条痕文　頸部－縦位の条痕文 内面　口縁－横位の条痕文　頸部－縦位の条痕文	暗褐～ 橙褐 橙褐 悪	繊維	口縁～ 胴部片	
2	縄文 深鉢	小波状 外面　口縁－横位、頸部縦位の条痕文 内面　口縁－横位、頸部斜位の条痕文	橙褐 普	繊維	口縁片	
3	縄文 深鉢	外面　胴部上半－横物の茎状工具によるナデか？ 内面　胴部上半－繊維の脱痕多	暗橙褐 暗褐 悪	繊維	胴部片	

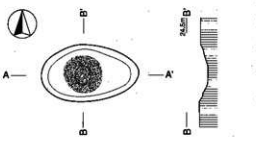


図11　F161

F161

検出地区　　L6-13gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.28m×短軸0.76m×深さ0.12m、方位はN-89°-Eを測る。平面形は長楕円形である。火床は、坑底中央を更に掘込んだピット内に1カ所のみ検出された。そのピットの坑底全体が火床となっていた。

覆土は3層に伴う浅いピットを、1・2、4層に伴う炉穴が掘込んでいることを示していた。

遺　　物　　遺物の出土は無かった。

所　　見　　覆土から2基の炉穴の重複と捉えられた。旧ピットが炉穴であるかは判然としなかったが、覆土の重複から炉穴と時間差のあまりない遺構であると考えられ、炉穴の可能性が大きいといえよう。

F162

検出地区　　L6-14gにて検出した。B068の柱穴群内に所在している。

遺　　構　　3基の炉穴の重複した遺構である。また、B068によって一部が失われている。

a坑は、長軸1.14m×短軸1.08m×深さ0.28m、方位N-2°-Eを測る。平面形は隅丸方形である。火床は坑底北東壁寄りに検出され、火床の北東側はB068によって失われていた。火床の赤化は強いものであった。

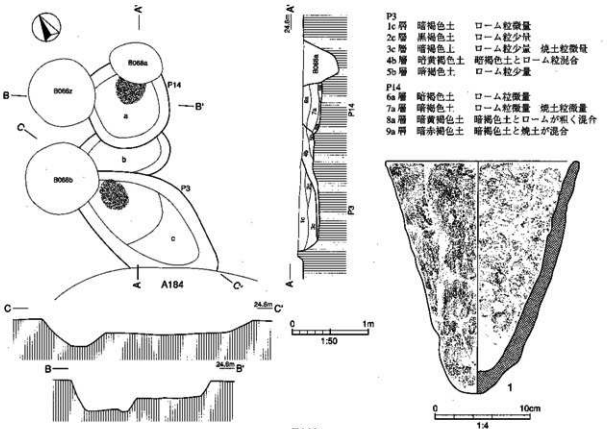
b坑は、長軸1.18m×短軸－m×深さ0.24m、方位はN-80°-Wを測る。平面形は楕円形である。明瞭な火床は検出されなかったが、坑底には火熱痕が残っており、火床と捉えた。

c坑は、長軸(2.04)m×短軸1.02m×深さ0.18m、方位はN-32°-Wを測る。平面形は歪な長楕円形である。火床は坑底の北壁際に検出し、淡く赤化したものであった。

3基の炉穴の重複のため、覆土は複雑に堆積しているが、各遺構の廃絶後は自然堆積である。

遺　　物　　条痕文片を主体に、若干の出土をみた。1は口径(148)mm、器高185mm、胎土に繊維を含むやや丸みを帯びた尖底の小型の深鉢である。口唇は角頭状で、器厚は8～12mmと厚いものである。外面は茎状工具による擦痕を施している。遺存度は4/5であった。

所　　見　　覆土の堆積状況より、新旧関係を火床a→火床b→火床cと捉えた。北から順次、南へ移動を行ったような炉穴である。



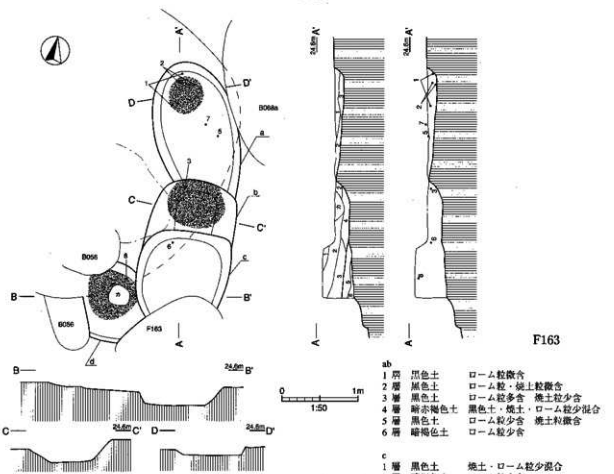


図12　F162・F163

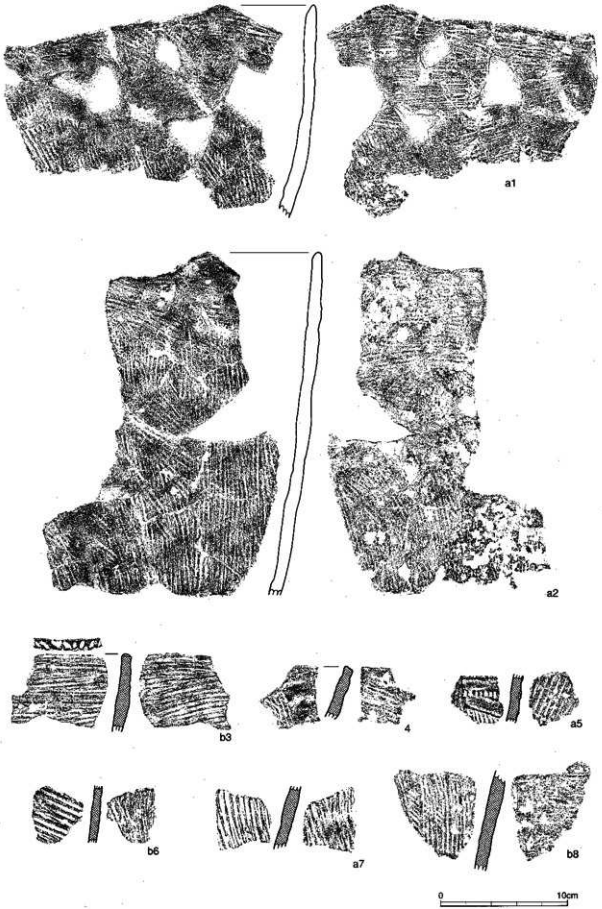


図13 F163（2）

F163

検出地区　L6-15gにて検出した。

遺　構　4基の炉穴の重複した遺構である。このため全体形はL字形となっているが、各坑とも楕円を基本形としているようである。

a坑は、長軸(1.93)m×短軸1.09m×深さ0.08m、方位はN-22°-Wを測る。平面形は楕円形である。火床は坑底の北壁寄りに検出され、赤化は強かった。

b坑は、長軸(0.99)m×短軸1.15m×深さ0.48m、方位はN-2°-Eを測る。平面形は隅丸方形か。火床は、坑底から北壁立上がりまで強く赤化していた。

c坑は、長軸(1.12)m×短軸1.19m×深さ0.28m、方位はN-2°-Wを測る。平面形は隅丸方形か。火床は検出されなかった。

d坑は、長軸－m×短軸(1.24)m×深さ0.09m、方位は不明である。平面形長楕円形と思われる。凹凸のある緩い傾斜のピットであり、坑底の北壁寄りから北壁の立上がりにかけて、強く赤化した火床は検出された。

遺　物　条痕文片が全体で40点余出土し、炉穴としては遺物の出土が多かった。しかしa坑に伴う出土が多かった。a坑は1・2・5・7、b坑は3・6・8が出土している。1～4は口縁部片で1・2は波状口縁で、内外面ともに斜位を中心とした条痕文を施している。3・4は平縁と思われる。3は内外面とも丁寧な条痕文を横位に、口唇部に刻みを施している。5～8は胴部片であり条痕文を施しているが、5は微隆起による区画内に施文する。

所　見　c坑は火床が検出されなかったが、覆土などの状態から炉穴の可能性が高いものと判断した。重複による新旧関係は覆土よりc坑→b坑→a坑と捉えたが、d坑とc坑については捉えられなかった。

F164

検出地区　L6-5gにて検出した。

遺　構　3基の炉穴と1基の土坑の重複である。

a坑は、長軸－m×短軸1.23m×深さ0.10m、方位はN-10°-Eを測る。平面形は楕円形である。火床は坑底北壁寄りで、赤化は強いものであった。

b坑は、長軸－m×短軸0.95m×深さ0.09m、方位はN-78°-Wを測る。平面形は楕円形である。淡く赤化した火床を検出した。

遺　物　重複した遺構としては遺物の出土は多かったが、D209がその主体であり、炉穴としては少なかった。

所　見　いずれも浅い掘込みの炉穴である。火床a・bの新旧は不明瞭であり、捉えられなかった。B209は火床aよりは新しいが、火床bとの新旧は攪乱のため捉えられなかった。

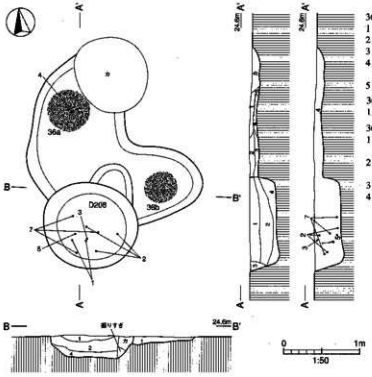
F165

検出地区　L6-4・5gにて検出した。

遺　構　長軸3.16m×短軸1.08m×深さ0.16～0.24m、方位はN-21°-Eを測る。平面形は長楕円形である。火床は3カ所検出され、火床a・cは赤化が強く、火床bは火熱痕が硬化しているが、淡く赤変した程度であった。

遺　物　条痕文片が出土するが、出土は稀であった。

所　見　火床の新旧関係は、火床c→火床b→火床aと捉えられた。火床cから始まり、北へ移動したような炉穴である。

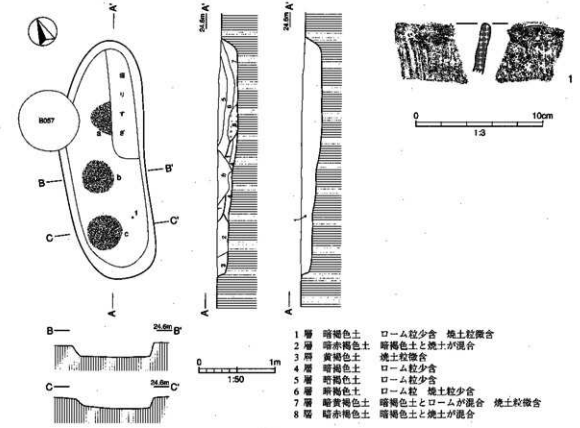


36a
1 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合
2 層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒少含
3 層　暗褐色土　焼土
4 層　赤褐色土　ローム粒、径５mm大ローム
ブロック少含
5 層　暗褐色土　ローム粒少含

36b
1 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒少含

36c
1 層　黒褐色土　ローム粒、径５mm大ローム
ブロック少含　焼土粒微含
2 層　黒褐色土　ローム粒、径５～10mm大ローム
ブロック多含　焼土粒多含
3 層　暗褐色土　暗褐色土ブロック
4 層　黒褐色土　ローム粒、径５～10mm大ローム
ブロック少含　焼土粒少含

図14　F164・D208



1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含
2 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合
3 層　黄褐色土　焼土粒微含
4 層　暗褐色土　ローム粒少含
5 層　暗褐色土　ローム粒少含
6 層　黒褐色土　ローム粒　焼土粒少含
7 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混合　焼土粒微含
8 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合

図15　F165

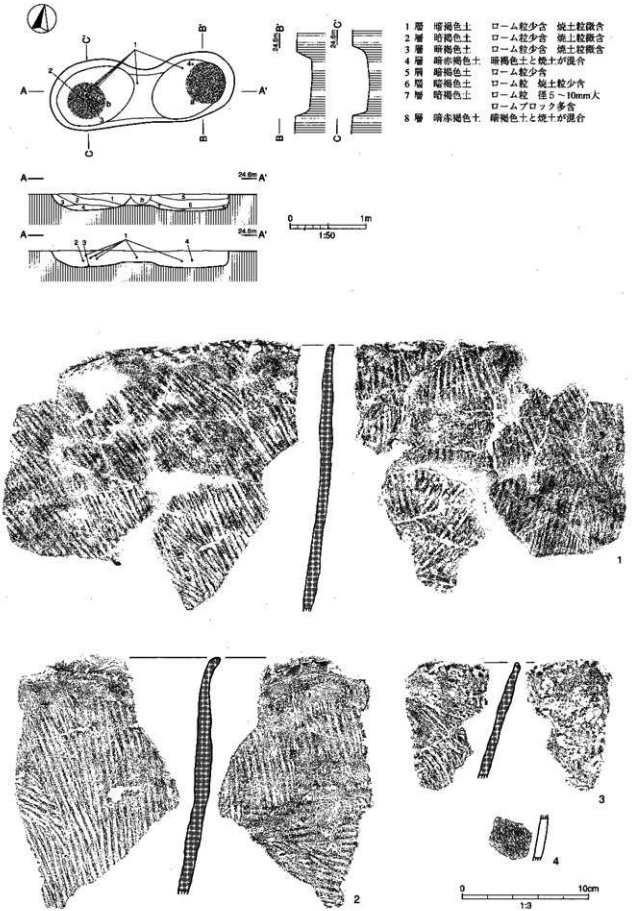

1 層 暗褐色土 ローム粒少含 焼土粒微含
2 層 暗褐色土 ローム粒少含 焼土粒微含
3 層 暗褐色土 ローム粒少含 焼土粒微含
4 層 暗赤褐色土 暗褐色土と焼土が混合
5 層 暗褐色土 ローム粒少含
6 層 暗褐色土 ローム粒 焼土粒少含
7 層 暗褐色土 ローム粒 径5～10mm大
ロームブロック多含
8 層 暗赤褐色土 暗褐色土と焼土が混合
24.6m
0 1m
1:50
0 10cm
1:3

図16 F166

F166

検出地区　L6-14gにて検出した。

遺　構　2基の炉穴の重複であり、全体の形状は眼鏡状の長楕円形である。中央はテラス状となり、一段高くなっている。

a坑は、長軸(1.41m)×短軸0.87m×深さ0.21m、方位はN-87°-Eを測る。平面形は不整楕円形である。火床は坑底の中央から東壁の立上がりにかけて検出し、赤化は強かった。中央テラス状の高まりは、覆土から本坑に伴うものと捉えた。

b坑は、長軸1.17m×短軸0.96m×深さ0.21m、方位はN-48°-Eを測る。平面形はやや形の崩れた卵形である。赤化の強い火床が、坑底の方位中央から検出されている。

遺　物　20片程の出土であったが、撚糸文も多かった。

所　見　火床の新旧関係は、覆土から火床a→火床b→火床cと捉えられた。撚糸文土器片の出土は、流込みと判断された。

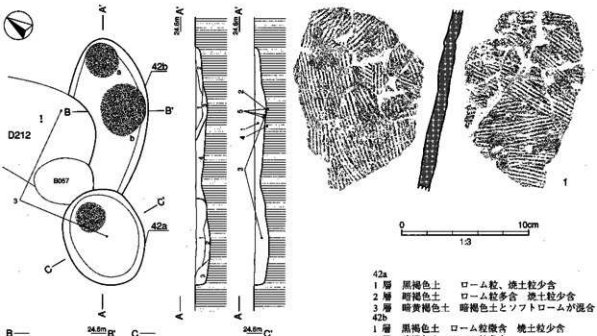


図17　F167a・b

F167

検出地区　L6-14gにて検出した。

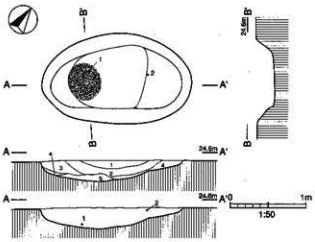
遺　構　2基の炉穴の重複であるがD213a・bやB057とも重複している。

a坑は、長軸1.29m×短軸1.04m×深さ0.17m、方位はN-27°-Eを測る。平面形は楕円形である。坑底北壁際に、強く赤化した火床が検出された。

b坑は、長軸(1.99)m×短軸1.04m×深さ0.10m、方位はN-56°-Eを測る。平面形は長楕円形である。坑底に火床は2カ所検出され、火床a・bともは赤化が弱かった。

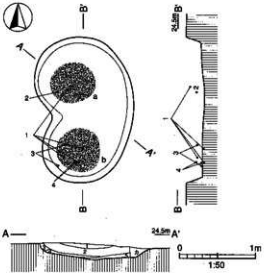
遺　物　条痕文片が40点ほど出土した。

所　見　D213a・bとF167a・bの、最低2基の炉穴と2基の土坑の重複であるが、覆土からは明瞭に捉えられなかった。火床はF167b火床b→F167b火床a・F167aと捉えられたが、F167b火床a・F167aの新旧関係は捉えられなかった。



1 層　黒褐色土　ローム粒少含
2 層　黒褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含
3 層　暗褐色土　ローム粒と焼土粒少含
4 層　暗褐色土　ローム粒多含
5 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒多含

F168

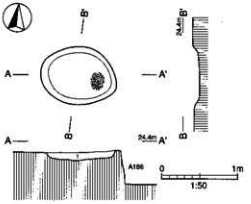


1 層　黒色土　ローム粒微含
2 層　黒色土　ローム粒少含
3 層　暗褐色土　ローム粒微含
4 層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒少含
5 層　暗黄褐色土　暗褐色土、ローム粒混合、黒色土少含

F170

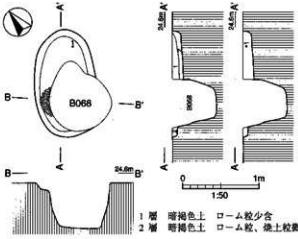
F168　1

F168　2

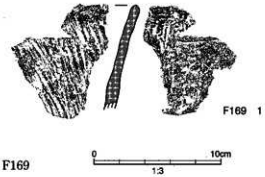


1 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混合 焼土粒を微含

F171



1 層　暗褐色土　ローム粒少含
2 層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒微含

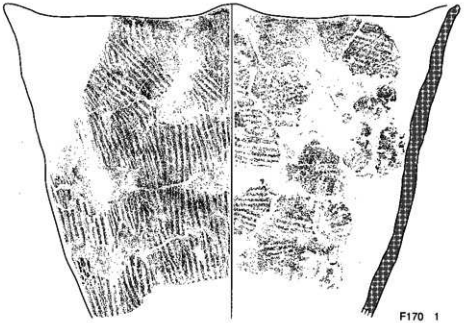


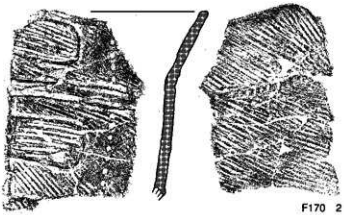
F169　1

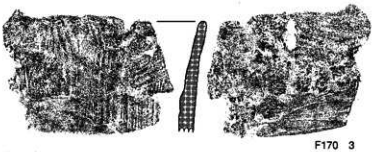
F169

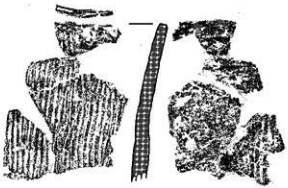
0　10cm
1:3

図18　F168・F169・F170・F171









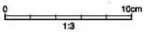


図19 F170 (2)

F168

検出地区　L6-14gにて検出した。

遺　構　長軸1.98m×短軸1.21m×深さ0.27m、方位はN-51°-Eを測る。平面形は不整楕円形である。火床は坑底のやや西壁寄りに、検出され、赤化は強かった。

遺　物　条痕文片が、10点余出土した。

所　見　単独の土坑である。

F169

検出地区　L6-5gにて検出した。

遺　構　長軸1.43m×短軸0.81m×深さ009m、方位はN-39°-Eを測る。平面形は楕円形である。B068と南側が大きく重複するため、火床が広範囲にわたって失われているが、赤化には至らない火熱痕のみの火床であった。確認できる覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　条痕文片の出土はあるが、極めて稀である。

所　見　単独の炉穴である。

F170

検出地区　L6-6gにて検出した。

遺　構　長軸1.96m×短軸0.84m×深さ0.24m、方位はN-0°-Eを測る。平面形中央で屈曲した不整形である。火床は２カ所検出され、それぞれ坑底に更に浅く凹んだピットの坑底で検出された。それぞれ赤化は強く認められた。覆土は、坑底に暗褐色土、中層から上層が黒色土の自然堆積であった。

遺　物　条痕文片が20点余出土している。１は大きく接合され、推定口径360mm現存高320mmある。小波状の口縁で、外面は口縁に縦位及び斜位、口縁下は斜位の条痕文を、内面は横位に近い斜位の条痕文を施しているものであった。

所　見　２カ所の火床及び炉穴の平面形から、本来はそれぞれピットを持った２基の炉穴の重複と捉えられるものである。しかし覆土からは新旧関係は捉えられなかった。しかし遺物１の出土状況から火床ａが古く、火床ｂが新しいものと捉えた。

表３　F170遺物観察表　(単位mm)

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁　外面斜位縦位条痕文　波状口縁 頸部内面－斜位条痕文	暗褐～ 橙褐 悪	繊維	口縁～ 胴部片	

F171

検出地区　L6-26gにて検出した。

遺　構　長軸1.08m×短軸0.76m×深さ0.08m、方位はN-78°-Wを測る。平面形は楕円形である。浅い凹み状の炉穴である。A186の壁脇に所在し、また、B062に隣接している。

東壁際に小さな火床を検出した。火熱痕のみの火床であり、赤化には至っていなかった。

遺　物　出土していない。

所　見　単独の炉穴である。火床が小さく火熱痕のみであることから、使用期間は短かった炉穴と捉えた。

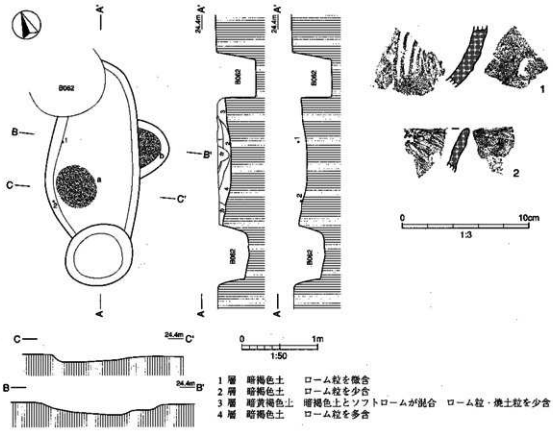


図20　F172

F172

検出地区　L6-36gにて検出した。

遺　構　平面形は長楕円形である。その炉穴本体に、張り出し状にもう１基の炉穴が重複しており、それぞれに火床が検出された。

火床ａに伴うピットは、長軸(2.36)m×短軸1.23m×深さ0.18m、方位はN-24°-Eを測る。火床ａは坑底中央よりやや南西壁寄りにあり、赤化したものであった。

火床ｂはに伴うピットは、長軸(0.39)m×短軸0.78m×深さ0.08m、方位はN-76°-Wを計る。火力のやや強力な火熱痕の火床が、坑底全域にわたって検出された。火床は赤化には至っていなかった。

遺　物　条痕文片の出土は稀であった。

所　見　炉穴の新旧関係は、覆土からは明らかにすることはできなかったが、火床の遺存状況から火床ｂ→火床ａと捉えた。なお、B062と重複するというより掘立柱建物跡群内に所在する炉穴である。

F173

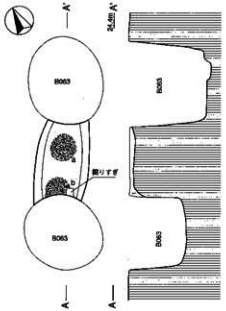
検出地区　L6-36gにて検出した。

遺　構　長軸(0.96)m×短軸0.68m×深さ0.06m、方位はN-37°-Eを測る。平面形は長楕円形となっており、東北壁と南西壁側はそれぞれB063の柱穴によって失われている。いずれもかすかに赤変する火床が、坑底に２カ所検出された。

また、掘込みの極めて浅い凹み状の遺構となっているため、覆土は不明瞭であり、１層のみの把握であった。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　ソフトロームを浅く掘込んだ状態であり、炉穴の坑底部のみの検出であったと捉えている。このため覆土の把握も不明瞭となり、火床の新旧関係は覆土からは捉えられなかった。



1 層　暗褐色土　ローム粒・焼土粒を少含

1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒　焼土粒微含
3 層　暗黄褐色土　暗褐色土とローム混合　焼土粒微含
4 層　暗褐色土　ローム粒　焼土粒微含
5 層　暗褐色土　ローム粒　焼土粒少含
6 層　暗褐色土　ローム粒を多含
7 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合
8 層　暗黄褐色土　暗褐色土と焼土が混合　焼土粒微含
9 層　暗黄褐色土　暗褐色土と焼土が混合
10 層　暗黄褐色土　暗褐色土と焼土が混合　焼土粒微含
11 層　黒褐色土　ローム粒を微含
12 層　黒褐色土　ローム粒　焼土粒微含
13 層　黒褐色土　ローム粒少含　焼土粒多含
14 層　暗褐色土　ローム粒を微含
15 層　暗褐色土　ローム粒　焼土粒少含

図21　F173

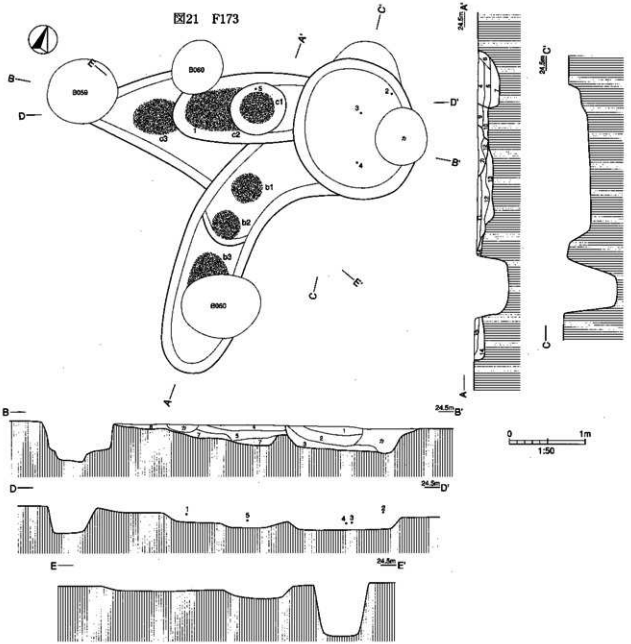


図22　F174a・b・D217

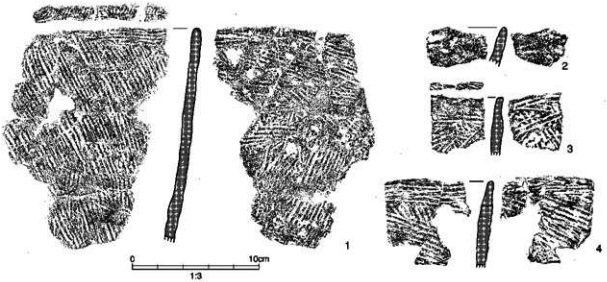


図23　F174a・b・D217（2）

F074

検出地区　L6-35gにて検出した。

遺　構　複数の炉穴が重複したものであり、平面形はアメーバ状となっている。また、土坑や掘立柱建物跡と重複しており、更に複雑になっている。火床は６カ所検出したがピットは５基程度であった。

火床b3は、長軸(1.76)m×短軸0.88m×深さ0.12m、方位はN-3°-Eを測る。

火床b2・b3は長軸（1.56)m×短軸0.90m×深さ0.09～0.14m、方位はN-71°-Eを測る。火床ｂは南北に連なるような状態である。火床b1・b2は赤化は強く、火床b3は火熱痕のみであった。

火床c1～c3は３坑に分かれるが、全体として長軸2.7m×短軸0.93m×深さ0.06～0.26m、方位はN-71°-Eを測る。火床は横に連結したような様であった。火床ｃはいずれも赤化したものであるが、火床c1は坑底に更に浅く掘込んだピット内にて検出した。

遺　物　条痕文片10片強の出土であり、重複した炉穴としては少ない出土である。黒曜石剥片も出土している。

所　見　各炉穴及び火床の新旧関係は、火床b3→b2→b1と捉えた。また、火床b1は火床b1より新しいものと捉えた。D217は火床c1より新しかった。

F175

検出地区　L6-58gにて検出した。

遺　構　長軸0.88m×短軸0.64m×深さ0.16m、方位はN-24°-Eを測る。平面形は楕円形である。皿状の緩やかな傾斜をもって坑底に至る炉穴である。火床は攪乱によって半分失われていたが、坑底北東壁寄りに検出した。火熱痕のみの火床であり、赤化はしていなかった。

遺　物　出土した遺物は無かった。

所　見　単独の炉穴である。

F176

検出地区　L6-58gにて検出した。

遺　構　長軸2.40m×短軸1.48m×深さ0.20m、方位はN-22°-Wを測る。平面形は不整楕円形である。皿状の、緩やかな傾斜をもって坑底に至る遺構であり、坑底中央には更に浅い凹み状のピットが掘込まれていた。火床は２カ所検出した。火床ａは北壁寄りに確認し、赤化したのみといった感じを与えるものであった。火床ｂは坑底中央の凹み状の中に確認し、同じく赤化したのみのものであった。

遺　物　条痕文の小片が若干出土している。

所　見　覆土が不明瞭であり、火床の新旧を捉えることはできなかった。A191と重複している。

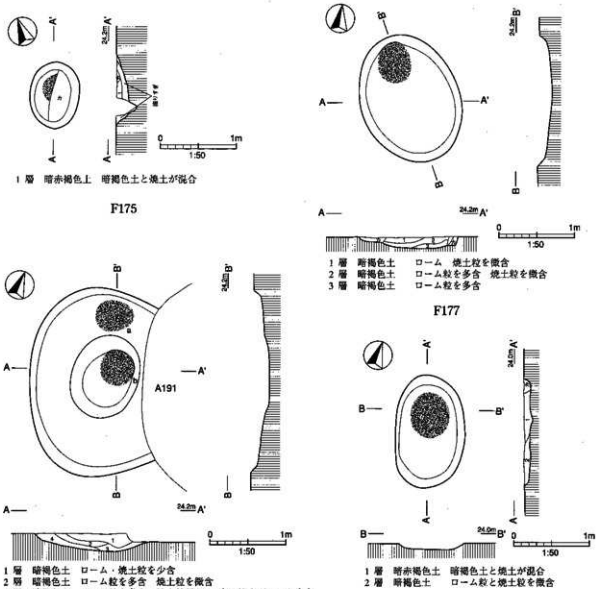


図24　F175・F176・F177・F178

F177

検出地区　L6-58gにて検出した。

遺　構　長軸1.72m×短軸1.28m×深さ0.20m、方位はN-27°-Wを測る。平面形は楕円形である。若干凹凸ある坑底であり、その坑底の北壁際にうっすらと赤変した、どちらかというと火熱痕のみの火床を検出した。

遺　物　条痕文片が2片出土したのみであった。

所　見　緩やかに彎曲した坑底であり、覆土は比較的整然と堆積していた。

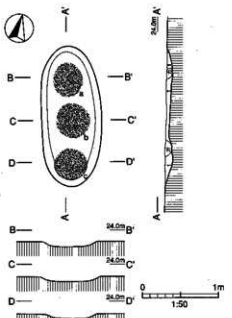
F178

検出地区　L6-47gにて検出した。

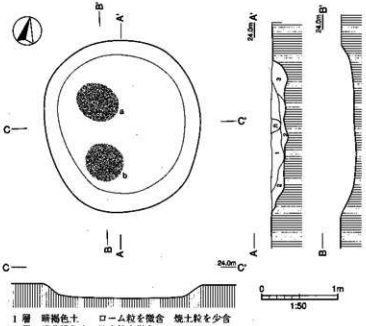
遺　構　長軸1.48m×短軸0.92m×深さ0.12m、方位はN-18°-Wを測る。平面形は楕円形である。火床は坑底の北側に、赤化したものを検出した。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　凹凸ある坑底の、単独の炉穴である。



F179



F180

図25　F179・F180

F179

検出地区　L6-48gにて検出した。

遺　構　長軸1.88m×短軸0.76m×深さ0.08m、方位はN-14°-Wを測る。平面形は長楕円形である。火床は坑底に3カ所検出したが、いずれも火熱痕の火床であり、赤変は部分的であった。凹み状の炉穴であり、南北に直線的に連なる火床である。

遺　物　条痕文の小片が出土するのみであった。

所　見　凹み状の浅い炉穴であり、覆土からは新旧関係を捉えきれなかった。火床cは坑底から壁の立上がりにかけて広がる火床であった。

F180

検出地区　L6-48gにて検出した。

遺　構　長軸2.38m×短軸2.04m×深さ0.18～0.20m、方位はN-14°-Wを測る。平面形は略円形である。坑底は若干凹凸がある炉穴であり、この坑底に火床を2カ所検出した。いずれも赤化は強く、それぞれの火床の位置は坑底中央というより、若干壁寄りに確認された。

遺　物　条痕文小片が1片出土したのみであった。

所　見　覆土からは新旧関係は捉えられなかった。ピットの規模や坑底の凹凸などから、本来は2坑あったと考えられる炉穴である。

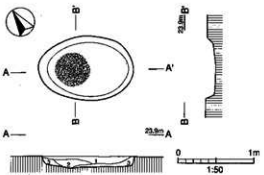
F181

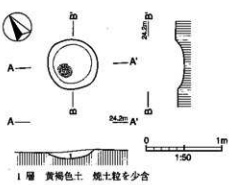
検出地区　L6-59gにて検出した。

遺　構　長軸1.24m×短軸0.81m×深さ0.12m、方位はN-54°-Wを測る。平面形は楕円形である。坑底の中央からやや北西壁寄りに火床を検出したが、赤化はするもののやや弱い感じを与えるものである。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　小規模な炉穴であるが、火床及び焼土の堆積から最低2度にわたる使用と思われる。





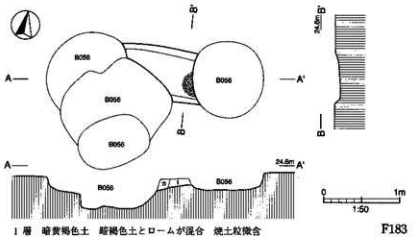


図26　F181・F182・F183

F182

検出地区　L6-48gにて検出した。

遺　構　長軸0.64m×短軸0.64m×0.08m、方位はN-32°-Eを測る。平面形は略円形である。かすかな火熱痕の火床が、西壁寄りに検出された。炉穴として小さな火床であった。掘込みが浅いため、覆土は1層のみの把握であった。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　上谷遺跡内にあっても小規模な炉穴であり、凹み状の炉穴であった。また、火床の規模も小さく、炉穴としても不明瞭な遺構であった。

F183

検出地区　L6-16gにて検出した。

遺　構　B056掘立柱穴群内に所在するため、東壁・西壁が失われた炉穴である。

長軸(0.86)m×短軸0.68m×深さ0.11m、方位はN-89°-Wを測る。平面形は長楕円形である。ほぼ平坦な坑底であり、B056柱穴によって火床の大半は失われているが、この坑底の東寄りに火床を検出した。火床中央が失われているためか、火熱のため赤変はしていたが、赤色硬化は認められなかった。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　B056との重複が著しく、全体を捉えることはできなかった。また、このため炉穴としての性格は判然としない。

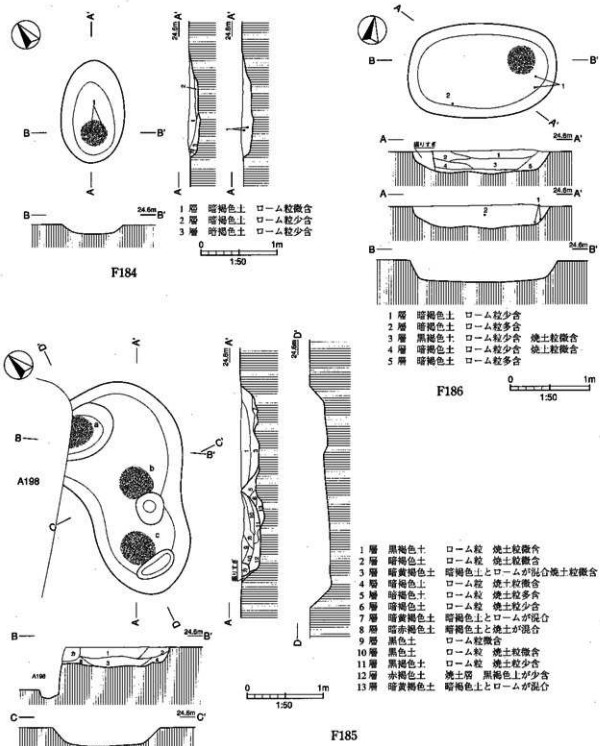


図27 F184・F185・F186

F184

検出地区　L6-4gにて検出した。

遺　構　長軸1.36m×短軸0.82m×深さ0.12m、方位はN-37°-Eを測る。平面形は長楕円形であり。掘込みの浅いピットであり、単独の炉穴である。坑底の南西壁側に、赤化した火床を検出した。覆土は暗褐色土を主体とした、遺構廃絶後の自然堆積であった。

遺　物　条痕文片を少量出土した。

所　見　遺構廃絶後に自然堆積によって埋没した炉穴であり、覆土からは２次使用は認められない

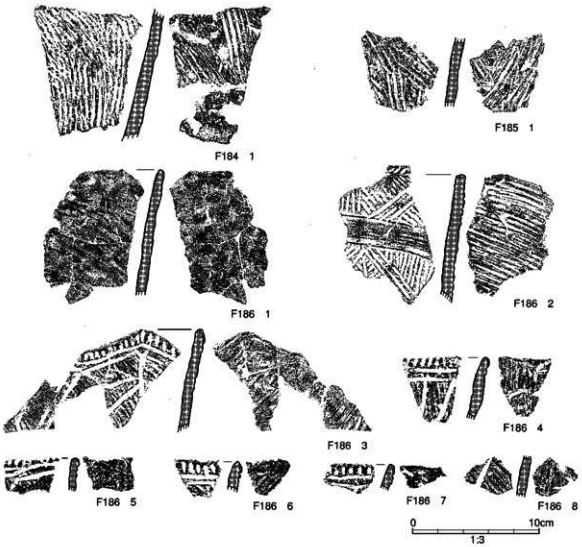


図28　F184・F185・F186（2）

ものであり、比較的整然とした堆積の炉穴であった。

F185

検出地区　L6-4gにて検出した。

遺　構　長楕円形の２坑が、L字状に重複した炉穴である。また、A198とも重複している。

規模は意識的に計測した。長軸は2.80m×短軸1.40m×深さ0.24m、方位はN-21°-Eを測る。坑底は若干の凹凸があるもので、更に浅いピットが２基確認された。この坑底に火床を３カ所検出した。いずれも赤化した火床であった。

遺　物　条痕文片を少量出土している。１は内外面ともに斜位の条痕文を施すものである。

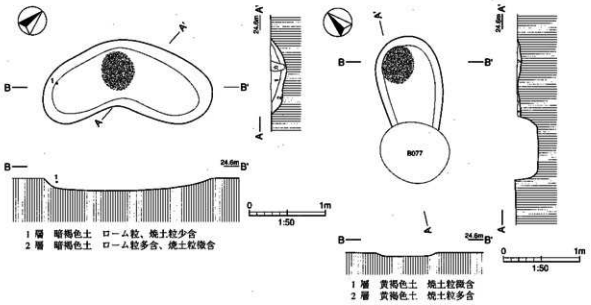
F186

検出地区　L6-4gにて検出した。

遺　構　長軸1.96m×短軸1.2m×深さ0.26m、方位はN-80°-Wを測る。平面形は長楕円形での、単独の炉穴である。坑底の北東コーナーに赤化した火床を検出した。

遺　物　20片弱の条痕文片が出土している。１は擦痕状にナデたいる。２～３は区画内に沈線を施すもので、微隆起区画と沈線区画の両者が共伴している。口縁直下に刻みを施すものが多かった。

所　見　覆土より新旧関係を火床ｂ→火床ａ・ｃと捉えた。しかし火床ａ・ｃの新旧関係は捉えられなかった。



F187　　F188

図29　F187・F188

F187

検出地区　L5-65gにて検出した。

遺　構　長軸2.16m×短軸0.88m×深さ0.21m、方位は不明である。平面形は緩く「くの字」状に屈曲する形状である。赤化した火床を、坑底の屈曲部に１カ所検出した。

遺　物　20片の条痕文片が出土している。

所　見　火床の検出は１カ所であり、覆土からも捉えられなかったが、屈曲する平面形より２基の炉穴の重複と考えられる遺構であった。また、火床が坑の略中央に位置することから、それぞれの炉穴による壁際の火床の可能性もあると考えている。

F188

検出地区　L5-94gにて検出した。

遺　構　長軸(1.14)m×短軸0.84m×深さ0.04m、方位は測定不能であり、平面形は長楕円形であり、B077と重複する。坑底の北東コーナーに、赤化した火床を検出した。覆土は２層に捉えたが、殆ど差が無く、坑底の凹凸によって分層した。

遺　物　遺物は出土しなかった。

所　見　極めて浅い掘込みの炉穴である。長軸はB077によって失われ、全体は不明であった。

F189

検出地区　L5-94gにて検出した。

遺　構　長軸(1.26)m×短軸0.96m×深さ0.36m、方位はN-42°-Eを測る。平面形は長楕円形である。北東側がB076によって失われている。坑底は火床に向かって緩やかにに傾斜している。この坑底の南西側から壁の一部にかけて、赤化が強い火床を検出した。覆土は、やや複雑な堆積状態を示している。

遺　物　条痕文片が５片出土している。

所　見　覆土の堆積状態から、最低２乃至３回の再利用が捉えられた。１・２層と３層以下では堆積状況が異なり、埋没過程において掘返しが行われたことが窺えた。

F190

検出地区　L5-72gにて検出した。

遺　構　長軸1.60m×短軸(0.98)m×深さ0.38m、方位はN-2°-Eを測る。平面形は長楕円形の単独の炉穴である。B073と重複する。

坑底はやや凹凸があり、北壁下に少しピットが掘込まれている。壁はやや丸みをもって立ち上がっている。坑底の略中央に赤化した火床を検出した。

遺　物　撚糸文、条痕文片を合わせて30点余の出土があったが、条痕文片が多かった。

所　見　本炉穴の覆土は比較的整然と堆積したものであり、遺構廃絶後の放置と自然埋没を窺わせるものであった。

F191

検出地区　L5-73gにて検出した。

遺　構　土坑としては３基程度の重複した炉穴であり、平面形はこのためアメーバ状である。意識的に計測したが、長軸2.72m×短軸1.48m×深さ0.32m、方位はN-12°-Eを測る。B072と重複する。火床は３基検出され、火床ａは赤化が強いものであった。火床の深さは0.41mであった。火床ｂは坑底から壁面にかけて、強く赤色硬化していた。火床の深さは0.32mであった。火床ｃは赤化は弱く、うっすらと赤変する程度であった。火床の深さは0.32mであった。

覆土は１～５層が火床ａ、８・９層が火床ｂに伴う覆土である。

遺　物　撚糸文・条痕文片が若干出土しているが、その主体は条痕文片であった。

所　見　覆土から新旧関係を火床ｂ→火床ａと捉えられた。火床ｃとの関係は不明であった。覆土のうち６・７層が度の火床に伴うものか判然としなかった。火床ｃに伴うものであるかもしれない。

F192

検出地区　L5-72gにて検出した。

遺　構　長軸1.92m×短軸1.26m×深さ0.24m、方位はN-25°-Eを測る。平面形は石匙状である。B072と重複する。火床は２カ所検出した。火床ａは、坑底から一部壁面まで赤化した火床である。火床ｂは、赤化している。

遺　物　条痕文片が若干出土している。

所　見　火床の新旧関係は覆土がやや不明瞭であったが、火床ｂ→火床ａと捉えた。遺構の重複により失われた火床があると想定され、最低３基の炉穴と捉えている。

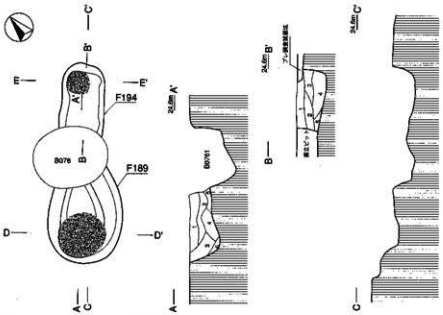
F193

検出地区　L5-72gにて検出した。

遺　構　長軸2.40m×短軸2.36m×深さ0.32～0.36m、方位はN-24°-Eを測る。平面形は不整円形である。本遺構の規模は意識的に捉えているところがある。火床は２カ所検出され、ともに赤化の強いものであった。

遺　物　条痕文小片が出土したが、稀である。

所　見　覆土から火床は失われているが、炉穴と捉えられるものが最低１基が確認されている。そして新旧関係は火床ａ・ｂ→火床不明炉穴となっている。火床ａ・ｂの新旧関係は捉えられなかった。また、最低４基の重複ではなかったかと捉えている。

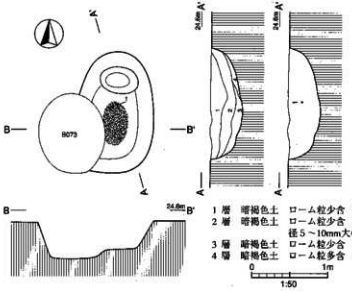


1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含
2 層　暗赤褐色土　ローム粒　径5mm大の
ロームブロック少含
3 層　暗褐色土　ローム粒　焼土粒少含
4 層　赤褐色土　焼土層
5 層　暗褐色土　ローム粒　焼土粒少含
6 層　暗黄褐色土　暗褐色土とローム混合

1 層　黒色土　ローム粒少含　焼土粒
径1mm焼土ブロック微含
2 層　黒色土　焼土粒微含　ロームブロック含
3 層　黒色土　焼土粒、ブロック多含
4 層　赤色土　焼土層
5 層　黒色土　汚れたローム粒、焼土粒含

0　1m
1:50

F189・F194



1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含
径5～10mm大のロームブロック多含
3 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒多含
4 層　暗褐色土　ローム粒多含　焼土粒少含

0　1m
1:50

F190

図30　F189・F194・F190

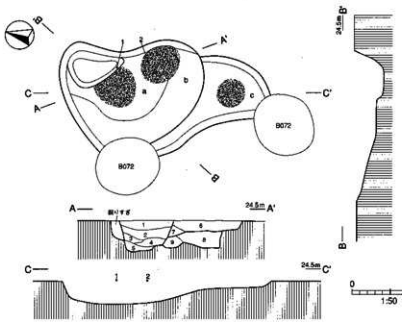
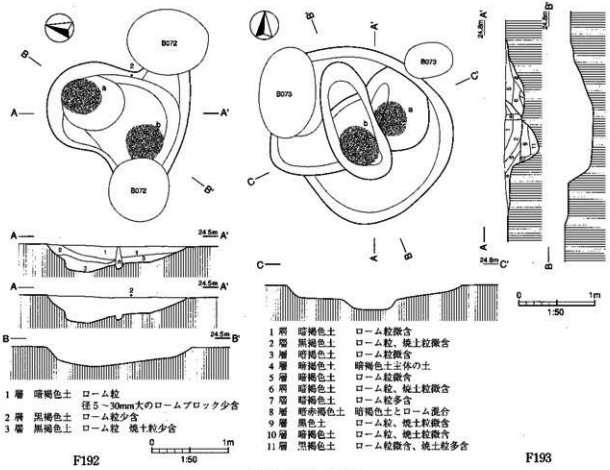


図31　F191



F192　　F193

図32　F192・F193

F194

検出地区　L5-94gにて検出した。

遺　構　長軸（0.83）m×短軸0.55m×深さ0.38m、方位はN-44°-Eを測る。平面形は隅丸長方形である。B076と重複している。坑底は北東壁にかけて緩く下っていくものである。この坑底の北から北東コーナーの壁中位まで赤化した火床を検出した。壁は一部オーバーハングしている。

遺　物　条痕文片が出土しているが、その出土量は稀であった。尖底部が出土している。

所　見　旧石器時代の確認調査において検出し、遺構確認面においては確認しずらかった炉穴である。調査時において北壁側のオーバーハングは、遺構廃絶後の崩落とは捉えられなかった。煙道付の炉穴と考えたいが、明確にはできなかった。煙道を有する炉穴の場合は、近接するF189との関係が考えられる遺構である。

F195

検出地区　L5-96gにて検出した。

遺　構　長軸1.92m×短軸1.52m×深さ0.18m、方位はN-37°-Wを測る。平面形は不整楕円形である。坑底には凹凸があり、坑底中央から北西壁寄りが一段高くなり、テラス状となっている。火床は2カ所検出され、ともに南西壁側に掘込まれた浅いピット内に確認した。また、いずれの火床も赤化したものであり、特に火床aは壁面まで赤化したものであった。

遺　物　条痕文片が若干出土している。1～3・6は外面は斜位の条痕文を、内面は3以外は粗くナデに近いものであった。4・5は微隆起区画内に集合沈線を施している。

所　見　覆土はやや複雑な堆積を示し、大きく1～3層と4～7層に捉えられ、掘返しの様子を示すものである。しかし火床の新旧関係は捉えられなかった。

F196

検出地区　L5-53gにて検出した。

遺　構　大きく4基の炉穴の重複した遺構である。このため全体の平面形は、アメーバ状となっている。

a坑は、長軸（0.60）m×短軸0.79m×深さ0.16m、方位はN-27°-Wを測る。平面形は楕円形となっている。火床は検出されなかった。

b坑は、長軸2.05m×短軸（1.20）m×深さ0.36m、方位はN-41°-Wを測る。平面形は不整形である。火床は坑底中央から南西壁寄りに検出された。

c坑は、長軸（0.57）m×短軸0.68m×深さ0.28m、方位はN-10°-Wを測る。平面形は不整形である。火床は坑底の略中央で検出された。

d坑は、長軸（2.09）m×短軸1.24m×深さ0.36m、方位はN-50°-Eを測る。平面形は不整形である。火床は2カ所検出され、いずれも東壁寄りであった。火床は2カ所とも赤化していた。

遺　物　条痕文片が若干出土している。1・2とも外面は斜位の条痕文を施し、内面は粗くなっていた。

所　見　一見、錯綜した炉穴群である。覆土からは、火床及びピットの新旧関係は捉えることができなかった。

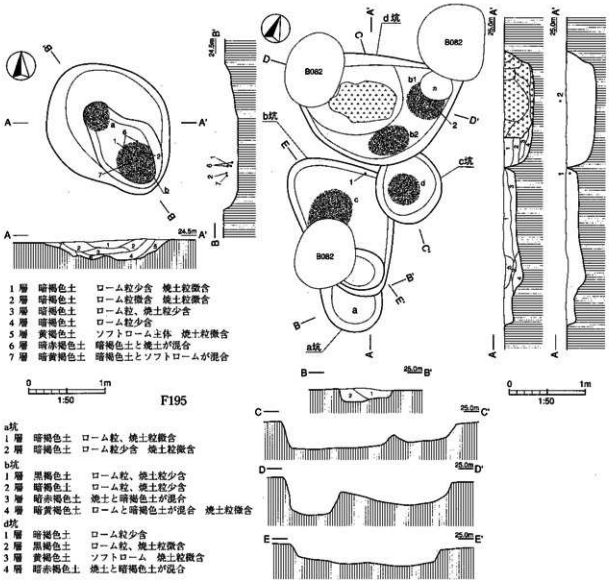


図33　F195・F196・D230

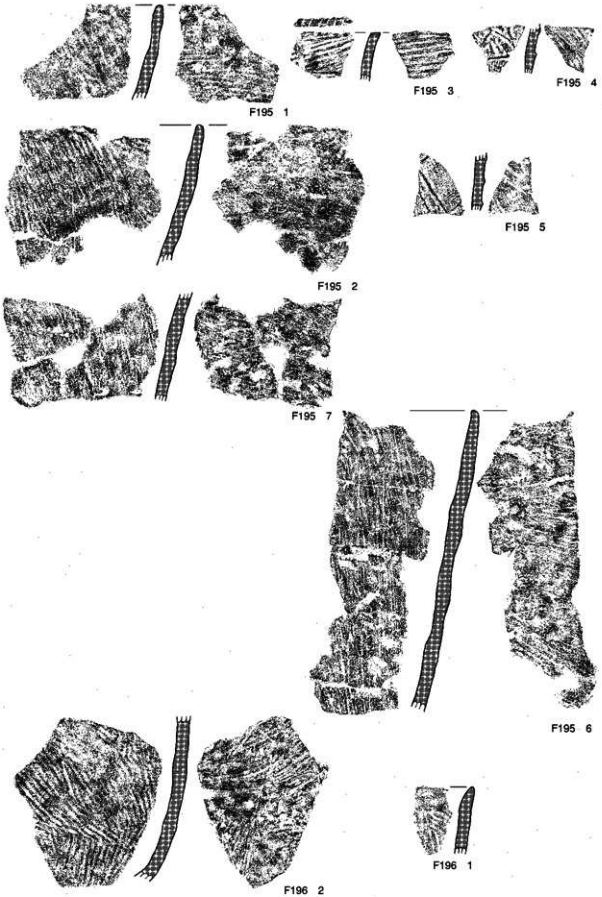
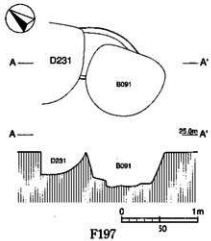


図34 F195・F196・D230（2）



F197

F197

検出地区　L4-53gにて検出した。

遺　構　長軸(0.72)m×短軸0.69m×深さ0.36m、方位はN-36°-Wを測る。平面形は楕円形である。火床は重複のためか、検出されなかった。

遺　物　条痕文片が稀に出土した。

所　見　火床は検出されなかったが、覆土の状況などから炉穴と捉えた。

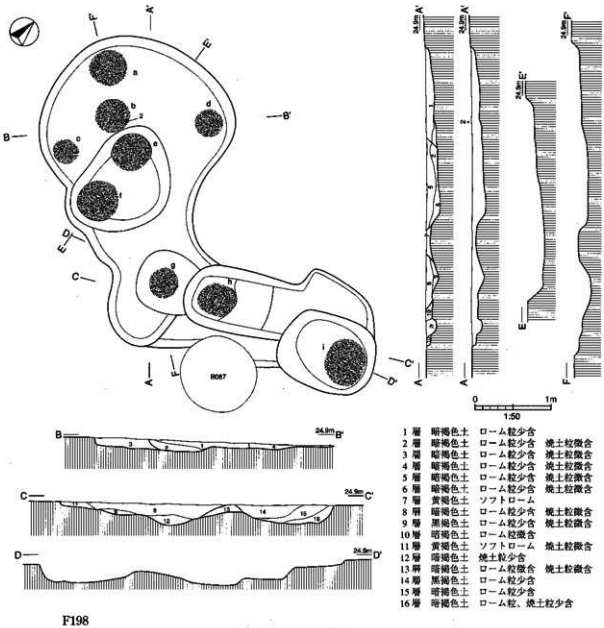


図35　F197・F198

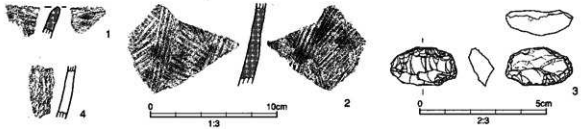


図36　F198（2）

F198

検出地区　L4-53gにて検出した。B087と重複する。

遺　構　検出できたピットは6坑であるが、9カ所の火床を検出した。火床から捉えると最低9基の炉穴が重複した遺構であり、このため平面形はアメーバ状となっている。規模は全体で捉えたが、北東軸は3.44m、北西軸は4.08mを測る。各火床までの深さは火床aが0.10m、火床bは0.12m、火床cは0.11m、火床dは0.07m、火床eは0.17m、火床fは0.20m、火床gは0.24m、火床hは0.32m、火床iは0.24mとなっていた。また、火床a・c・f・h・iの5カ所は赤化は弱く、火床b・d・e・gの4カ所は赤色硬化が強かった。

遺　物　撚糸文・条痕文片が僅かに出土したが、条痕文が多かった。黒曜石剥片も出土している。

所　見　覆土より炉穴の新旧関係は、火床c→火床a・b→火床d・e・fとなり、火床d・e・fの新旧は捉えられなかった。また、火床g→火床hとなっている。火床iの新旧は捉えられなかった。なお、覆土の堆積状況から、火床(x)が失われている炉穴が想定される。この火床xは、火床e・f、火床h・iより古いものである。

F199

検出地区　L4-53gにて検出した。

遺　構　長軸(1.20)m×短軸1.04m×深さ0.36m、方位はN-77°-Eを測る。平面形は楕円形である。火床は2カ所検出した。火床aは赤化は弱かった。東壁側の一段高いテラス状の位置に、やはり赤化の弱い火床bを検出した。

遺　物　条痕文片が若干出土した。

所　見　覆土からは、火床の新旧関係は捉えられなかった。火床の配列及び坑底の状況から、火床b→火床aと捉えた。

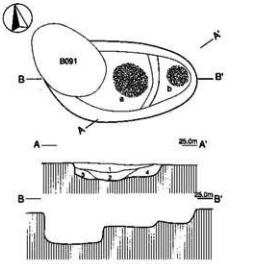
F200

検出地区　L4-63gにて検出した。B087と重複する。

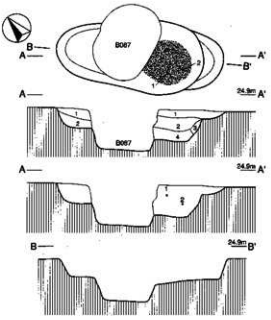
遺　構　長軸2.12m×短軸(0.88)m×深さ0.20m、方位はN-18°-Eを測る。平面形は長楕円形である。火床は2カ所検出した。火床aは、凹み状となる坑中央に位置し、火床bは西壁寄りに検出した。いずれの火床も赤化していた。

遺　物　撚糸文、条痕文片が若干出土した。

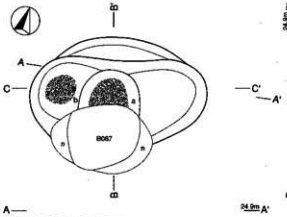
所　見　覆土や平面形等から新旧関係は火床b→火床aかと思われるが、新旧関係は不明瞭であった。



F199



F200



1 層　黒褐色土　ローム粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒微含
3 層　黒褐色土　ローム粒、径5mm大のロームブロック少含
4 層　暗褐色土　ローム粒微含

0
1m
1:50

F201

図37　F199・F200・F201

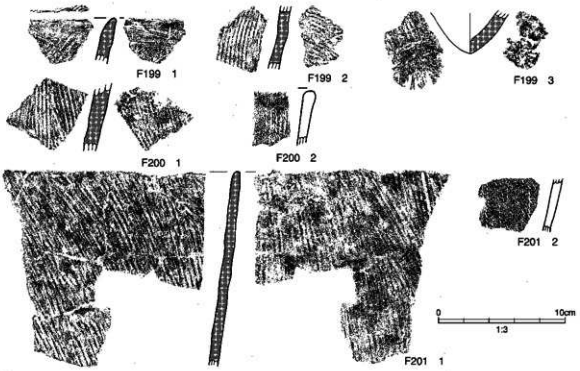


図38　F199・F200・F201（2）

F201

検出地区　L5-63gにて検出した。B087と重複している。

遺　構　長軸1.92m×短軸0.96m×深さ0.42m、方位はN-45°-Wを測る。炉穴本体から南東にテラス状に張出した部分をいれると、長軸は2.20mを測ることとなる。平面形は長楕円形である。南東壁際に火床を１カ所検出したが、火床の赤化は強かった。また、B087との重複によって、火床は北西側を失っていた。

遺　物　撚糸文、条痕文片が10点余出土したが、条痕文片が多かった。１は平縁の口縁部片であり、内外面ともに斜位の丁寧な条痕文を施している。また、２はやや粗な撚糸文を施すものであった。

所　見　炉穴中央をB087によって大きく失う遺構である。炉穴の規模に対して、深さのある遺構である。また、遺構の遺存状況などから火床は１基と考えられる。

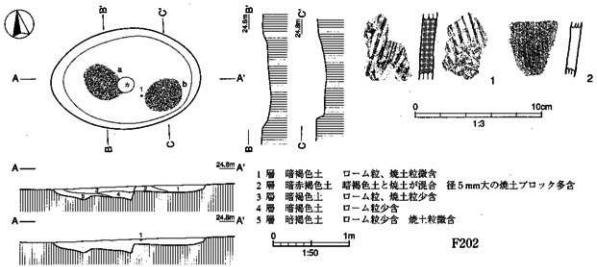
F202

検出地区　L5-63gにて検出した。

遺　構　長軸1.96m×短軸1.32m×深さ0.12m、方位はN-83°-Wを測る。平面形は楕円形である。火床は２カ所検出し、坑底中央よりやや西壁寄りに火床ａを、東壁際に火床ｂを検出した。いずれの火床も赤化したものであった。

遺　物　撚糸文、条痕文片が稀に出土した。また、礫も出土している。１は火床ｂに伴い、内外面とも斜位の条痕文を施すが、条痕の幅がややあるものであった。２は撚糸文片である。

所　見　坑底の中央を避けるように火床が所在している。火床の新旧関係を覆土より、火床ａ→火床ｂと捉えることができた。



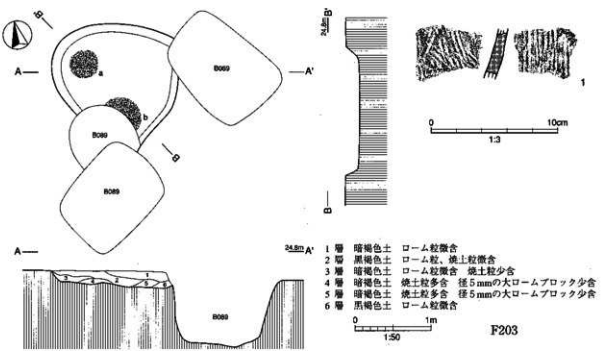


図39　F202・F203

F203

検出地区　L5-73gにて検出した。B089と重複している。

遺　構　長軸1.68m×短軸(1.20)m×深さ0.18m、方位はN-51°-Wを測る。平面形は不整楕円形である。火床は2カ所検出した。火床aは坑底の北西壁際に、火床bは南東壁際に、ともに赤化した状態で検出された。火床bはB089によって半分程度失われていた。

遺　物　条痕文片が僅かに出土した。1は外面はランダムに、内面は縦位に条痕文を施している。

所　見　火床の新旧関係は覆土からは判然としなかった。平面形が楕円を半截したような形状をしていることから、別個の炉穴が掘込まれたものと捉えた。

F204

検出地区　L5-73gにて検出した。B089と重複している。

遺　構　長軸(0.66)m×短軸(0.48)m×深さ0.16m、方位はN-54°-Eを測る。平面形は楕円形か、B089と重複するため全体形は不明瞭である。また、覆土も殆ど失われていた。火床も大半が重複により失われているが、その遺存状態から、若干赤化しているようであった。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　攪乱と遺構の重複が大きく、本来の遺構である炉穴としては推定の度合いが高くなるが、単独の炉穴と捉えられた。

F205

検出地区　L5-64gにて検出した。

遺　構　長軸む1.00m×短軸0.48m×深さ0.08m、方位はN-67°-Eを測る。平面形は円形に近い楕円形である。火床は凹凸ある坑底の中央に検出され、うっすらと赤化したものであった。

遺　物　条痕文の小片が、数点出土したのみである。

所　見　坑底中央に火床を有する、単独の炉穴である。

F206

検出地区　L5-54・64gにて検出した。B086と重複する。

遺　構　長軸2.78m×短軸1.16m×深さ0.24m、方位はN-24°-Wを測る。平面形は細長な長楕円形である。ピットは3坑確認され、火床は2カ所であった。坑底は凹凸あるものである。火床aは赤化した火床が坑底の中央にて検出した。火床bは坑底に浅く掘込まれた小ピット内の底から壁立ち上がりにかけて検出され、赤化は強かった。

遺　物　撚糸文、条痕文片が若干出土しているが、条痕文片が多かった。

所　見　1カ所火床は失われているものの、覆土から炉穴は3基所在したものと捉えた。

F207

検出地区　L5-55gにて検出した。

遺　構　長軸2.68m×短軸－m×深さ0.19～0.44m、方位はN-11°-Eを測る。平面形は不整形である。4基の炉穴の重複である。

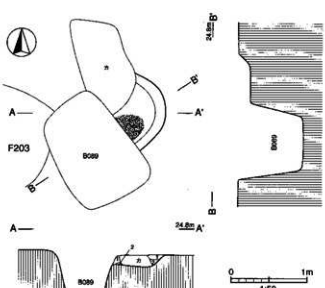
火床aは長軸(0.44)m×短軸0.94m×深さ0.31m、方位はN-11°-Eを測る。

火床cは長軸(0.59)m×短軸0.52m×深さ0.19m、方位はN-81°-Eを測る。

赤化した火床はそれぞれに検出された。覆土は火床aが7・8層、火床bが1・2・4・6層、火床cが3・5層と捉えられ、火床dは把握できなかった。火床までの深さは火床bが最も深く0.44mであり、火床dは0.32mであった。

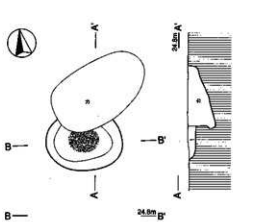
遺　物　撚糸文、条痕文片が僅かに出土している。

所　見　覆土より新旧関係は、火床a・c→火床bと捉えられた。しかし火床a・cの新旧は押さえられなかった。また、火床dは不明である。また、覆土も殆ど失われている。火床も大半が失われているが、若干、赤化しているようである。



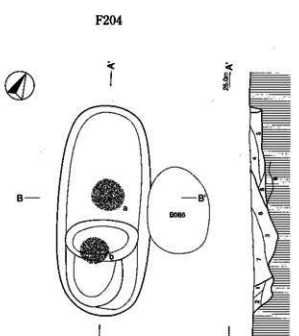
1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含
2 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合

F204



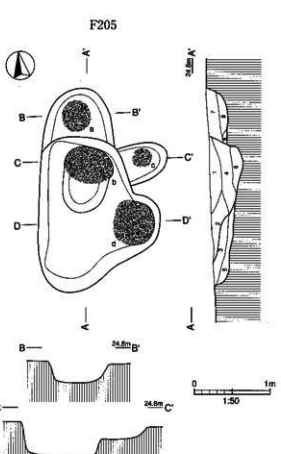
1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含

F205



1 層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒微含
2 層　黒褐色土　ローム粒、焼土粒微含
3 層　黒褐色土　ローム粒、径5mm大のロームブロック少含
焼土粒少含
4 層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒微含
5 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含
6 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含
7 層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒微含
8 層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒少含
9 層　暗褐色土　ローム粒、径5mm大の焼土ブロック少含
焼土粒少含

F206



1 層　黒色土　ローム粒、径5mm大のロームブロック少含　焼土粒微含
2 層　黒褐色土　ローム粒、径5mm大のロームブロック少含　焼土粒微含
3 層　黒色土　ローム粒、径5mm大のロームブロック少含　焼土粒微含
4 層　暗褐色土　ローム粒、径5mm大のロームブロック少含　焼土粒微含
5 層　黄褐色土　ソフトローム　焼土粒微含
6 層　赤褐色土　焼土層　ローム粒少含
7 層　暗褐色土　ローム粒、径5～20mm大のロームブロック少含　焼土粒微含
8 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合
9 層　黄褐色土　ハード主体　焼土粒微含

F207

図40　F204・F205・F206・F207

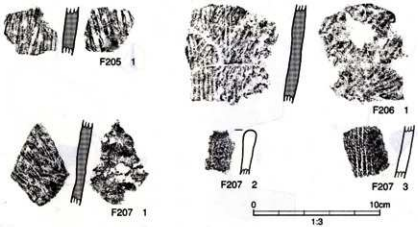
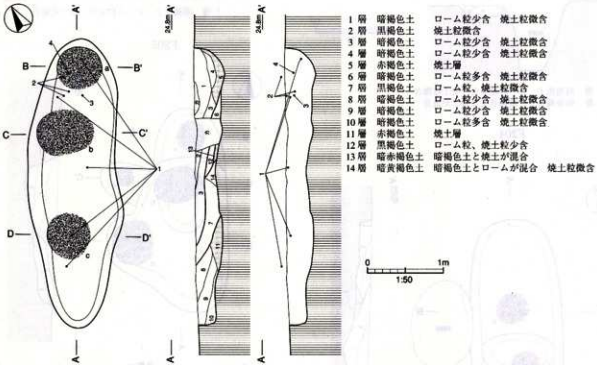
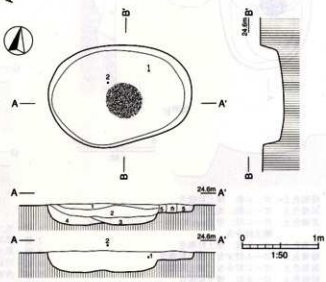


図41　F205・F206・F207（2）



F208



F209

図42　F208・F209

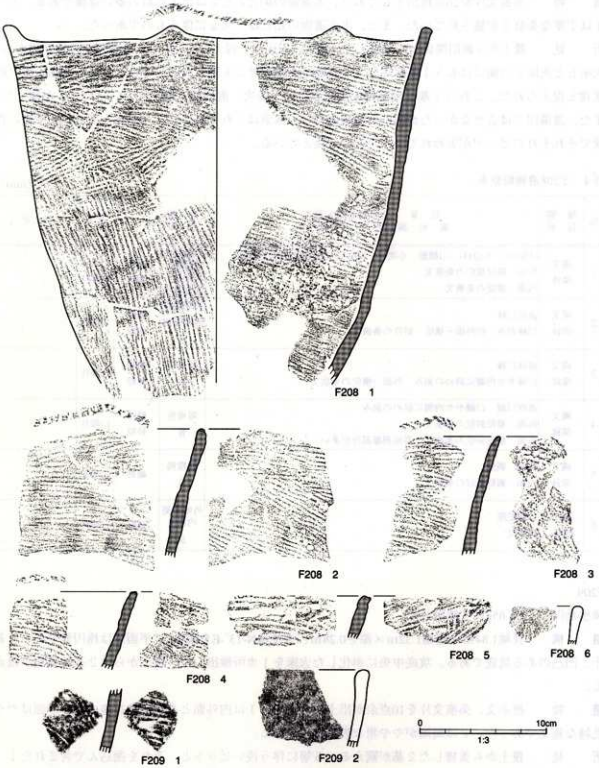


図43　F208・F209（2）

F208

検出地区　L5-55gにて検出した。

遺　構　長軸3.84m×短軸1.20m×深さ0.30～0.36m、方位はN-31°-Eを測る。平面形は不整楕円形であり、凹凸のある坑底である。火床は直列して３カ所検出され、それぞれが赤化していたが、特に火床ａは坑底から壁の立上がりまで赤色硬化していた。壁の立上がりは炉穴としてはやや急に坑底から立ち上がっている。

遺　　物　　条痕文片が26点程出土しており、本遺跡の炉穴としては出土点数の多い遺構である。1～4は丁寧な条痕文が施されていた。また、出土遺物の殆どは火床ａに伴うものであった。

所　　見　　覆土から新旧関係が、火床ｃ→火床ｂ→火床ａと捉えられた。しかし覆土の堆積状態から、火床ｂと火床ｃの間にはもう１基存在していた様子を窺わせるものである。このことから４基の炉穴の重複と捉えられた。これら４基は南西側から北東方向へ順次、直列的に掘込んでいったことが窺えた。また、遺構図では表せなかったが凹凸ある坑底から、本来はそれぞれにピットを有しており、重複の過程でそれぞれのピットが失われていったものと捉えている。

表４　F208遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(330)×－×(284)　口縁部　小突起　口唇に三角状及び斜めの刻み 外面　横位縦位の条痕文 内面　横位の条痕文	外暗褐～橙褐色 内褐色～橙褐色 普	繊維 砂粒	口縁～胴部片	
2	縄文 深鉢	波状口縁 口縁刻み　内外面－横位　斜位の条痕文	外暗褐色 内暗茶褐 良	繊維 砂粒	口縁片	
3	縄文 深鉢	波状口縁 口縁やや内側に斜めの刻み　外面－横位の条痕文	暗茶褐 良	繊維 砂粒	口縁片	
4	縄文 深鉢	波状口縁　口縁やや内側に斜めの刻み 外面　横位斜位の条痕文 内面　横位斜位の条痕文　器面剥離部分が多い	暗褐色 普	繊維 砂粒	口縁片	
5	縄文 深鉢	外面　斜位 内面　斜位縦位の条痕文	暗橙褐 良	繊維	口縁片	
6	縄文 深鉢	口唇肥厚 撚糸文	外暗橙褐 内褐色 良	砂粒	口縁片	

F209

検出地区　　L4-65gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.84m×短軸1.32m×深さ0.28m、方位はN-13°-Eを測る。。平面形は楕円形である。若干、凹凸のある坑底である。坑底中央に赤化した火床を１カ所検出した。覆土からは２基の重複が窺える。

遺　　物　　撚糸文、条痕文片を10点余が出土している。１は内外面とも条痕文を施すが、外面はやや乱雑な施文であった。２は間隔がやや粗な撚糸文片である。

所　　見　　覆土から重複した２基が窺える。５層に伴う浅いピットと、それを掘込んで営まれた１～４層を伴う炉穴である。このため図では炉穴の火床が坑底中央に位置するように見えるが、本来は、掘込んだ壁際に所在したものである。４層は充填したような状態であった。炉穴の埋没過程において、数度の火の使用が窺えるものである。また、５層に伴うピットも火床が失われているが、本来は炉穴と思われる。

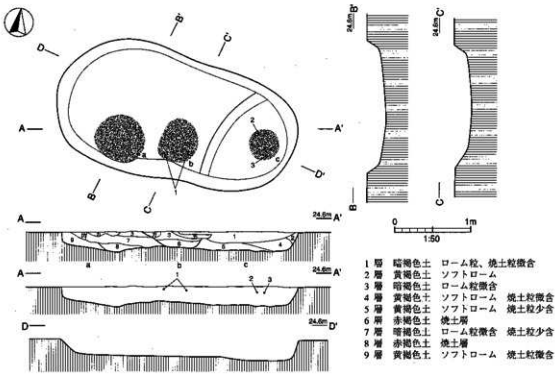


図44　F210

F210

検出地区　L5-65gにて検出した。

遺　構　長軸3.20m×短軸1.61m×深さ0.22～0.24m、方位はN-12°-Wを測る。平面形は不整楕円形である。火床は３カ所検出された。火床ａ・ｂは赤化が強く、火床ｃはうっすらと赤化したのみである。また、火床ａ・ｂは坑底の浅い掘込みにあり、火床ｃは坑底から一段下がって残されていた。

遺　物　10点余の条痕文片の出土であった。１は内面の胴部注意以下に条痕文が施されたことが窺えるが、内外面とも茎状工具によるナデを行ってる。又２は口唇部にキザミをもつ、やや波状の口縁部片で、内外面とも丁寧な条痕文を施している。３は外面は縦位、内面は格子状に条痕文を施している。

所　見　覆土から新旧関係を火床ａ・ｃ→火床ｂと捉えられたが火床ａ・ｃの新旧は捉えられなかった。火床ａ・ｂは時間差が有るにも係わらず、南壁際に火床が位置する。このことから全体として、時間差のあまりない継続使用も考慮すべきかもしれない。

F211

検出地区　L5-65gにて検出した。

遺　構　長軸2.36m×短軸1.68m×深さ0.24m、方位はN-12°-Eを測る。平面形は楕円形である。坑底は凹凸があり、その坑底中央に赤化した火床を１カ所検出した。

遺　物　条痕文片10点余の出土をみた。

所　見　覆土からは３・６層の堆積後、掘返され、炉穴として再利用された様子を窺わせ、２基の重複した炉穴として捉えられた。しかし３・６層の堆積は層厚が有り、また、整然としていることから土坑の可能性も否定できなかった。

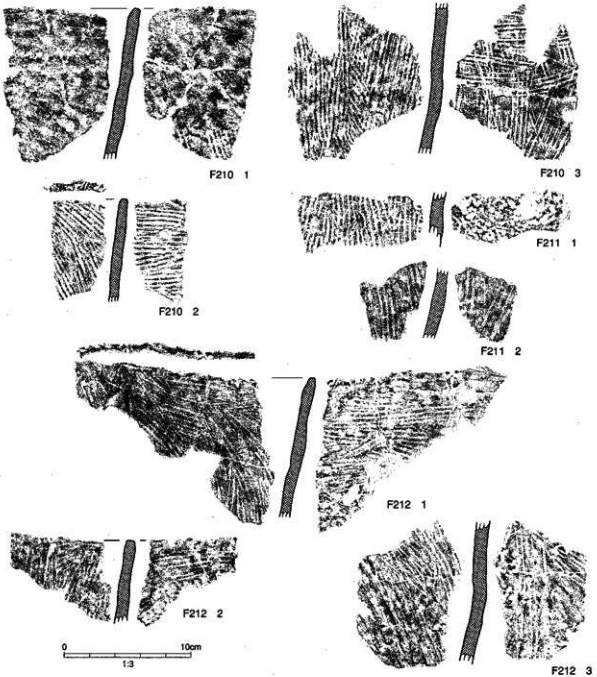


図45　F210・F211・F212（2）

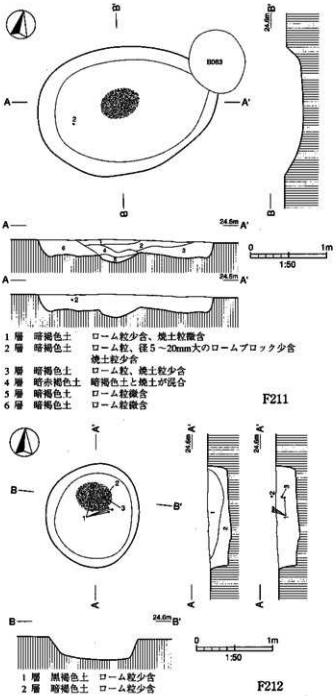


図46　F211・F212

F212

検出地区　L5-65gにて検出した。

遺　構　長軸1.36m×短軸1.20m×深さ0.28m、方位はN-5°-Eを測る。平面形は楕円形である。赤化がやや弱い火床を、坑底の北壁寄りに1カ所検出した。

遺　物　条痕文の小片が10点余出土しているが、図示には至らなかった。主として1層及び遺構確認面において出土していた。

所　見　坑底から壁の立上がりが急な炉穴である。覆土は炉穴としては整然として堆積しており、火床の検出がなければ土坑のような遺構である。

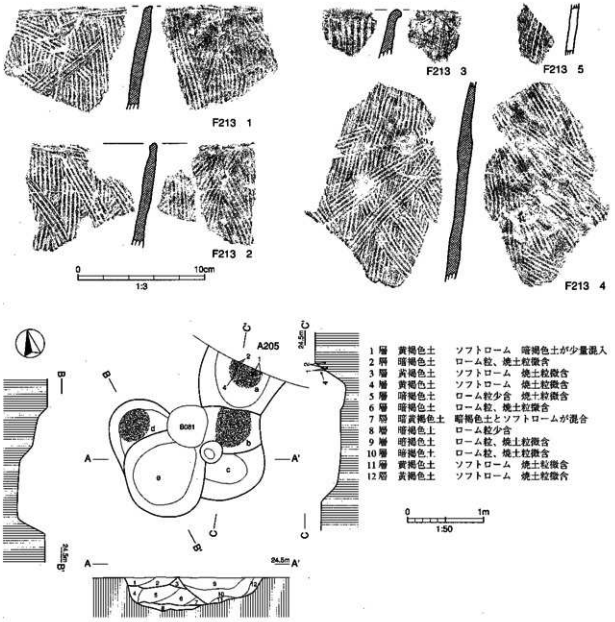


図47　F213

F213

検出地区　L5-76gにて検出した。

遺　構　炉穴と土坑の重複であり。全体の平面形はアメーバ状となっている。各遺構は東列と西列に連なっている。a～dは炉穴であり、eは土坑である。

東列は長軸(1.84)m×短軸(0.68)m×深さ0.30m、方位はN-20°-Eを測る。西列は長軸1.64m×短軸(0.80)m×深さ0.36m、方位はN-15°-Wを測る。火床はa～dのいずれも赤化したものであった。

遺　物　撚糸文、条痕文片が若干出土している。1・2・4は内外面とも縦位を主体として、丁寧な条痕文を施し、一部、斜行させて格子状ともなっていた。3は、外面はやや幅のある条痕文、内面は茎状工具による擦痕状のナデであった。5は撚糸文であるが、流込みである。

所　見　覆土より新旧関係を、e→c・d、b→aと捉えたが、それぞれの詳細な新旧関係は把握できなかった。なお、c・dは同一の炉穴の可能性もあることを指摘しておきたい。また、坑c～eにおいても覆土からは5回の掘込みと堆積が認められ、かなり煩雑に同一地点を使用した痕が窺われた。

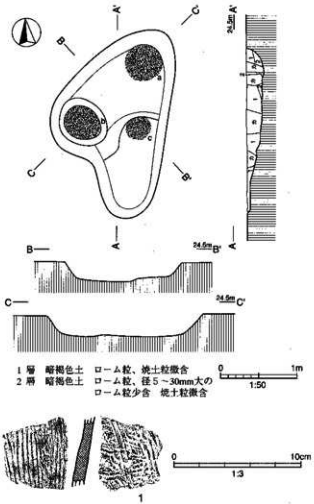


図48　F214

F214

検出地区　L5-76gにて検出した。

遺　構　最低２坑の重複の炉穴である。長軸2.48m×短軸1.52m×深さ0.22～0.28m、方位はN-10°-Eを測る。重複のため、平面形はアメーバ状となっている。また、坑底は凹凸あるものとなっていた。火床は３カ所検出された。火床ａは北東壁際で、火床ｂは南西壁際の小ピット内で、火床ｃは坑底北端にて検出され、いずれも赤化したものであった。

遺　物　遺物の出土は稀だが、条痕文片を中心としていた。また、鉄滓も出土しているが、攪乱に伴う流込みと捉えた。１は外面縦位の比較的丁寧に、内面はランダムに条痕文を施しているものであった。。

所　見　攪乱が著しく、覆土の把握も判然とせず、覆土からはピット及び火床の新旧関係は捉えられなかった。火床は火床ｃを含めて、壁際に位置した炉穴である。

F215

検出地区　L5-86・76gにわたって検出した。

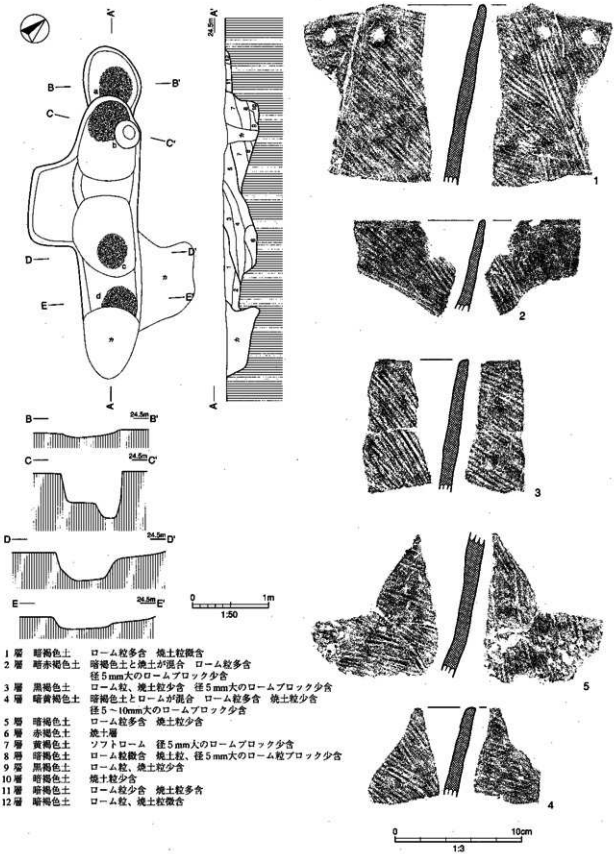
遺　構　長軸4.40m×短軸0.86m×深さ0.20～0.40m、方位はN-49°-Wを測る。直線的に連なる炉穴群であり、このため平面形は長楕円形である。火床は４カ所検出し、いずれも赤化していた。火床ｂ・ｃはやや深い掘込みの坑底中に所在する。

覆土は、火床ａが11・12層、火床ｂが７～10層、火床ｃが３～６層、火床ｄが１・２層と捉えた。

遺　物　撚糸文、条痕文片が若干出土している。、１は口縁部に２カ所補修孔が穿たれていた波状の、２・３は平縁の口縁片である。１～５はいずれも内外面とも丁寧に斜位に条痕文を施しているものであった。

所　見　ピットとしては、４乃至６坑からなる炉穴群である。覆土からは北から南へ直線的により深く掘込みながら、順次移動して炉穴が営まれたことが捉えられた。そして火床の新旧関係は、火床ｄ→火床ｃ→火床ｂ→火床ａとなっていた。

このように直線的に連続する炉穴は上谷遺跡でも類例はあるが少なく、時間的な差をおかずに連続して営まれたような印象を受ける遺構であった。



1 層　暗褐色土　ローム粒多含　焼土粒微含
2 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合　ローム粒多含
径5mm大のロームブロック少含
3 層　黒褐色土　ローム粒、焼土粒少含　径5mm大のロームブロック少含
4 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混合　ローム粒多含　焼土粒少含
径5～10mm大のロームブロック少含
5 層　暗褐色土　ローム粒多含　焼土粒少含
6 層　赤褐色土　焼土層
7 層　黄褐色土　ソフトローム　径5mm大のロームブロック少含
8 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒、径5mm大のローム粒ブロック少含
9 層　黒褐色土　ローム粒、焼土粒少含
10 層　暗褐色土　焼土粒少含
11 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒多含
12 層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒微含

図49　F215

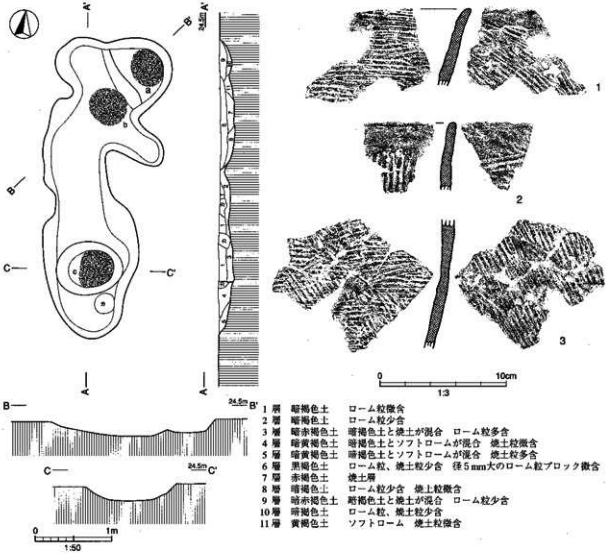


図50　F216

F216

検出地区　L4-76・77・86・87gにわたって検出した。

遺　構　長軸3.96m×短軸0.84m×深さ0.20m、方位はN-8°-Wを測る。平面形は不整形である。火床は3カ所検出し、いずれも赤化していた。また、火床bの坑底は凹凸が著しかった。

遺　物　条痕文片が若干出土している。1は口縁直下から横位の条痕文を、2は口縁に無文部を残して縦位に条痕文を施していた。3は外面は横位を主としながらもランダムに、内面は斜位に条痕文を施している。1・3とも条痕文はやや細く、比較的丁寧なものである。

所　見　平面形状は不規則な形状であるが、本来は各炉穴のそれぞれに掘込んだ形状の集合である。この平面形の不規則さなどから、失われた火床もあり、3基以上の炉穴ではなかったかと捉えている。

覆土より、新旧関係を火床c→火床b→火床aと捉えることができた。また、火床bと火床cとの間に、更に炉穴1基が存在した可能性があった。

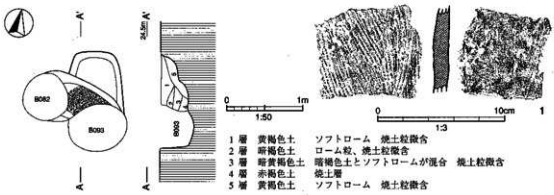


図51　F217

F217

検出地区　　L5-66gにて検出した。

遺　　構　　2基の炉穴の重複である。B082・B093と重複し、大きく損壊を被っていた。

aは、長軸(1.14)m×短軸(0.45)m×深さ0.36m、方位はN-73°-Wを測る。平面形は楕円形である。赤化した火床を検出した。

bは、長軸(0.69)m×短軸(0.70)m×深さ0.23～0.36m、方位はN-11°-Wを測る。平面形は長方形である。火床は無く、既に失われているものと捉えた。

遺　　物　　出土は稀であり、条痕文片と焼礫の小片が出土している。1は外面細かな条痕文を縦位に、内面はナデ状である。

所　　見　　覆土から新旧関係を捉えることはできなかったが、b→火床aではないかと判断された。また、bについては火床は検出されなかったが、覆土などから炉穴と捉えられ、遺構の重複によって火床は失われたものと捉えた。

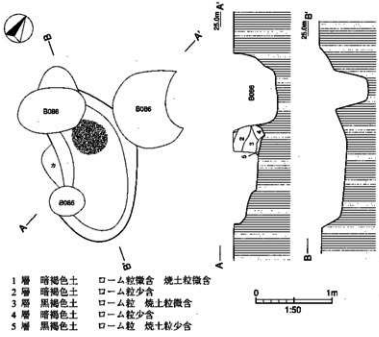


図52　F218

F218

検出地区　　L5-54gにて検出した。B086と重複し、掘立柱建物跡の柱穴群内にて検出した。

遺　　構　　長軸1.60m×短軸1.00m×深さ0.24m、方位はN-49°-Wを測る。平面形は屈曲した不整楕円形である。坑底北西寄りに、赤化した火床を1カ所検出した。

遺　　物　　条痕文片及び土師器片が出土しているが稀であった。

所　　見　　単独の炉穴であるが、掘立柱建物跡の柱穴群内にあり、遺存状況は悪いものである。土師器片の出土は重複によるものと判断した。

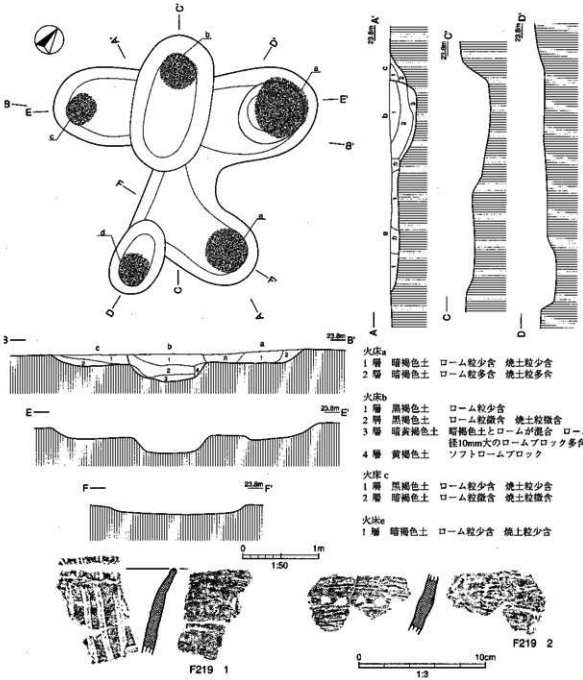


図53・F219

F219

検出地区　L6-49gにわたって検出した。

遺　構　最低5基の炉穴の重複であり、その平面形はアメーバ状である。

坑aは、長軸(1.39)m×短軸1.19m×深さ0.21m、方位はN-45°-Eを測る。坑底内の北東寄りにある浅いピット内からその壁の立上がりにかけて、若干赤化した火床を検出した。

坑bは、長軸(1.80)m×短軸(1.03)m×深さ0.36m、方位はN-23°-Wを測る。坑底の北壁寄りに赤化が強い火床を検出した。

坑cは、長軸(1.02)m×短軸1.04m×深さ0.16m、方位はN-65°-Eを測る。坑底の南西壁際に、赤化した火床を検出した。

坑dは、長軸(1.00)m×短軸0.64m×深さ0.20m、方位はN-12°-Wを測る。坑底の南壁際に、赤化した

火床を検出した。

坑ｅは、長軸1.73ｍ×短軸0.94ｍ×深さ0.12ｍ、方位はN-88°-Eを測る。坑底の東壁際に、赤化した火床を検出した。

覆土は基本的には、暗褐色土と暗黒褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　　条痕文片が16点程、散在して出土している。１は、外面はナデ状の条痕文を施した後に縦位の沈線を引いたものであり、内面は横位を主としたハケナデ状の条痕文を施文する。口縁は外反し、口唇上に刻みを施すものである。２は、横位の条痕文の施文後、刺突列を施す。内面は斜位及び横位の条痕文である。

所　見　　重複した炉穴の新旧関係は、坑ｃ→坑ｂ・ｄと捉えた。坑ａ・ｂについては不明であった。また、坑ｂ・ｅの関係も捉えられなかった。

F220

検出地区　　L5-49・50・59・60gにわたって検出した。

遺　構　　21基以上の炉穴が重複した遺構であり、このため平面形はアメーバ状となっている。

遺構規模はA～A′は8.21ｍ、B～B′は6.61ｍを測る。坑底までの深さは、0.20～0.92ｍと一様ではなかった。火床も21カ所検出したが、この他に覆土の堆積状況から、火床が失われてた炉穴の存在も想定できる遺構である。

遺　物　　21基以上と重複した炉穴の遺構数が多く、これに伴い条痕文片を主体として110点を越える遺物が出土している。その出土主体は火床ｋ及び火床ｍに係わるものであった。また、底部は欠損するものの大型接合片や敲石・砥石に利用された石器類も出土した。

１は、平面的には火床ｋ・ｎ・ｏ・ｑにわたって出土している。２は火床ｋ、３は火床ｉ、４は火床ｄ・ｈにわたっている。６は火床ｍであり、7は火床ｉであった。８・９は火床ｗに、10は火床ｘに伴うものと捉えた。なお、敲石や砥石は明瞭な形態を有するものではなく、転用という状態であった。

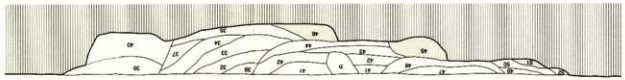
所　見　　全ての炉穴の各坑に対して覆土の堆積状を把握できなかったので、新旧関係を捉えられなかった炉穴が多くなっている。しかし覆土の堆積状況や火床の存否などから、以下のように捉えた。

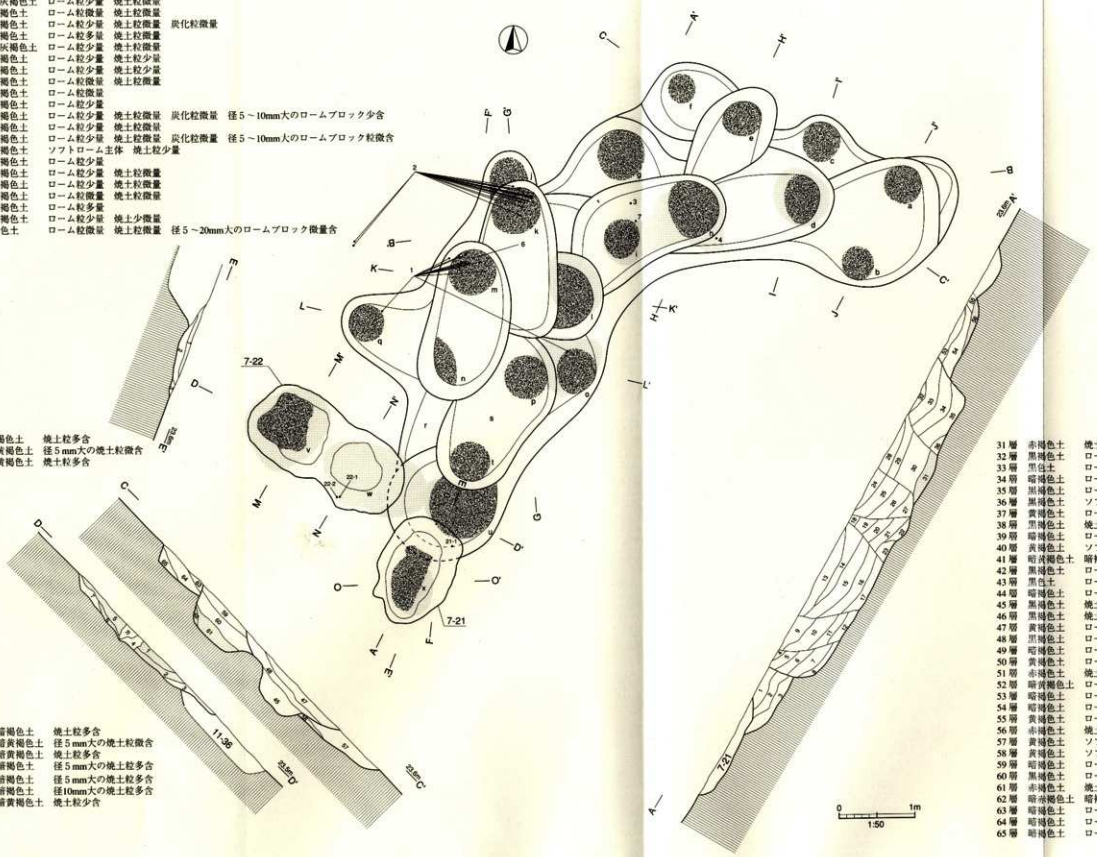
火床ｕ→火床ｖ
　　ｗ
　　×
火床ｆ→ｇ→ｉ→ｌ→ｋ
　　↓
火床ｅ
　　↓
火床ｄ→ｂ→ａ→？
火床ｈ　　↑
火床ｕ→ｔ・ｓ→ｐ

図54　F220火床新旧関係

この炉穴の新旧関係については、炉穴の重複が多いこと、覆土が複雑に堆積していることなどから異なる見方があるかも知れない。また、火床ｎは坑底というより壁に存在しており、火床ｍの煙道部の火熱痕かも知れない。残念ながら重複が著しく、調査時においては捉えきれなかったが、火床ｄ・ｈ・ｉ・ｊ・ｋ・ｐ・ｓ・ｔを伴う各炉穴は坑底の深さから煙道部を持っていた可能性もあると指摘しておきたい。

1 層　黒褐色土　焼土粒・ローム粒微粒量
2 層　黒褐色土　ローム粒微量　焼土粒少量
3 層　黒褐色土　暗褐色と焼土が混合した土　ローム粒微量
4 層　黒褐色土　ローム粒少量
5 層　暗赤褐色土　径5mm大のロームブロック少含　焼土粒微量　白色粘土粒微量
6 層　黒褐色土　ローム粒少量　焼土粒微量
7 層　黒褐色土　径5～20mm大のロームブロック微量含　ローム粒少量　焼土粒微量
8 層　黒褐色土　ローム粒多量　焼土粒微量
9 層　黒褐色土　ローム粒少量　焼土粒微量
10 層　暗灰褐色土　ローム粒少量　焼土粒微量
11 層　黒褐色土　ローム粒微量　焼土粒微量
12 層　暗褐色土　ローム粒少量　焼土粒微量　炭化粒微量
13 層　暗褐色土　ローム粒多量　焼土粒微量
14 層　暗灰褐色土　ローム粒少量　焼土粒微量
15 層　灰褐色土　ローム粒少量　焼土粒少量
16 層　黒褐色土　ローム粒少量　焼土粒少量
17 層　灰褐色土　ローム粒微量　焼土粒微量
18 層　黒褐色土　ローム粒微量
19 層　黒褐色土　ローム粒少量
20 層　暗褐色土　ローム粒少量　焼土粒微量　炭化粒微量　径5～10mm大のロームブロック少含
21 層　暗褐色土　ローム粒少量　焼土粒微量
22 層　暗褐色土　ローム粒少量　焼土粒微量　炭化粒微量　径5～10mm大のロームブロック粒微含
23 層　黄褐色土　ソフトローム主体　焼土粒少量
24 層　暗褐色土　ローム粒少量
25 層　暗褐色土　ローム粒少量　焼土粒微量
26 層　黒褐色土　ローム粒少量　焼土粒微量
27 層　黒褐色土　ローム粒微量　焼土粒微量
28 層　暗褐色土　ローム粒多量
29 層　暗褐色土　ローム粒少量　焼土少微量
30 層　黒色土　ローム粒微量　焼土粒微量　径5～20mm大のロームブロック微量含





7-21
1 層　暗褐色土　焼土粒多含
2 層　暗黄褐色土　径5mm大の焼土粒微含
3 層　暗黄褐色土　焼土粒多含

7-22
1 層　暗褐色土　焼土粒多含
2 層　暗黄褐色土　径5mm大の焼土粒微含
3 層　暗黄褐色土　焼土粒多含
4 層　暗褐色土　径5mm大の焼土粒多含
5 層　暗褐色土　径5mm大の焼土粒多含
6 層　暗褐色土　径10mm大の焼土粒多含
7 層　暗黄褐色土　焼土粒少含

31 層　赤褐色土　焼土層　部分的に10mm大の焼土ブロック含
32 層　黒褐色土　ローム粒多量　焼土少微量　径5mm大のロームブロック少含
33 層　黒色土　ローム粒少量　焼土粒少量　径5～10mm大のロームブロック少含
34 層　暗褐色土　ローム粒多量　焼土粒微量
35 層　黒褐色土　ローム粒多量　焼土粒多量
36 層　黒褐色土　ソフトローム主体　焼土粒微量
37 層　黄褐色土　ローム粒少量
38 層　黒褐色土　焼土粒少量　炭化粒微量
39 層　暗褐色土　ローム粒微量
40 層　黄褐色土　ソフトローム主体　焼土粒少量　暗褐色土少量混入
41 層　暗黄褐色土　暗褐色土とソフトロームが混合　径5mm大のソフトローム少量含
42 層　黒褐色土　ローム粒多量　焼土粒微含　径5mm大のソフトローム多量含
43 層　黒色土　ローム粒少量　焼土粒微量　径5mm大のソフトローム少量含
44 層　暗褐色土　ローム粒少量　焼土粒少量　径5～20mm大のロームブロック少量含
45 層　黒褐色土　焼土層　部分的に5～20mmブロック含
46 層　黒褐色土　焼土層　暗褐色土少量混　径5mm大の焼土ブロック・ロームブロック多含
47 層　黄褐色土　ローム粒少量
48 層　黒褐色土　ローム粒少量　焼土粒少量　径5mm大のソフトローム多量含
49 層　暗褐色土　ローム粒少量　焼土粒微量
50 層　黄褐色土　ローム粒少量　焼土粒多量　径5mm大のソフトローム多量含
51 層　赤褐色土　焼土層　径5mm大ブロック多含
52 層　暗黄褐色土　ローム粒微含　暗褐色土とソフトロームは混合
53 層　暗褐色土　ローム粒多含
54 層　暗褐色土　ローム粒多含　焼土粒少含
55 層　黄褐色土　ローム粒多含　焼土粒少含
56 層　赤褐色土　焼土層
57 層　黄褐色土　ソフトローム主体　焼土微含
58 層　黄褐色土　ソフトローム主体　焼土粒微含
59 層　暗褐色土　ローム粒少量　焼土粒微含
60 層　黒褐色土　ローム粒少量　焼土粒少含
61 層　赤褐色土　焼土層　径5mm大ブロック・ロームブロック多含
62 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合
63 層　暗褐色土　ローム粒微含
64 層　暗褐色土　ローム粒少量　焼土粒微含
65 層　暗褐色土　ローム粒微含

図55　F220

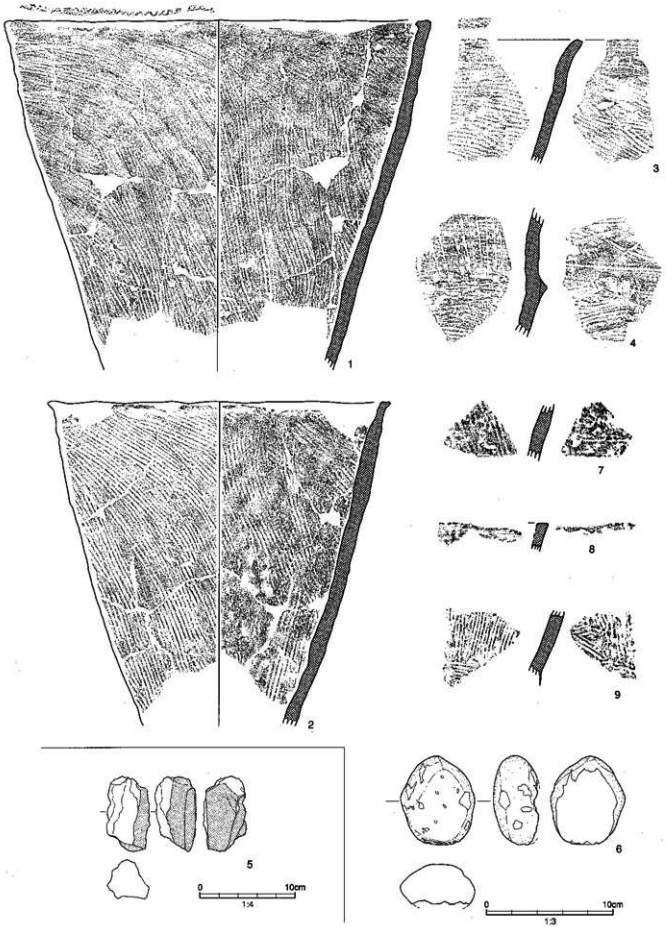


図56 F220（2）

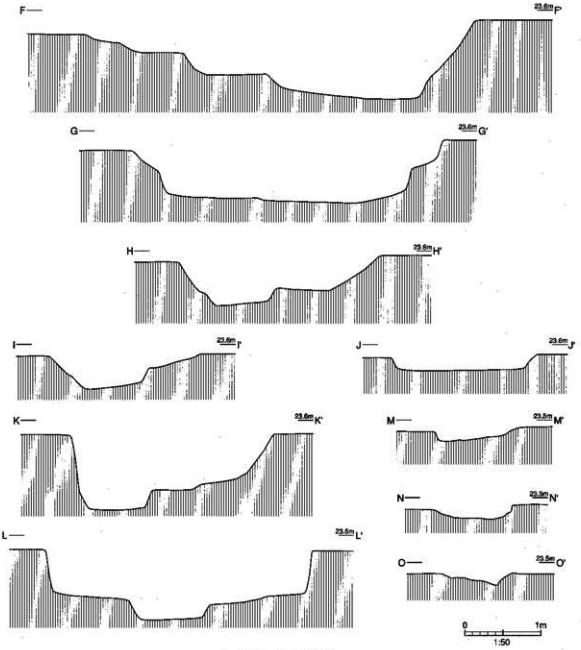


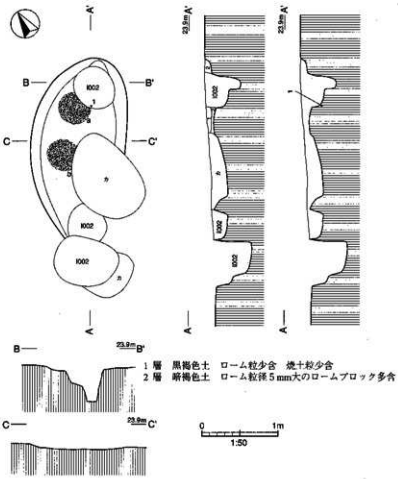
図57　F220（3）

表5　F220遺物観察表

（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(335)×－×(279) 口縁－上面平坦面を作出　円形の圧痕１カ所　側面には内面より刻み 胴部は内外面とも縦位　胴部上半　縦位の条痕文	暗褐 普	繊維	3/4	
2	縄文 深鉢	(270)　×－×(258) 口唇　厚みを持つ 口縁－上面に平坦面を作出　外面斜位　内面斜位 頸部－縦位の条痕文	外暗褐 内橙褐 普	繊維	3/4	
3	縄文 深鉢	－×－×－ 口縁外反 口縁－口唇　貝殻の腹縁圧痕　内外面とも横位、斜位の条痕文 内面は繊維の脱跡が顕著	暗褐 良	繊維	口縁片	

4	縄文 深鉢	―×―×― 胴部―地文横位の条痕文　屈曲部を境に上半は竹管状工具による浅い沈線が縦位に施される 内面は横位、斜位の条痕文	外暗褐 内暗橙褐 良	繊維	胴部片	
6	石器 砥石？	長軸80×短軸45×厚さ42　重量101.4g 破損が甚しいが本来は断面方形の柱条か？ 全体に剥離が著しく摩耗痕は不明瞭			断片	
7	石器 敲石？	長軸71×短軸53×厚さ47～　重量247.4g 楕円形を呈し厚手の作り 一部に弱い磨痕らしきものが認められるが依存部には敲打痕は不明瞭			1/2	



F

図58　F221

F221

検出地区　L6-48gにて検出した。I003と重複する。

遺　構　長軸2.40m×短軸1.20m×深さ0.08m、方位はN-40°-Eを測る。平面形は楕円形である。火床は2カ所であり、坑底中央と北東壁寄りに、それぞれ若干赤化した火床を検出した。

遺　物　遺物の出土は稀であった。

所　見　凹み状の浅い炉穴である。攪乱を大きく被り、覆土からは火床の新旧関係は捉えられなかった。

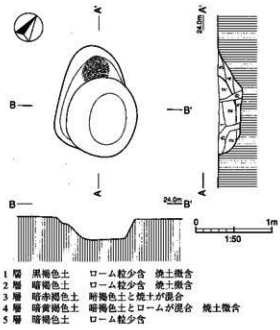


図59　F222・D245

F222

検出地区　L6-47ｇにて検出した。D245と重複している。

遺　構　長軸（1.38）ｍ×短軸0.78ｍ×深さ0.28ｍ、方位はN-33°-Wを測る。平面形は楕円形であるが、D245との重複が大きく、遺構としては大きく損壊している。　火床は北壁際に１カ所検出した。

遺　物　条痕文小片が出土しているが、極めて少なかった。

所　見　炉穴としては単独であるが、遺構廃絶後の３～５層の自然堆積による埋没過程において再度、掘込まれて再利用された遺構である。１・２層が掘込んだピットの覆土である。

F223

検出地区　L6-38ｇにて検出した。

遺　構　ピットは大きく４基として捉えられ、また、火床は５カ所検出されている。炉穴の重複であるため、平面形はアメーバ状である。意識的に計測した遺構の規模は、長軸3.72ｍ×短軸3.56ｍ×深さ0.12～0.24ｍ、方位は示し得なかった。火床は５カ所とも赤化しており、使用期間の長さを窺わせた。

遺　物　条痕文を主体として、10点余の破片の出土をみた。１は茎状工具によるナデであり、２は縦位の条痕文を施している。

所　見　覆土から火床の新旧関係は、火床ａ・ｃ→火床ｂ→火床ｇと捉えられた。しかし火床ａ・ｃの新旧関係と、火床ｄ・ｅについては捉えられなかった。掘込みが同じような浅さから、重複したとしても、時間的な差はあまりないのかもしれない。

F224

検出地区　L6-38ｇにて検出した。

遺　構　長軸2.96ｍ×短軸1.12ｍ×深さ0.16ｍ、方位はN-21°-Eを測る。平面形は長楕円形である。火床は坑底の東壁寄りに近接して２カ所検出されたが、その赤化は弱かった。坑底中央にピットが凹み状に掘下げられていた。

遺　物　条痕文片が若干出土している。１・２ともやや細かく条痕文を施している。

所　見　凹み状に掘下げられたような炉穴であり、覆土の堆積も浅く、火床の新旧関係は捉えられなかった。F223と同様な、掘込みの浅い炉穴である。掘込んだというより、凹めたような炉穴であり、火床の新旧についても時間差はあまりないかもしれない。

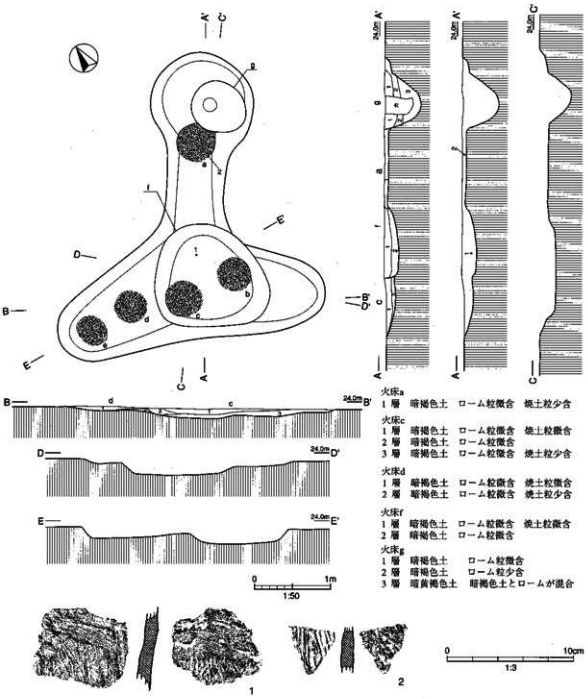

火床a
1 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒少含
火床c
1 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒微含
3 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒少含
火床d
1 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒少含
火床f
1 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒微含
火床g
1 層　暗褐色土　ローム粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒少含
3 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混合
24.0m
0　1m
1:50
0　10cm
1:3
1
2

図60　F223

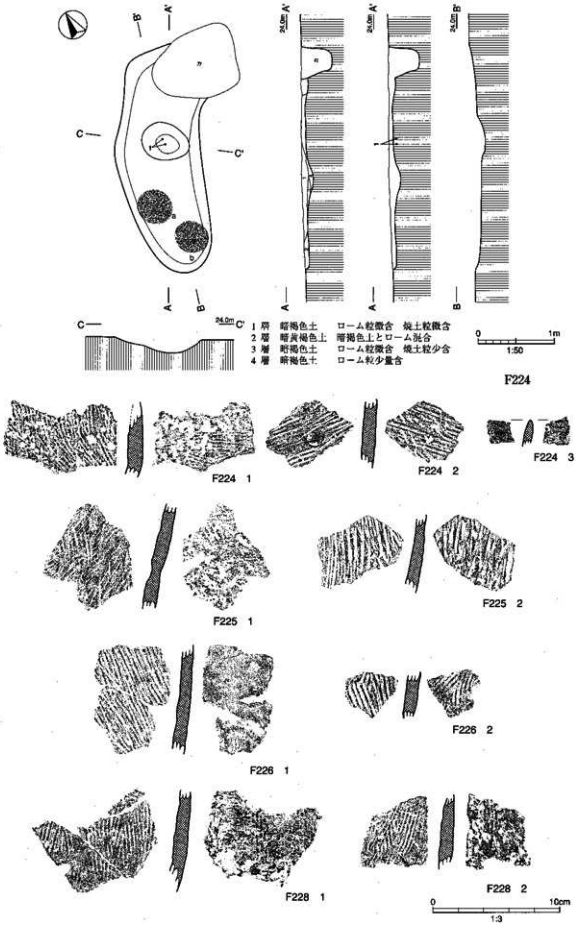
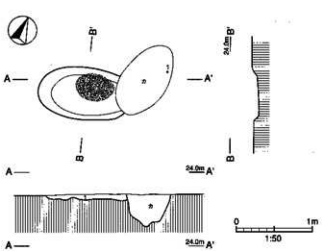
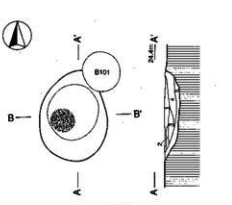


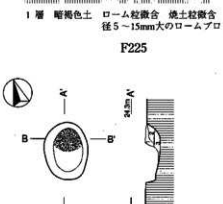
図461 F224・F225・F226・F228



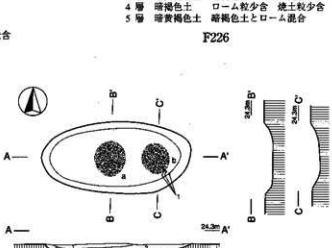
F225



F226



F227



F228

図62　F225・F226・F227・F228

F225

検出地区　L6-39 g にて検出した。

遺　構　長軸(1.00)m×短軸0.68m×深さ0.06m、方位はN-72°-Eを測る。平面形は楕円形である。坑底中央の北壁際に、火熱痕のみの火床を検出した。火床は赤変していなかったが、硬化は認められた。

遺　物　条痕文が若干出土している。

所　見　単独の、凹み状の炉穴である。小規模な炉穴であるが、平面規模に比べ、深さのある遺構であった。

F226

検出地区　L5-8・18 g にて検出した。

遺　構　長軸1.92m×短軸1.41m×深さ0.20m、方位はN-49°-Eを測る。平面形は卵形である。坑底は凹凸あるスリ鉢状で、その坑底の西壁寄りに、赤化した火床を検出した。

なお、覆土中層の２層に焼土が堆積しており、埋没過程において再利用していることが捉えられた。

遺　　物　　条痕文片を主体として、覆土中より10点余の出土をみた。またの流込みと思われる土師器片も２片出土している。１・２とも内外面とも条痕文を施すが、１の外面はランダムにやや細い条痕文となっている。

所　　見　　坑底から壁になだらかに立ち上がり、坑底を意識していない炉穴である。また、埋没過程において再度使用されたことが、２層から認められた。

F227

検出地区　　L6-9ｇにて検出した。

遺　　構　　長軸0.72m×短軸0.60m×深さ0.16m、方位はN-21°-Eを測る。平面形は楕円形である。坑底の北側に、うっすらと赤化した火床が検出された。

遺　　物　　条痕文の小片が１点出土したのみである。

所　　見　　本遺跡としては規模の小さな炉穴である。このため、坑底の火床はほその半分程を占めている。

F228

検出地区　　L5-99ｇにて検出した。

遺　　構　　長軸1.92m×短軸0.96m×深さ0.08～0.10m、方位はN-90°-Eを測る。平面形は長楕円形である。火床は２カ所検出された。火床ａは坑中央に、火床ｂは東壁寄りに検出された。いずれも赤色硬化している火床であった。

遺　　物　　条痕文片が10片弱出土した。１・２とも細かな条痕文を外面に施しているが、内面の条痕文は粗となっている。

所　　見　　ソフトロームを掘凹めたような、極めて掘込みの浅い炉穴である。このため覆土からは、火床の新旧を捉えられなかった。

F229

検出地区　　L5-98ｇにて検出した。

遺　　構　　長軸2.20m×短軸1.64m×深さ0.16～0.20m、方位はN-29°-Eを測る。平面形は不整楕円形である。ピットは大きく２坑、火床は３カ所検出された。火床はいずれも赤化していたが、火床ａは坑底より一段高いテラス状に位置していた。

遺　　物　　遺物の出土は無かった。

所　　見　　覆土からは、火床の新旧関係は捉えられなかった。

F230

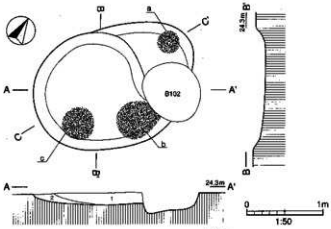
検出地区　　L5-98ｇにて検出した。

遺　　構　　長軸1.08m×短軸0.76m×深さ0.08～0.36m、方位はN-5°-Eを測る。平面形は楕円形である。坑底の中央から西壁側に。赤化が強い火床を１カ所検出した。覆土は暗褐色土の自然堆積であった。

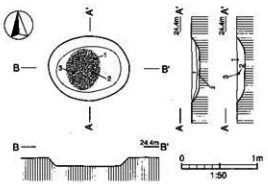
遺　　物　　10点余の条痕文片が出土している。

所　　見　　坑底は凹凸があり、深さが一様ではない炉穴である。

F229

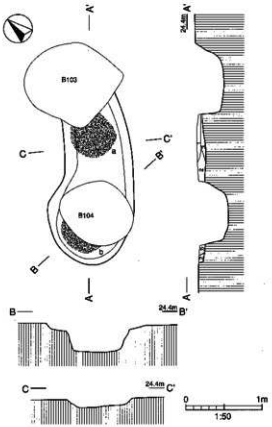


1 層　暗褐色土　焼土粒含　ローム粒微含
2 層　暗黄褐色土　暗褐色土とローム混合



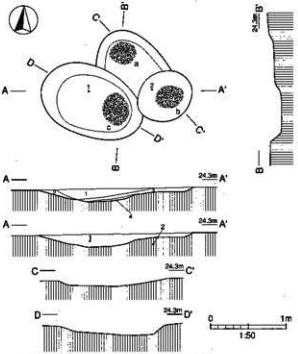
1 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒含
2 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土多含

F230



1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒少含
2 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土少含
3 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土混合

F231



1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含
2 層　黄褐色土　ソフトローム主体　焼土粒少含
3 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒少含
4 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒少含

F232

図63　F229・F230・F231・F232

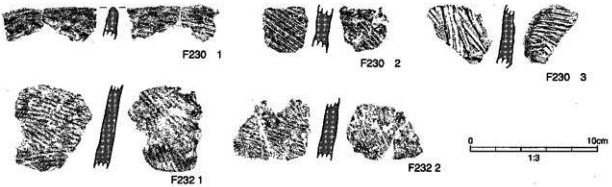


図64　F230・F232（2）

F231

検出地区　L5-98gにて検出した。

遺　構　長軸(1.84)m×短軸0.88m×深さ0.08～0.28m、方位はN-48°-Eを測る。平面形はヘチマ形である。火床は2カ所検出された。火床aはB104によって一部失われているものの、赤化は強いものであった。火床bはB104によって大半が失われているが、赤化は強いことが認められた。

遺　物　出土した遺物はなかった。

所　見　B104による遺構の損壊が大きく、覆土が分断されており、火床の新旧関係を窺うことはできなかった。

F232

検出地区　L5-88gにて検出した。

遺　構　3基の炉穴の重複である。

火床aの坑は、長軸(0.94)m×短軸(0.94)m×深さ0.08m、方位はN-23°-Wを測る。凹み状のピットであり、坑底の北壁際に赤化した火床を検出した。

火床bの坑は、長軸0.76m×短軸(0.64)m×深さ0.11m、方位はN-50°-Eを測る。坑底中央に赤化した火床を検出した。

火床cの坑は、長軸1.36m×短軸0.90m×深さ0.16m、方位はN-68°-Wを測る。坑底南西側に赤化した火床を検出した。

全体としては凹凸のある坑底であり、比較的掘込みの浅い炉穴である。

遺　物　条痕文片が若干出土している。

所　見　火床の新旧関係は不明瞭であり、捉えきれなかった。

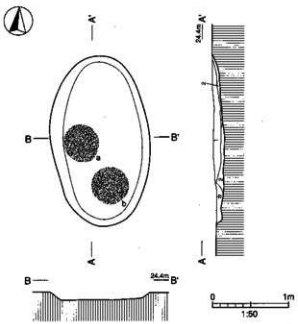
F233

検出地区　L5-87にて検出した。

遺　構　長軸2.28m×短軸1.28m×深さ0.12m、方位はN-7°-Wを測る。平面形は長楕円形である。全体として凹凸のある坑底である。火床は2カ所検出され、火床aは坑底中央の西壁寄りに、火床bは坑底南壁よりに位置していた。火床はともに赤化したものであった。

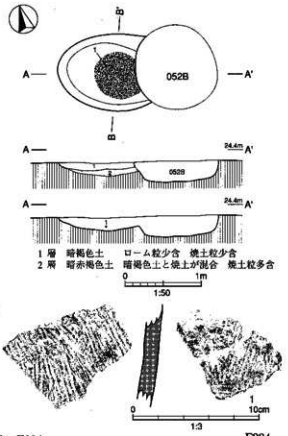
遺　物　出土遺物はなかった。

所　見　火床の新旧関係は不明瞭であり、捉えることができなかった。



1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒少含
2 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混合　焼土粒微含
3 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合

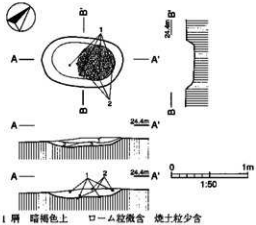
F233

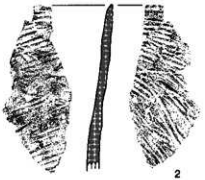


1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒少含
2 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合　焼土粒多含

F234

図65　F233・F234





1 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒少含
2 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含
3 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合

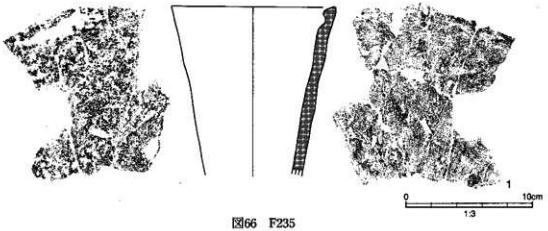


図66　F235

F234

検出地区　L5-87gにて検出した。

遺　構　長軸2.12m×短軸1.00m×深さ0.16m、方位はN-69°-Wを測る。平面形は楕円形である。坑底略中央から東寄りにかけて、赤化した火床１カ所を検出し、方位はN-50°-Eを測る。平面形は長楕円形である。坑底中央から東壁際にかけて赤化した火床１カ所を検出した。覆土は暗褐色土の自然堆積であった。

遺　物　10点余の条痕文片が出土している。

所　見　凹み状の浅い、単独の炉穴である。

F235

検出地区　L5-87ｇにて検出した。

遺　構　長軸1.08m×短軸0.68m×深さ0.08～0.10m、方位はN-50°-Eを測る。平面形は長楕円形である。坑底中央から東壁際にかけて、赤化した火床を１カ所検出した。覆土は、暗褐色土の自然堆積であった。

遺　物　10点余の条痕文片が出土している。

所　見　掘込みの浅い、規模の小さな単独の炉穴である。規模に比して遺物は多か

表６　F235遺物観察表　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(128)×－×(134) 外面　縦方向の条痕（木片等の原体） 内面　ケズリ後条痕 口唇部形態はやや内倒ぎ気味の角頭状	外橙褐色 内茶褐色 良	スコリア 細粒繊維 少量	口縁～ 胴下半 の１/４	早期後半 条痕文系土器 子母口式か
2	縄文 深鉢	外面　口縁は横方向胴部は斜め方向主とする貝殻条痕 内面　横方向を主にややランダムな貝殻条痕 口唇部形態は尖頭状	茶褐色	スコリア 細粒繊維 少量	口縁～ 胴部中 位の破 片	早期 条痕文系土器 野島式

F236

検出地区　L5-87gにて検出した。

遺　構　長軸2.08m×短軸0.80m×深さ0.24m、方位はN-80°-Eを測る。平面形は長楕円形である。東壁から次第に深くなり、西壁際で最も深くなる緩く傾斜した坑底であった。火床は２カ所検出しており、火床ａは坑底の西壁際に、火床ｂは坑底中央に位置していた。ともに赤化した火床である。

遺　物　20点余の条痕文片が出土し、本遺跡においては出土遺物の多い炉穴である。

所　見　覆土が不明瞭であり、火床の新旧関係は捉えにくかった。しかし火床ｂ→火床ａと捉えた。

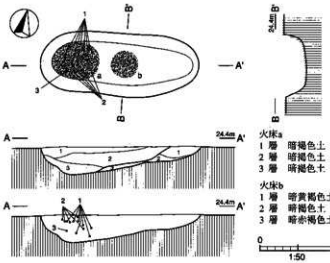
F237

検出地区　L5-96ｇにて検出した。

遺　構　長軸(1.56)m×短軸0.88m×深さ0.04m、方位はN-5°-Eを測る。平面形は長楕円形である。ソフトロームを浅く掘込んだ凹み状の炉穴である。坑底から火床は２カ所検出され、火床ａは坑底中央に、火床ｂは南壁際に位置する。ともに火床は赤化していた。

遺　物　条痕文の小片が出土したが、稀であった。また、重複からか須恵器片も出土している。

所　見　攪乱も多く、覆土の堆積も浅いことから、火床の新旧関係は捉えられなかった。覆土は１～３層が火床ａに、４～６層が火床ｂに属すると捉えた。

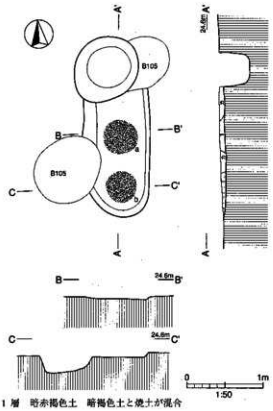


火床a
1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒少含
2 層　暗褐色土　ローム粒少含
3 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒少含

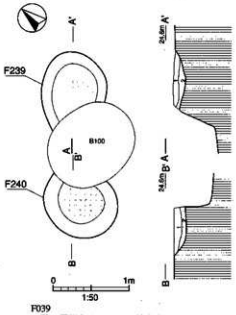
火床b
1 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混合　焼土粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒径5mm大のロームブロック多含　焼土粒少含
3 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合

0　1m
1:50

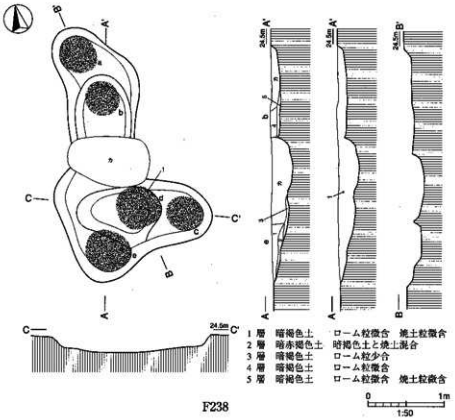
図67　F236



F237・D254



F239・F240



F238

図68　F237・D254・F238・F239・F240

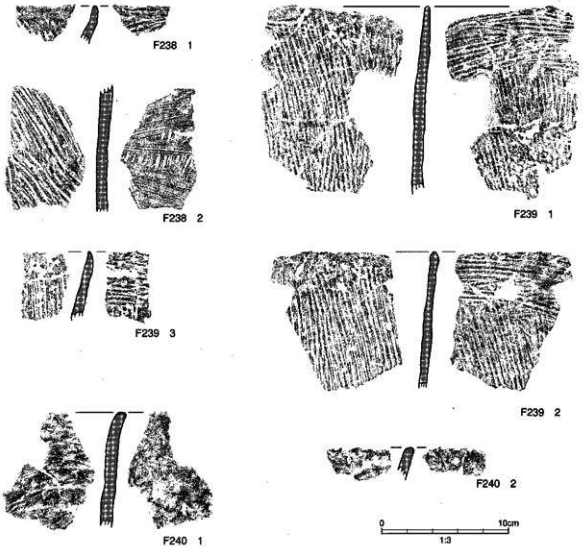


図69　F238・F239・F240（2）

F238

検出地区　L5-97gにて検出した。

遺　構　最低5基の炉穴の重複であり、平面形は不整な逆L字形である。各炉穴は楕円形を基本としていると捉えられた。遺構の規模は意識的にAA′のセクションラインでとったが、長軸3.40m×短軸0.84m×深さ0.20mであり、方位は測定不能であった。

火床は5カ所検出され、いずれも赤化したものであった。また、平面形からそれぞれに坑を有することが確認できた。

遺　物　16点の条痕文片が出土した。1は口縁部は無文であり、それ以下に条痕文を施す。2は外面は斜位の条痕文、内面は条痕文を施した後、茎状工具で擦痕状のナデを行っている。

所　見　攪乱を被るため、覆土から新旧関係を捉えることはできなかった。火床及び確認できるピットは5基であるが、それ以上の炉穴の可能性がある遺構である。

F239

検出地区　L6-6gにて検出した。

遺　構　長軸(0.99)m×短軸0.86m×深さ0.16m、方位はN-40°-Eを測る。平面形は楕円形である。南西側が掘立柱建物跡によって失われている。ソフトロームを皿状に、浅く掘込んだ炉穴である。坑底の東壁寄りに、淡く赤化した火床が検出された。

遺　　物　　条痕文片が出土しているが、稀であった。

所　　見　　F240と近接しているが、ともに他遺構と重複しており、炉穴が重複するかは不明である。しかし平面の位置から想定すると、重複していた可能性の高い炉穴である。

F240

検出地区　　L6-6gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.02m×短軸0.90m×深さ0.15m、方位はN-11°-Eを測る。平面形は楕円形である。火床は坑底に広く検出され、一部は東壁立ち上がりにかかっている。淡く赤化した火床であった。

遺　　物　　条痕文片が出土している。接合する遺物が比較的多い傾向が窺えた。

所　　見　　F239と近接する炉穴であり、その重複部を他遺構によって失われており新旧関係は捉えられなかった。

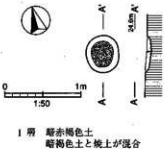


図70　F241

F241

検出地区　　L6-6・16gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.48m×短軸0.44m×深さ0.06m、方位はN-15°-Eを測る。平面形は円形に近い楕円形である。赤化には至らない火熱痕のみの火床が、坑底全体に広がって検出した。

遺　　物　　出土しなかった。

所　　見　　本遺跡においても、極めて小規模な炉穴である。また、ソフトロームを浅く掘込んだ凹み状の遺構であるが、形状と火床範囲が炉穴としては整いすぎている感じを与える。遺物が出土していないので判然としないが、周辺の遺構状況などから炉穴と捉え、遺構の上部が失われたものと判断した。

F242a・b

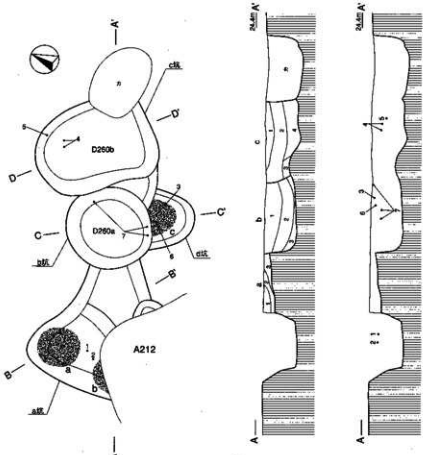
検出地区　　L5-16gにて検出した。

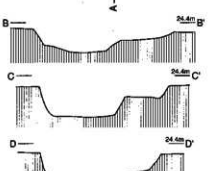
遺　　構　　F242aは長軸(1.32)m×短軸Am×深さ0.32m、方位は計測できい。赤化の強い火床が2カ所検出された。テラス状の部分を火床とし、坑底から壁の立上がりにかけて残されていた。

F242bは長軸(0.61)m×短軸0.82m×深さ0.16m、方位はN-30°-Wを測る。火床は1カ所検出されたが、赤化は強かった。

遺　　物　　20点余の出土である。1・2はF242a、3・6はF242bに、4・5・7は土坑に伴う。1～6は口縁片である。1は口唇部が尖頭状の平縁で、口縁はナデ、内外面とも斜位の条痕文を施す。2は補修孔がある。口唇部は丸棒状、内外面とも口縁は横位、以下は斜位の条痕文である。3は尖頭状の口唇部をもち、内外面とも条痕施文後にナデ。4は丸棒状の口唇部、外面は太い沈線による、内面は植物系原体による条痕文である。5は角頭気味の口唇で、口唇上には綾杉状のキザミ。外面は斜位、内面は縦位の貝殻条痕文。6は口唇部は尖頭状の平縁で、内外面とも擦痕に近い条痕文である。7は胴部片で外面は貝殻条痕の施文後にケズリ及びナデを施し、内面はケズリ後に指頭によるナデを施している。

所　　見　　各遺構の新旧関係は、覆土などからF242a・D260b→D260a→F242bと捉えられた。D260bとF242bは覆土からは判断できなかったが、F242bの火床の遺存状態から捉えた。





a坑
1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒少含
2 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒微含
3 層　暗褐色土　ローム粒微含

b坑
1 層　黒褐色土　ローム粒少含　焼土粒少含
　　径5～10mm大のロームブロック少含
2 層　黒褐色土　ローム粒少含　焼土粒少含
3 層　暗褐色土　ローム粒多含

c坑
1 層　暗褐色土　ローム粒少含
2 層　暗褐色土　ローム粒微含
3 層　黄褐色土　ソフトロームブロック
4 層　暗褐色土　ローム粒少含　径5～10mm大の
　　ロームブロック微含　焼土粒微含

0　1m
1:50

図71　F242ab・D260ab

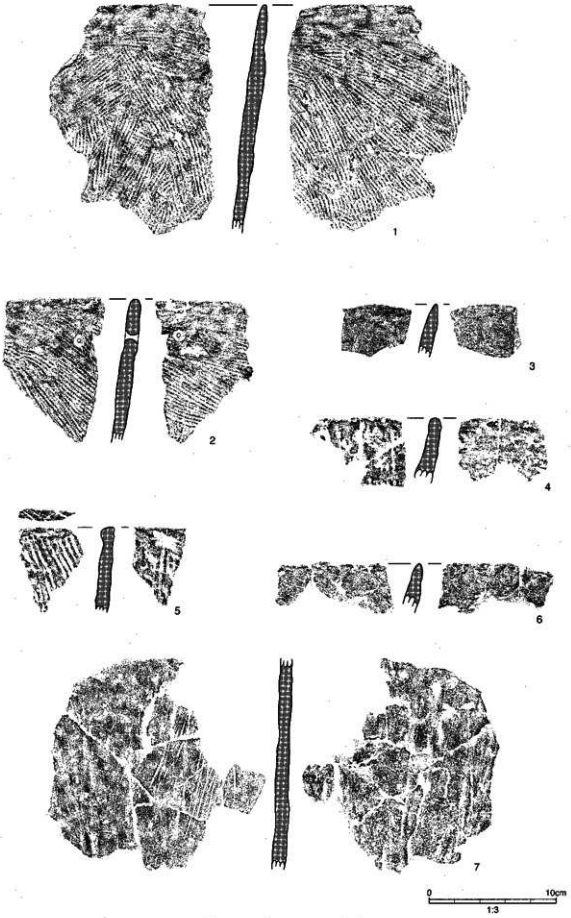
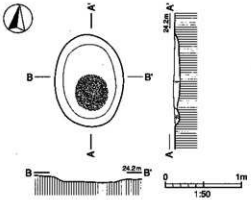
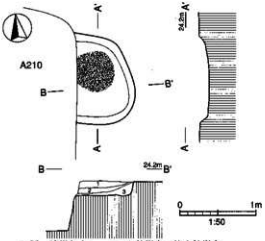


図72　F242ab・D260ab（2）



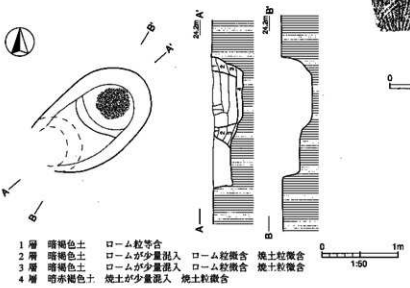
1 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒少含

F243



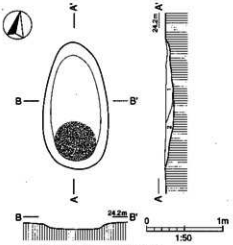
1 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒微含
2 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土混合
3 層　暗褐色土　焼土粒少含　ローム粒少含

F245



1 層　暗褐色土　ローム粒等含
2 層　暗褐色土　ロームが少量混入　ローム粒微含　焼土粒微含
3 層　暗褐色土　ロームが少量混入　ローム粒微含　焼土粒微含
4 層　暗赤褐色土　焼土が少量混入　焼土粒微含

F246

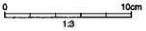


1 層　暗褐色土　ローム粒少含
2 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒少含

F244　1

F244　2

F244　3



F244

図73　F243・F244・F245・F246

F243

検出地区　L6-27gにて検出した。

遺　構　長軸m1.20×短軸0.88m×深さ0.04m、方位はN-10°-Wを測る。平面形は楕円形である。坑底中央から南壁寄りに、赤化の強い火床を１カ所検出した。

遺　物　遺物は出土しなかった。

所　見　凹み状の浅い炉穴であり、覆土は暗褐色土のみ捉えられた。

F244

検出地区　L6-27gにて検出した。

遺　構　長軸1.60m×短軸0.88m×深さ0.08m、方位はN-3°-Wを測る。平面形は楕円形である。坑底中央から南壁際に、赤化の強い火床を１カ所検出した。

遺　物　条痕文片が僅かに出土。１・２は口縁で、斜位を基本とした条痕文。２は小波状の口縁である。３は外面は縦位、内面は斜位の条痕文を施している。

所　見　凹み状の炉穴であり、坑底はやや凹凸をもつものであった。

F245

検出地区　L6-27gにて検出した。

遺　構　長軸(1.24)m×短軸(1.08)m×深さ0.21m、方位はN-38°-Wを測る。平面形は楕円形である。火床は不明瞭であったが、坑底の略中央に検出した。

遺　物　遺物の出土は無かった。

所　見　坑底から壁への立上がりは急であり、垂直に近くなっている。火床が不明瞭なことから、使用期間は短かったのではなかろうか。

F246

検出地区　L6-79gにて検出した。

遺　構　長軸(1.12)m×短軸1.00m×深さ0.36m、方位はN-47°-Eを測る。平面形は楕円形と捉えられた。火床は１カ所検出し、赤化は強いものであった。

遺　物　重複のため出土遺物は不明瞭である。

所　見　B113P6下から火床の検出によって捉えられた遺構であり、単独の炉穴であった。

F247

検出地区　L5-68gにて検出した。

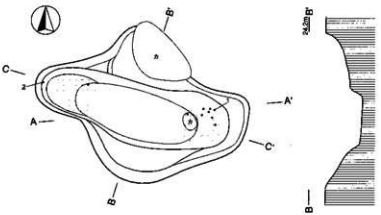
遺　構　長軸2.80m×短軸1.96m×壁高0.48m、方位はN-79°-Wを測る。平面形は数基の重複のため、不整形である。しかし炉穴としては、長楕円形を基本としている。坑底は、西壁から東壁にかけて緩やかに下っていくものであった。

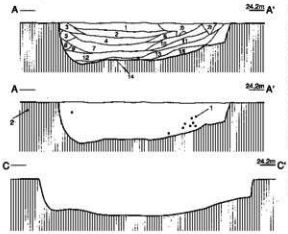
火床は本坑の東壁・西壁際に２カ所検出された。火床はいずれも全体として赤色硬化には至らないが、ともに壁際もよく赤化していた。

遺　物　10点余の出土であるが、条痕文片が多い。また、判読不明であるが、土師器の墨書土器片２点が流込んでいた。

１・２は口縁片であり、１・３・４は頸部に弱い段を一段もっている。１は内外面とも横位の、２は内外面ともに横位・斜位を主とし、３は横位を主とし、４は外面は横位、内面は斜位のそれぞれ貝殻条痕文を施している。また、胎土は砂・繊維が目立つものであった。

所　見　炉穴のピットとしては、３基程度が存在した可能性がある。

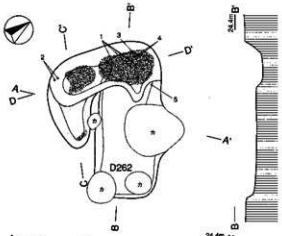


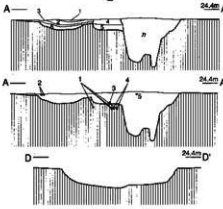


1 層　暗褐色土　焼土粒微量含
2 層　暗褐色土　ローム少量混　ローム粒、粒焼土粒含
3 層　黄褐色土　ソフトローム土体の土
4 層　暗褐色土　ローム少量混　ローム粒少量含
5 層　黄褐色土　ロームブロック
6 層　暗黄褐色土　ロームと暗褐色土が均一に混
7 層　暗褐色土　ローム少量混　ローム粒少量　炭化粒微量含
8 層　黄褐色土　ソフトロームブロック
9 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混合　焼土微量含
10 層　暗黄褐色土　ロームと暗褐色土が均一に混合　焼土粒微量含
11 層　暗黄褐色土　10層と同様
12 層　暗褐色土　暗褐色土とロームが少量混焼土粒少量含
径5～10mm大のロームブロック少量含
13 層　暗黄褐色土　ロームと暗褐色土が均一に混合　ローム粒少量含
14 層　暗赤褐色土　ロームと暗褐色土が均一に混合　ローム粒少量含
15 層　暗赤褐色土　ロームと暗褐色土が均一に混合　焼土多量含

0　1m
1:50

F247



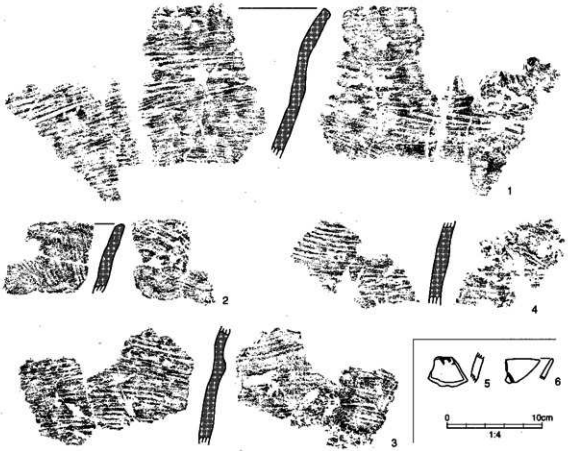


1 層　暗赤黄色土　濁った土中から焼土が滲むように混じる　焼土粒微量
2 層　暗黄褐色土　焼土有り
3 層　暗赤褐色土　濁ったローム主体
4 層　黒色土　濁ったローム土中に滲むように混じる
5 層　黒色土　少量にロームが混じる
6 層　暗赤黄褐色土　焼土塊　ロームと焼土が混合

0　1m
1:50

F248・D262

図74　F247・F248・D262



F247

F248・D262

図75　F247・F248・D262（2）

F248

検出地区　L5-67gにて検出した。

遺　構　炉穴としては、大きく２坑と捉えることができる。そのため平面形はＬ字の形となっている。

ａ坑は、長軸1.48ｍ×短軸0.52ｍ×壁高－ｍ、方位はN-21°-Wを測り、平面形は楕円形である。

ｂ坑は、長軸1.16ｍ×短軸0.52ｍ×壁高0.20ｍ、方位はN-62°-Wを測り、平面形は楕円形である。

火床は３カ所検出され、火床ａ・ｂは赤化の強い火床であり、火床ｃは赤化は淡かった。覆土１～３層は火床ｃに伴うものと捉えた。

遺　物　２基の炉穴と土坑の重複のため、遺物は100点余を数え、出土数は多かった。条痕文片が多く、黒曜石剥片も出土している。また、土坑との重複のため、須恵器片も出土している。

所　見　覆土から新旧関係を火床ａ→火床ｂと捉えた。また、火床ａ・ｂ→火床ｃとも捉えたが、火床ｂ・ｃの新旧関係は不明瞭であった。焼土分布から火床ａ・ｂ→火床ｃと捉えた。

F249

検出地区　L5-77gにて検出した。

遺　構　長軸(0.48)ｍ×短軸0.36ｍ×壁高0.04ｍ、方位はN-45°-Wを測る。平面形は卵形である。ソフトロームを極めて浅く掘込んだ、凹み状の炉穴である。坑底は中央が浅く、壁立上がりにおいて少し凹むもであった。火床は坑底中央に１カ所検出した。赤化は弱く、朱色に近い赤変であった。

遺　物　条痕文片が数点出土している。

所　見　凹み状の遺構であり、火床の赤化もやや弱い炉穴であった。

F250

検出地区　L5-77gにて検出した。

遺　構　ソフトローム中に、滲むように焼土が広がっていた炉穴であり、２基のピットの重複した炉穴である。

規模は両者を併せて計測し、長軸1.06ｍ×短軸0.36ｍ×壁高0.04ｍであった。長軸方位は捉えられなかった。深さはともに極めて浅く、凹み状の炉穴である。火床は対面する歪んだ半月状のピットにわたって存在し、２坑にまたがるように検出した。火床だけではなく、焼土も同じように分布していた。このため火床は１カ所の検出にとどまるが、赤化は強いものであった。

遺　物　条痕文片が若干出土したのみである。

所　見　形状は不明瞭な炉穴であるが、火床の赤色硬化が強い遺構であり、使用期間の長さが窺えた。このことからも本来はより大きな坑を有する炉穴とも考えられる。遺構検出面の下げ過ぎか、炉穴の基底の一部が遺存し、坑底の若干の凹みが残ったものと捉えている。

F251

検出地区　L5-77gにて検出した。

遺　構　大きく３坑の炉穴の重複であり、形状はL字状となっている。

ａ坑は、長軸0.80ｍ×短軸0.62ｍ×壁高0.24ｍ、方位はN-31°-Eを測る。火床は若干焼土化するのみであった。

ｂ坑は、長軸(0.72)ｍ×短軸0.59ｍ×壁高0.19ｍ、方位はN-33°-Eを測る。火床の赤化は強かった。

ｃ坑は、長軸(1.04)ｍ×短軸0.48ｍ×壁高0.08ｍ、方位はN-33°-Wを測る。火床は淡く赤変する程度であった。

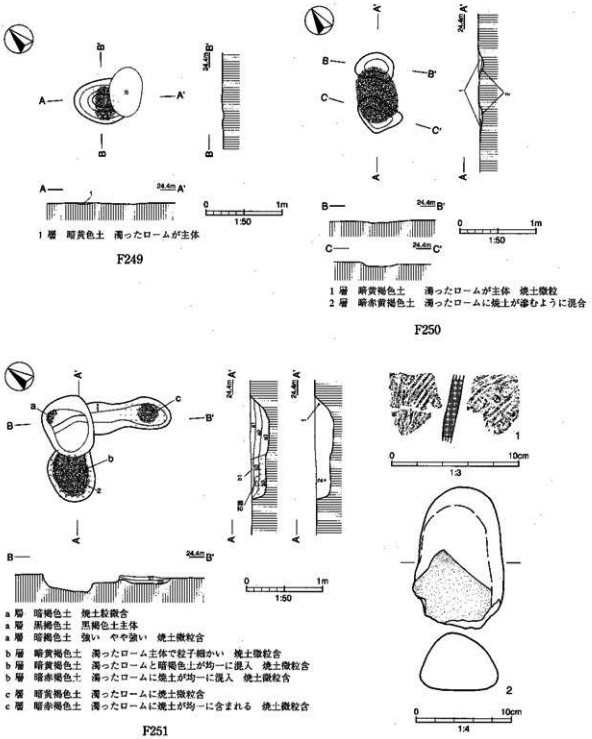
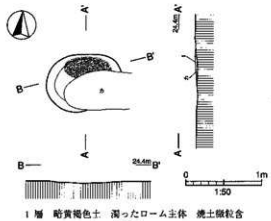


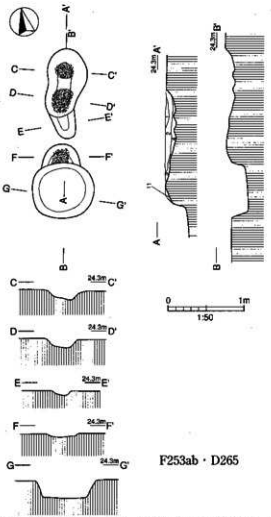
図76　F249・F250・F251

遺　物　　礫1点と条痕文片24点が出土した。礫は火床bの覆土中層から出土しており、その出土状況から炉穴廃絶後の流込みと考えられた。

所　見　　炉穴の新旧関係は覆土などから、火床b→火床aと捉えられた。火床a・cの新旧は不明であった。



F252



F253ab・D265

1 層　暗赤黄色土　湯ったロームに焼土が滲むように混じる　焼土粒少量
2 層　暗黄褐色土　湯ったロームと褐色土がほぼ均一に混合　焼土粒少量
3 層　暗黄色土　湯ったローム主体　焼土微粒数点
4 層　暗赤褐色土　暗褐色土中に焼土が均一に混じる
11 層　暗黄色土　湯ったロームに焼土微粒が少し混じる

図77　F252・F253a・b・D265

F252

検出地区　L5-77gにて検出した。

遺　構　長軸1.00m×短軸0.68m×壁高0.02m、方位はN-77°-Eを測る。平面形は楕円形である。遺構確認面であるソフトローム上に滲むように焼土の散布を認めた炉穴で、掘込みがないに等しい凹み状の炉穴である。火床は淡く赤変した程度であった。

遺　物　掘込みが無いに等しいため、遺物の出土は認められなかった。

所　見　攪乱が大きく炉穴全体は捉えられなかったが、北壁際に片寄った火床の炉穴である。

F253ab

検出地区　L5-77gにて検出した。

遺　構　隣接した2基の炉穴である。

F253aは、長軸0.92m×短軸0.40～0.52m×壁高0.04～0.08m、方位はN-90°-Eを測る。坑底は凹凸が大きいもので遺構である。火床は2カ所検出され、ともに赤化は強いものであった。

火床a1と火床a2の新旧関係は捉えられなかった。

F253bは、D265と重複し、坑と火床の大半を失っている。長軸(0.30)m×短軸0.30m×壁高0.04m、方位はN-4°-Eを測る。赤化した火床が1カ所検出された。

遺　物　条痕文片が若干出土しているのみであった。

所　見　覆土の堆積状況からF253abの新旧関係は捉えられなかったが、調査においては時間的な差は殆どないものと捉えた。

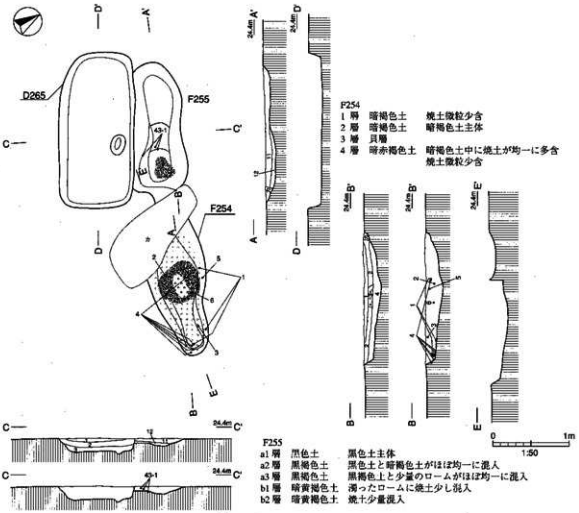


図78　F254・F255・D265

F254

検出地区　L5-67gにて検出した。

遺　構　長軸(1.44)m×短軸0.76m×壁高0.24m、方位はN-77°-Wを測る。平面形は不整長楕円形である。火床は坑底の略中央に検出され、赤化は強いものであった。また、坑内は一様に火熱を被っていた。一方、覆土中層からマガキとハイガイの小ブロックが検出された。

遺　物　70点余の出土であり、条痕文片が主体であった。撚糸文も出土している。1～5はいずれも丁寧に施された条痕文である。6は口縁肥厚する撚糸文片であった。

所　見　遺構検出面のソフトロームにおいて滲むように焼土散布していた炉穴である。貝の廃棄は炉穴廃絶後の埋没過程に行われているが、貝種などから時間差は無いものと捉えた。

F255

検出地区　L5-67gにて検出した。

遺　構　長軸1.72m×短軸0.60m×壁高0.08m、方位はN-62°-Wを測る。平面形は不整長楕円形である。坑底は西から東へ段差を有していたが、壁の立上がりは緩やかであった。火床は坑底東壁側に1カ所検出したが、坑底のロームが僅かに赤変する程度のものであった。

遺　物　30点余の出土であり、条痕文片が主体を占めている。1は口縁片であるが、内外面ともに横位の条痕文を施している。

所　見　重複するD265は奈良・平安時代の土坑であり、本炉穴の一部がこれにより損壊を被っている。

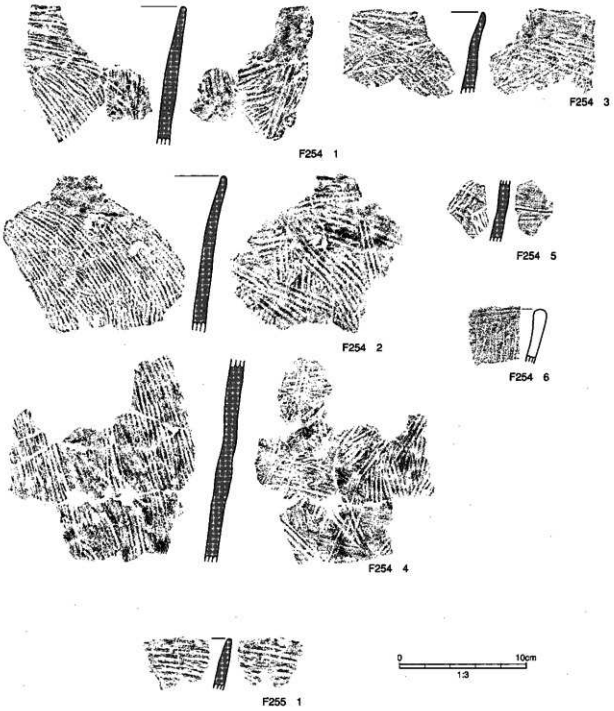


図79 F254・F255・D265（2）

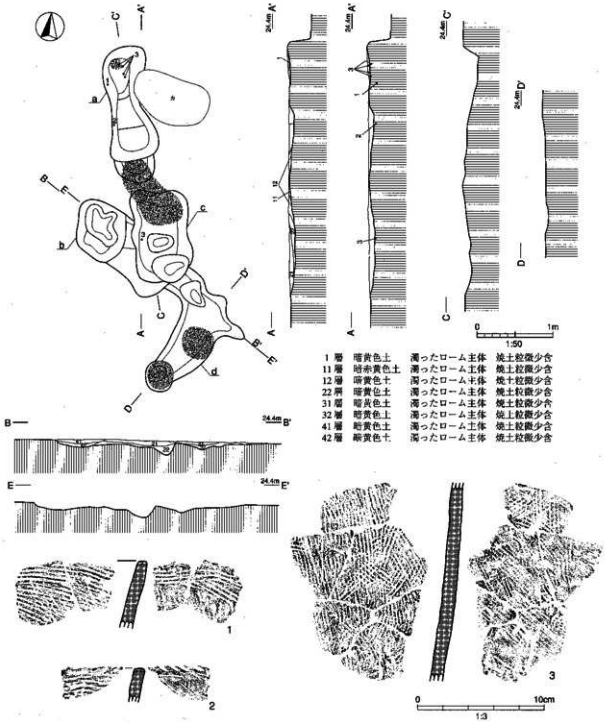


図80　F256

F256

検出地区　　L5-78gにて検出した。

遺　　構　　5基以上の炉穴の重複であり、このため平面形はアメーバ状となっている。

a坑は、長軸1.82m×短軸0.57m×壁高0.21mを測る。火床は、坑底に焼土粒が散布し、火熱痕が認められる程度であり、淡く赤変していた。

b坑は、長軸0.85 n ×短軸0.73m×壁高0.09mを測り、浅い凹み状の炉穴である。火床は淡く赤変程度であった。

c坑は、長軸－m×短軸1.08壁高0.07mを測る。浅い凹み状の炉穴である火床は淡く赤変する程度であった。

d坑は、長軸1.52m×短軸0.58m×壁高0.05mを測る。火床は2カ所検出され、火床d1は赤化は弱く、火床d2は淡く赤変する程度であった。

遺　物　条痕文片を主体として48点の出土をみた。そのうちa坑は3点、b坑は1点の出土であった。

所　見　各炉穴の新旧関係は覆土より、d坑→c坑→b坑と捉えられた。しかしa坑とb坑の新旧は不明瞭であり、また、d坑の火床d1とd2の新旧も捉えられなかった。調査時には、a・b坑の使用度は低く、c・d坑の使用度は高いものと捉えられていた。

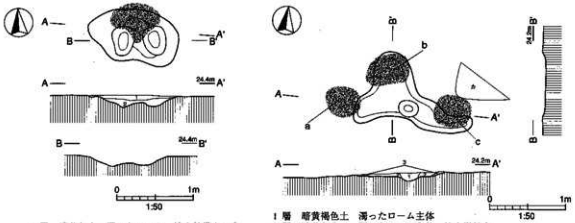
F257

検出地区　L5-67gにて検出した。

遺　構　長軸1.20m×短軸0.68m×壁高0.08m、方位はN-75°-Wを測る。平面形は不整楕円形である。坑底は浅く、スリ鉢状の2基の凹みの遺構である。火床は1カ所検出しているが、炉穴のピットからはみ出て残されていた。その火床はかすかに赤変する程度であり、炉穴全体としては火熱を被った痕は認められなかった。

遺　物　条痕文片が10点余出土している。

所　見　遺構検出面を下げすぎたためか炉穴の基底のみ遺存した遺構であり、坑底の凹みがピットとして検出された遺構である。このため火床はピット内からはみ出し、そのピットにわたって残されたものと捉えた。



F257　　図81　F257・F258　　F258

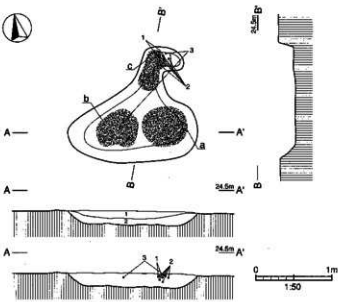
F258

検出地区　L5-67g検出した。

遺　構　平面形はアメーバ状となっており、遺構規模は意識的に捉えている。長軸2.04m×短軸0.84m×壁高0.04m、方位はN-3°-Eを測る。火床は3カ所検出し、いずれもピットから外にはみ出るような状態である。火床は3カ所とも淡く赤化する程度であり、周辺のソフトロームには滲むように焼土が散布していた。

遺　物　条痕文片が若干出土したのみである。

所　見　F257と同様に、遺構検出面を下げすぎたためか炉穴の基底のみ遺存した遺構であり、坑底の凹みがピットとして検出された遺構である。このため覆土の堆積も捉えきれず、火床の新旧関係は不明である。



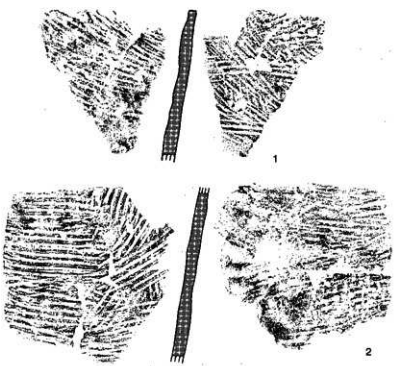


図82　F259

F259

検出地区　　L5-88gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.72m×短軸1.52m×壁高0.22m、方位はN-80°-Wを測る。平面形は石匙状である。火床は３カ所検出されたが、いずれも強く赤色硬化には至らず、赤変するのみであった。

遺　　物　　条痕文片を主体として、55点の出土を認め、火床ｃに伴う遺物が多い傾向が窺えた。１・２はいずれも斜位から横位に条痕文が施される。

所　　見　　覆土からは火床の新旧関係は捉えられなかった。

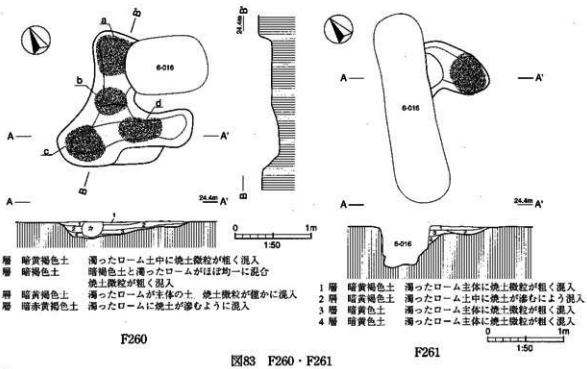


図83　F260・F261

F260

検出地区　L5-78gにて検出した。

遺　構　アメーバ状の平面形であり、遺構規模は意識的に捉えている。a～cは長軸1.76m×短軸0.60m、c～dは長軸1.76m×短軸0.45mであり、深さはそれぞれ0.16m程度であった。火床は3カ所検出し、火床aは赤化しており、火床b・cは淡く赤変する程度であった。

遺　物　条痕文片が若干出土しているのみである。

所　見　4基の火床の新旧関係は、覆土からは捉えられなかった。

F261

検出地区　L5-78gにて検出した。

遺　構　長軸0.88m×短軸0.36m×壁高0.10～0.24m、方位はN-29°-Wを測る。平面形はL字形である。火床は炉穴のピットから坑外へはみ出すように検出し、強く赤化したものであった。

遺　物　条痕文片が出土したが、稀であった。

所　見　掘込みのやや浅い炉穴であるが、火床がピット外へでることは、炉穴の基底部のみが遺存した可能性もある。

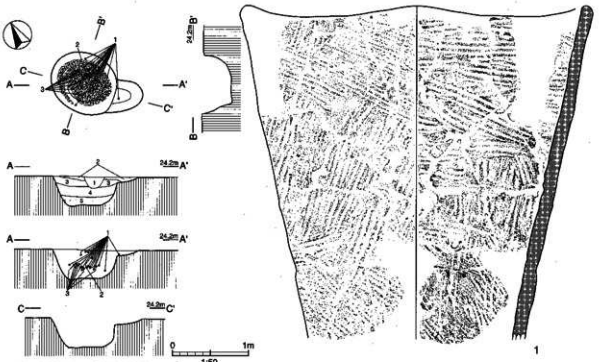
F262

検出地区　L5-79gにて検出した。

遺　構　長軸1.24m×短軸0.80m×壁高0.36m、方位はN-45°-Wを測る。平面形は略円形に張出し部が付いた形状である。火床1カ所検出され、坑底全体に広がるように渦巻き状に認められた。火床の赤化は極めて強く、壁の一部も赤化していた。覆土5層は火床そのものであった。

遺　物　炉穴としては多く、80点の出土をみた。条痕文片が主体を占めている。

所　見　周辺の遺構状況などから炉穴と判断したが、遺構の形状や火床の状態から炉穴ではなく、炉痕の可能性もあることを指摘しておきたい。



1 層　暗褐色土　暗褐色土主体
2 層　暗黄褐色土　薄ったローム主体　焼土微粒
3 層　暗黄褐色土　薄ったローム主体
4 層　暗褐色土　暗褐色土とが薄ったロームが均一に混入
5 層　暗赤褐色土　焼土層に火熱を被り暗褐色土が赤色化した土

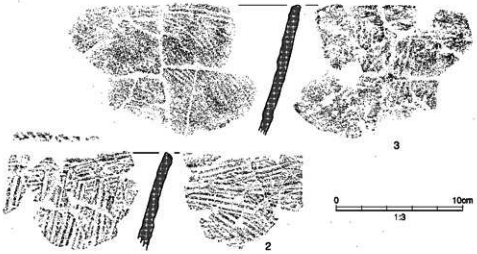
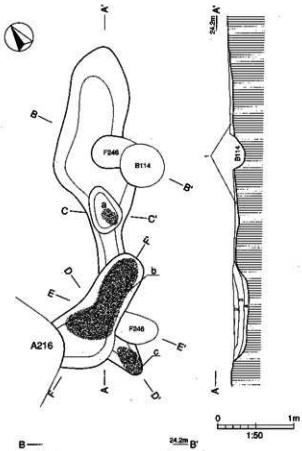
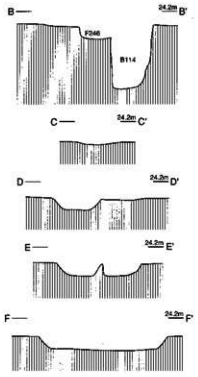


図84　F262





1 層　暗黄色土　　濁ったロームが主体のに焼土微粒が僅かに混入
2 層　暗黄色土　　暗褐色土主体のに焼土微粒が僅かに混入
3 層　暗黄褐色土　濁ったロームと暗褐色土がほぼ均一に混合
　　焼土が若干滲むように混入
4 層　暗赤黄褐色土　濁ったロームと暗褐色土がほぼ均一に混合
　　焼土が若干滲むように混入

図85　F263

F263

検出地区　　L5-79gにて検出した。

遺　　構　　大きく３坑が重複する炉穴である。

ａ坑は、長軸2.88ｍ×短軸0.88ｍ×壁高0.05ｍ、方位はN-37°-Eを測る。火床は微かに赤変している程度である。

ｂ坑は、長軸1.74ｍ×短軸0.79ｍ×壁高0.19ｍ、方位はN-71°Eを測る。火床の赤化は弱いものであった。

ｃ坑は、長軸(0.56)ｍ×短軸(0.40)×壁高0.02ｍ、方位は-0°-Eを測る。火床は微かに赤変する程度であった。

遺　　物　　17点の条痕文片と礫出土をみたが、いずれも小破片であり、図示するには至らなかった。

所　　見　　各炉穴の新旧関係は、遺構の確認状況からｃ坑→ｂ坑を捉え、覆土からａ坑→ｂ坑と捉えられた。しかしａ・ｃ坑との新旧関係は捉えられなかった。

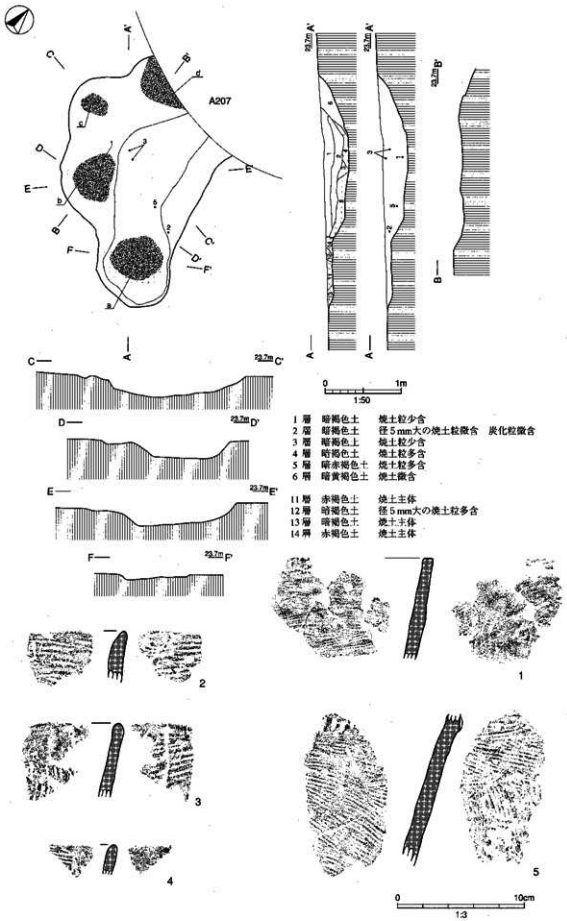

A207
1 層　暗褐色土　焼土粒少含
2 層　暗褐色土　径5mm大の焼土粒微含　炭化粒微含
3 層　暗褐色土　焼土粒少含
4 層　暗褐色土　焼土粒多含
5 層　暗赤褐色土　焼土粒多含
6 層　暗黄褐色土　焼土微含
11 層　赤褐色土　焼土主体
12 層　暗褐色土　径5mm大の焼土粒多含
13 層　暗褐色土　焼土主体
14 層　赤褐色土　焼土主体
0　1m
1:50
0　10cm
1:3

図86　F264

F264

検出地区　L6-40gにて検出した。

遺　構　長軸2.88m×短軸1.92m×壁高0.20～0.28m、方位はN-41°-Wを測る。平面形は楕円形である。炉穴のピットは大きく1坑となっているが、本来は数基が重複したものと考えられた。火床は4カ所検出し、いずれも赤化していた。火床aは坑底に、火床b～cは基の立上がりに所在し、火床dはA207によって損壊している。

遺　物　小破片の条痕文片を主体として10点余の出土をみた。

所　見　覆土などから、火床a・c・d→不明火床→火床bへとの新旧関係を捉えることができた。不明火床は覆土の堆積から炉穴1基の存在を想定できるものであり、その火床は検出できなかったことによる。また、火床aの北側に広がる坑底にも炉穴の存在の可能性があった。

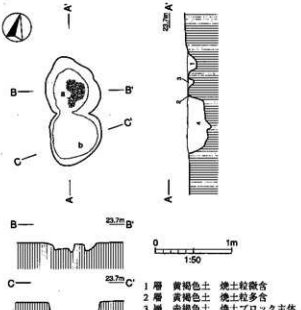


図87　F265a・b

F265

検出地区　L6-40gにて検出した。

遺　構　本炉穴は大きく2基の重複であり、平面形はピーナッツ状となっている。このため遺構規模は意識的に計測したが、長軸1.44m×短軸0.72m×壁高0.10m～0.20m、方位はN-14°-Wを測る。火床の深さが0.10mである。坑底の凹凸が著しい炉穴であった。

遺　物　出土は稀であり、しかも土師器の小片であった。重複する掘立柱建物跡との関連で捉えられ、本炉穴に伴うものではなかった。

所　見　b坑には火床が失われおり、形状として炉穴とするには疑問も残るが、暗褐色土の覆土の堆積などから炉穴と判断した。

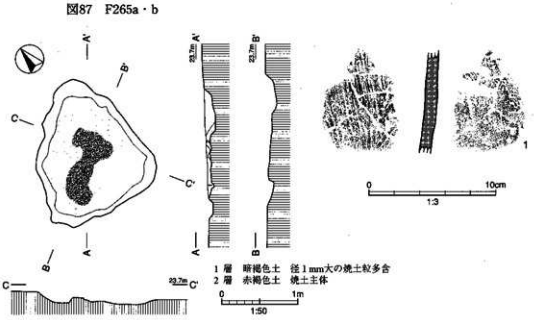


図88　F266

F266

検出地区　L6-30・40gにて検出した。

遺　構　長軸1.80m×短軸1.6m×壁高0.08～0.12m、方位はN-22°-Eを測る。平面形は歪んだ三角形状である。凹凸ある坑底であった。この坑底の略中央に、赤化した火床を１カ所検出した。火床付近には、黒褐色土を混入した焼土ブロックが厚く堆積していた。

遺　物　出土した遺物は、図示した条痕文片が１点出土したのみである。胴部下半で、内外面とも縦位の条痕文を施している。内面は不明瞭であった。

所　見　蛇行した帯状になった火床を検出した。火床としても不定形なものであった。

F267

検出地区　L6-40gにて検出した。

遺　構　最低４基の炉穴が重複した遺構である。長軸1.92m×短軸1.04m×壁高0.10～0.20m、方位はN-24°-Eを測る。平面形は「へ」の字状である。火床はそれぞれのピット内に計３カ所検出されているが、火床の検出できなかった坑にもその存在が想定できるものであった。ａ坑は坑底の略中央から西壁寄りに、ｂ坑は坑底の南壁寄りに、ｃ坑は坑底の略中央にそれぞれ火床が検出された。いずれも赤化した火床であるが、ａ坑は壁の立上がりに一部及んでいた。

遺　物　全体で30点余の条痕文片が出土している。しかしａ坑の出土が多いようである。１～３はいずれもａ坑の出土である。深鉢の胴部片であり、内外面とも縦位及び斜位の条痕文を施している。

所　見　各炉穴の新旧関係は、火床のない炉穴が火床ａ・ｂより古いが、火床については捉えられなかった。火床の無いピットは炉穴によって壊されており、このことから時間差はあまりなく火床が失われた炉穴と捉えた。

F268

検出地区　L6-30gにて検出した。

遺　構　３基の重複である。長軸1.92m×短軸0.80m×壁高0.04～0.24m、方位はN-41°-Eを測る。平面形はアメーバ状である。火床は各ピットの交錯する中央に検出した。

遺　物　10点余の出土。２点の鉄滓も出土している。１は外面は細かく丁寧に、内面はやや粗く貝が条痕文を施文している。

所　見　３基の重複した炉穴であるが、覆土より新旧関係を火床→東坑と捉えた。この火床が北坑及び南西坑に伴うのかは、火床上の焼土の堆積から南西坑に伴うものと捉えた。また、北坑と南西坑が同一であるかは判断できにくかった。ピットが交錯する中央で大きく屈曲することから、本来は別の炉穴と捉えられよう。深いピットは調査時にも掘立柱建物跡の柱穴と捉えていた、覆土に焼土が多いことなどから炉穴と捉えることとした。しかし鉄滓の出土から、他の時代・性格を有する遺構であるかもしれない。

F269

検出地区　L6-30gにて検出した。

遺　構　長軸1.28m×短軸1.24m×壁高1.09m、方位は-40°-Wを測る。平面形は歪んだ方形である。坑底は略平坦であり、立ち上がりは殆どなく、浅い皿状の炉穴である。赤化した火床が、坑底中央に検出された。

遺　物　条痕文が僅かに出土しているのみである。

所　見　極めて浅い凹み状の炉穴である。焼土が坑底全域に分布している炉穴でもあった。

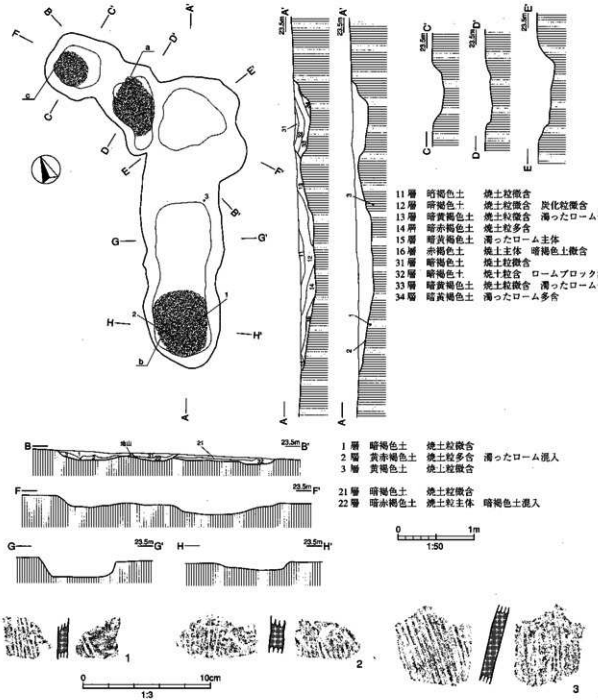
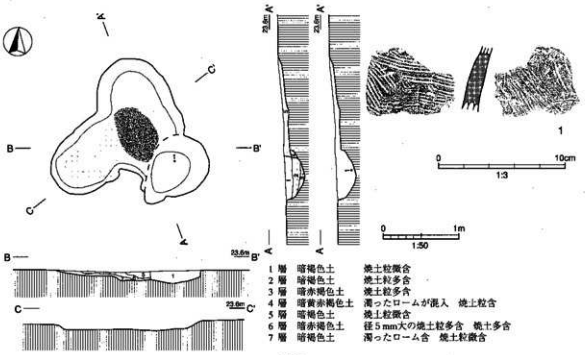
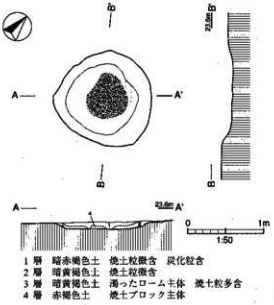

11 層　暗褐色土　焼土粒微含
12 層　暗褐色土　焼土粒微含　炭化粒微含
13 層　暗黄褐色土　焼土粒微含　湯ったローム含
14 層　暗赤褐色土　焼土粒多含
15 層　暗黄褐色土　湯ったローム主体
16 層　赤褐色土　焼土主体　暗褐色土微含
31 層　暗褐色土　焼土粒微含
32 層　暗褐色土　焼土粒含　ロームブロック混入
33 層　暗黄褐色土　焼土粒微含　湯ったローム含
34 層　暗黄褐色土　湯ったローム多含
1 層　暗褐色土　焼土粒微含
2 層　黄赤褐色土　焼土粒多含　湯ったローム混入
3 層　黄褐色土　焼土粒微含
21 層　暗褐色土　焼土粒微含
22 層　暗赤褐色土　焼土粒主体　暗褐色土混入
0　1m
1:50
0　10cm
1:3

図89　F267



F268



F269

図90　F268・F269

F270

検出地区　　M6-32gにて検出した。

遺　　構　　２基の炉穴の重複した遺構である。

ａ坑は、長軸0.83ｍ×短軸(0.72)ｍ×壁高0.08ｍ、方位はN-39°-Wを測る。平面形は歪んだ方形である。明確な火床は認められず、坑底南西から壁の立上がりにかけて焼土のみ検出した。

ｂ坑は、長軸1.68ｍ×短軸0.98ｍ×壁高0.16ｍ、方位はN-35°-Wを測る。平面形は歪んだ長方形である。赤化した火床を、南西壁際に検出した。

遺　　物　　遺物は出土しなかった。

所　　見　　覆土は１～４層がF270a、５～７層がF270bであった。覆土から各炉穴の新旧関係を捉えることは不明瞭であったが、ａ→ｂと捉えた。

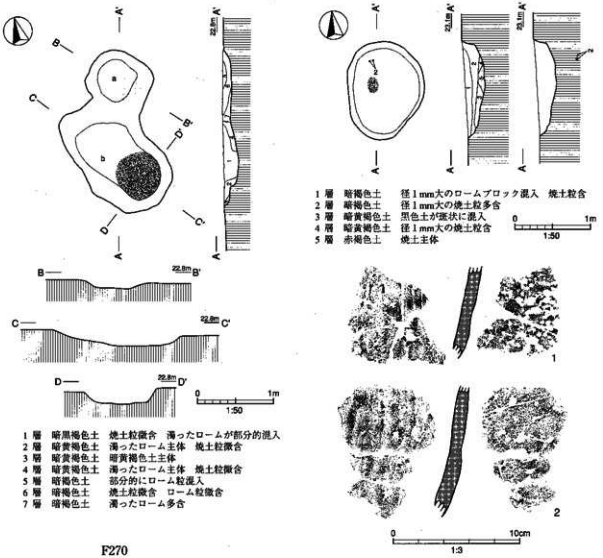


図91　F270・F271

F271

検出地区　M5-32gにて検出した。

遺　構　長軸1.24m×短軸1.00m×壁高0.24m、方位はN-13°-Eを測る。平面形は歪んだ楕円形である。坑底の中央からやや北西寄りに、淡く赤変した小さな火床を検出した。坑底は凹凸があり、また、壁の立ち上がりは急で坑底中央に行くほど低くなる炉穴である。覆土は大きく坑底直上層の3～5層と、上層の1・2層に分けられ、2度の使用を示していた。

遺　物　条痕文片が若干出土した。1・2とも茎状工具のナデを行っている。

所　見　炉穴の平面規模に対して、火床範囲が小さい遺構である。また3層から、炉穴としての1次使用後に更に火の使用を行ったことが窺えた。

F272

検出地区　L5-60gにて検出した。

遺　構　大きく2基が重複した炉穴である。平面形はヒョウタン形をしている。長軸2.00m×短軸0.44m×壁高0.08m、方位はN-70°-Wを測る。火床は3カ所検出し、火床a・bは同一ピットの対極の壁の立上がりに認め、火床cは東坑の東壁際に検出している。火床aは淡く赤化し、火床bはロームが薄

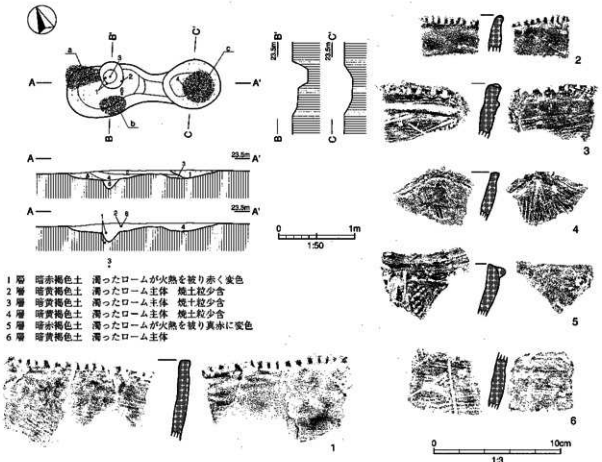


図92　F272

く赤みを示す程度に、火床ｃは強く赤化していた。

遺　　物　　条痕文片を主体として、20点余が出土している。１～５は口縁部片である。

所　　見　　火床の新旧関係は覆土から火床ａ・ｂ→火床ｃと捉えた。しかし火床ａ・ｂは捉えられなかった。

F273

検出地区　　M5-41gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.28m×短軸0.24m×壁高0.04m、方位はN-31°-Wを測る。ピットと火床が大きくずれる炉穴である。覆土は暗褐色土のみ捉えられた。

遺　　物　　出土しなかった。

所　　見　　遺構規模も極めて小規模であり、ピットと火床が大きくずれるなど炉穴であるか疑問も残る遺構である。しかし遺構検出面が低かったため、炉穴の坑底の凹みが遺存したものと判断した。炉穴の他に竪穴住居跡の炉跡も考慮したが、周辺の遺構状況から条痕文期の炉穴と判断した。

F274

検出地区　　M5-51gにて検出した。A218と重複する。

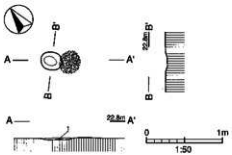
遺　　構　　近接した２基のピットと、それにわたる焼土をもって１基の炉穴と捉えた。

北のａは、長軸(0.38)m×短軸0.28m×壁高0.04m、方位はN-66°-Eを測る。平面形は小楕円形。

南のｂは、長軸1.16m×短軸0.48m×壁高0.06m、方位はN-48°-Wを測る。平面形はブーメラン状。

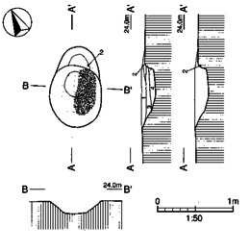
２坑にわたる焼土はロームが赤変した程度であり、ピット内の火熱痕は極めて不明瞭であった。

遺　　物　　出土しなかった。

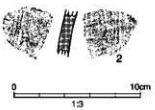


1 層　暗黄褐色土　濁ったローム主体　焼土微粒微含

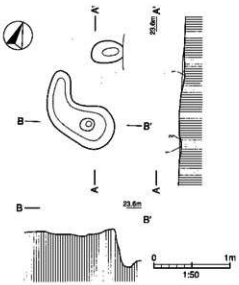
F273



1 層　暗黄褐色土　濁ったローム主体　焼土微粒含
2 層　暗黄色土　ローム主体
3 層　暗黄褐色土　濁ったローム主体　焼土微粒含
4 層　暗赤黄色土　濁ったローム主体が火熱を被り赤く変色
焼土微粒含

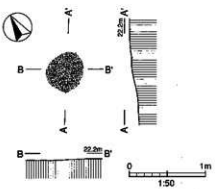


F276

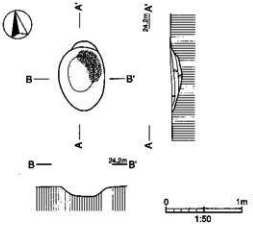


1 層　暗黄褐色土　濁ったローム主体　焼土微粒微含
2 層　暗赤褐色土　ローム主体が火熱を被り赤く変色　焼土微粒微含

F274



F275



1 層　暗黄褐色土　濁ったローム主体　焼土微粒少含
2 層　暗黄褐色土　濁ったローム主体　焼土少量含
3 層　暗赤褐色土　濁ったローム主体　焼土微粒含

F277

図93　F273・F274・F275・F276・F277

F275

検出地区　M5-51gにて検出した。

遺　構　掘込みは確認できず、火床のみの検出であった。火床下は僅かに凹む程度である。

遺　物　出土しなかった。

所　見　遺構検出面より浅い掘込みの遺構であったと思われる。周辺の遺構状況より条痕文期の炉穴と捉えたが、炉跡の可能性も指摘しておく。

F276

検出地区　L5-70gにて検出した。

遺　構　長軸1.08m×短軸0.64m×壁高0.28m、方位はN-30°-Eを測る。平面形は楕円形である。北西壁は急激に立上がっている。赤化が強い火床を、坑底中央から壁立上がりにかけて検出した。

遺　物　条痕文片が若干出土した。1は内外面とも縦位の条痕文が施文される。

所　見　近接する炉穴に比して掘込みのやや深い遺構である。なお、覆土4層は火床本体であろう。

F277

検出地区　L5-80gにて検出した。

遺　構　長軸0.92m×短軸0.58m×壁高0.12m、方位はN-12°-Eを測る。平面形は楕円形である。坑底から北西壁立上がりにかけて、淡く赤変した程度の火床を検出した。火床上の焼土層の堆積から見ると赤片は弱いものであった。F276と同様、坑本体から張出し状に若干北壁側に出ている。

遺　物　出土しなかった。

所　見　南壁はやや緩やかであるが、北壁の壁立ち上がりは急で、この北壁を枕にしたように火床及び焼土が堆積している炉穴である。

F278

検出地区　L5-80・90gにて検出した。

遺　構　近接する4基の炉穴一括した。各炉穴とも凹み状であり、ソフトロームへの掘込みは浅いものである。

F278aは、長軸0.48m×短軸0.36m×深さ0.04m、方位はN-87°-Eを測る。平面形は楕円形である。赤化した火床と言うより焼土が認められるだけであった。

F278bは、長軸0.64m×短軸0.56m×深さ0.08m、方位はN-80°-Eを測る。平面形は楕円形であり、坑底は凹凸があり、中央がやや凹んでいる炉穴である。火床は坑底中央から南壁立上がりにかけて広がって認めたが、赤化は弱いものであった。特に坑底の火床は火熱痕を認める程度であった。

F278cは、長軸0.52m×短軸0.36m×深さ0.06m、方位はN-30°-Eを測る。平面形は楕円形であり、坑底はやや凹凸ある炉穴である。火床は坑底から張出部にかけて検出した。淡く赤変した程度であった。

F278dは、長軸1.20m×短軸0.44m×深さ0.14～0.16m、方位はN-88°-Wを測る。平面形は不整形である。本坑は2基の炉穴の重複であった。

遺　物　条痕文片が18点出土している。1・2は内外面とも、比較的丁寧な縦位の条痕文を施している。

所　見　遺構の検出時にはソフトロームにうすく焼土が散布しており、大きな範囲の炉穴として捉えた。しかしそれぞれの炉穴として捉えなおしたが、本来は炉穴の上部で、重複した可能性が想定される遺構である。

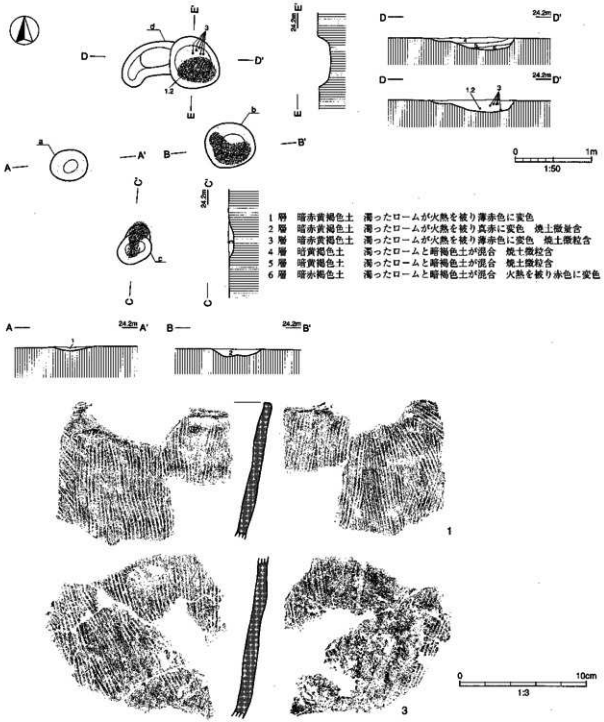


図94　F278a・b・c・d

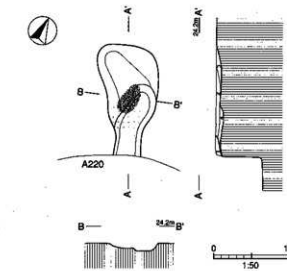
F279

検出地区　L5-80gにて検出した。

遺　構　長軸0.72m×短軸0.62m×深さ0.08m、方位はN-25°-Wを測る。平面形は不整形である。火床の赤化は弱かったが、火床周辺の坑底には広く火熱痕が認められた。

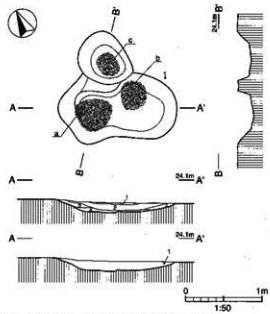
遺　物　条痕文の小片が出土するが、稀であった。

所　見　2基の炉穴か不明瞭であるが、屈曲したような形状から複数の炉穴が想定された。形状から南側が新しく、検出した火床はこの坑のものと捉えた。また、A220によつて失われた炉穴があると想定している。



1 層　暗褐色土　暗褐色土主体
2 層　暗褐色土　暗褐色土に滲むように焼土含まれる
3 層　暗黄褐色土　暗褐色土と薄ったロームがほぼ均一に混合
4 層　暗黄褐色土　薄ったローム主体　焼土微粒含

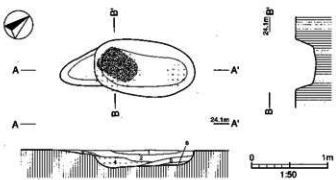
F279



1 層　暗赤褐色土　暗褐色土に焼土が滲むよう少含
2 層　暗褐色土　暗褐色土中に滲むように焼土含まれる
3 層　暗黄褐色土　薄ったローム主体
4 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土がはっきりと混合
暗褐色土が火熱を被り赤色化

F280 1

F280



1 層　暗褐色土　暗褐色土と薄ったロームがほぼ均一に混合　焼土微含
2 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の薄ったロームがほぼ均一に混合　焼土微含
3 層　暗黄褐色土　薄ったローム主体
4 層　暗赤褐色土　暗褐色土が火熱を被り赤く変色　焼土微含
5 層　暗黄褐色土　暗褐色土と極少量の薄ったロームがほぼ均一に混合
6 層　暗黄褐色土　薄ったロームの中に薄く焼土が滲むように含まれる

F281

図95　F279・F280・F281

F280

検出地区　M5-91gにて検出した。

遺　構　３基の炉穴の重複した遺構である。長軸1.56m×短軸1.22m×深さ0.14～0.20m、方位はN-27°-Eを測る。平面形はアメーバ状である。いずれも赤化の強い火床が３カ所検出され、それぞれ火床周辺に火熱痕が認められた。

遺　物　条痕文片が稀に出土した。

所　見　覆土からは、火床の新旧関係を捉えることはできなかった。

F281

検出地区　M5-91gにて検出した。

遺　構　長軸1.76m×短軸0.72m×深さ0.20～0.28m、方位はN-40°-Eを測る。平面形は長楕円形であ

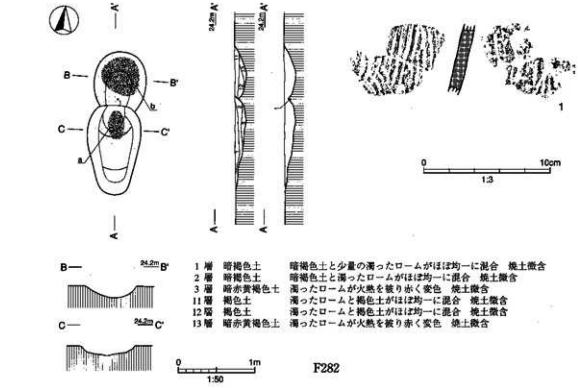


図96　F282・F283

る。坑底の火床にむかって下る、比較的凹凸のない炉穴である。西壁側に浅い張出状の凹みが認められる。焼土の分布のみの火床が1カ所検出されたが、覆土4層下の火床は赤化が強かった。また、6層下は火熱痕のみで、6層が火床となっていた。

遺　物　　条痕文片が若干出土している。

F282

検出地区　　L5-90gにて検出した。

遺　構　　2基の炉穴が直線的に重複した炉穴であり、このため平面形は落花生状である。長軸1.76m×短軸0.64m×深さ0.12～0.16m、方位はN-4°-Wを測る。

F282aは坑底が北に傾斜し、火床は淡く赤変する程度であった。F282bは緩やかなスリ鉢状であり火床

の赤化は弱いものであったが、その周囲に火熱痕を認めた。

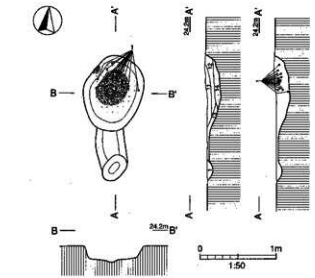
遺　物　　条痕文片が稀に出土した。

F283

検出地区　　L5-100gにて検出した。

遺　構　　3坑を検出したが、基本的には2基の炉穴の重複する遺構である。長軸1.64m×短軸0.76m×深さ0.16m、方位はN-13°-Eを測る。火床は2カ所検出している。平面形は丸みのある台形状であった。火床aは赤化が強く、周囲にも火熱痕が認められた。火床bは滲むように赤変した程度であった。

遺　物　　条痕文片が若干出土している。



1 層　暗褐色土　　暗褐色土と湯ったロームがほぼ均一に混合
11 層　暗黄褐色土　湯ったロームと少量の暗褐色土がほぼ均一に混合　焼土粒少含
12 層　暗黄褐色土　湯ったロームと暗褐色土がほぼ均一に混合　焼土粒微含
13 層　暗黄褐色土　湯ったローム主体
14 層　暗赤褐色土　湯ったロームと暗褐色土が混合

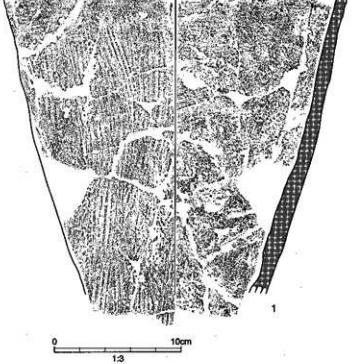


図97　F284

所　見　　覆土から火床b→火床a→c坑と捉えた。c坑は土坑なのか判断に迷う遺構であった。

F284

検出地区　　L5-100gにて検出した。

遺　構　　長軸1.68m×短軸0.44m×深さ0.18m、方位はN-8°-Wを測る。平面形は土筆状であった。凹凸のある坑底の炉穴であり、南側に張出し状の浅いピットが認められる。火床は赤化が強く、壁の一部も火熱痕を認められた。南側のピットには火熱痕を含めて確認されなかった。

遺　物　　条痕文片を主体として50点余の出土があったが、小片が多かった。1は大きく接合し、器形が窺われるものであった。

所　見　　覆土からF284→南側ピットと捉えられた。炉穴か土坑かと判断に迷うものであるが、覆土からは時間差のないものと捉えられ、炉穴と扱っている。

表7　F284遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	推定(270)×－×残存<241> 外面　斜位縦位の条痕文 口縁－内面はナデ一部に斜位の条痕文	橙褐色～ 暗褐色 良	繊維	2/3	

F285

検出地区　M5-92gにて検出した。

遺　構　5基の炉穴の重複であり、火床は4カ所検出した。このため平面形はアメーバ状である。遺構規模は意識的に捉え、長軸3.04m×短軸0.64m×深さ0.02～0.32m、方位はN-44°-Eと測った。F285a・bとも火床の赤化は強く、cは淡く赤化し、dは滲むような赤変であった。

遺　物　条痕文を主体として40点余が出土している。また、稀ではあるが撚糸文も出土している。1は外面は縦位、内面は横位に、3は内外面とも斜位に条痕文を施す。2は内面は茎状工具による横位のナデを施している。

所　見　覆土から新旧関係を、F285b・c・d→aと捉えられたが、b・c・dの新旧は捉えられなかった。

F286

検出地区　M6-1gにて検出した。

遺　構　長軸(0.45)m×短軸0.35m×深さ0.05m、方位はN-33°-Wを測る。平面形は長楕円形であり、掘込みは殆どなかった。明瞭な火床は検出されなかったが、坑底中央から北西のピット外まで火熱痕を認めた。

遺　構　条痕文の小片のみ若干出土した。

所　見　炉穴の最下層のみが遺存した遺構と判断した。

F287

検出地区　M6-3gにて検出した。

遺　構　長軸1.20m×短軸0.60m×深さ0.10m、方位はN-24°-Eを測る。平面形は不整形である。2基の炉穴の重複である。aの火床は坑底の略全体から壁立上がりにかけて、強く赤化したものを検出した。bは坑底壁立上がり際に、滲むような赤変程度のものを検出した。

遺　物　出土した遺物は無かった。

所　見　覆土から新旧関係を、火床a→bと捉えられた。覆土からは判然としないが、1～3層において、埋没過程での再使用の可能性が窺えた。

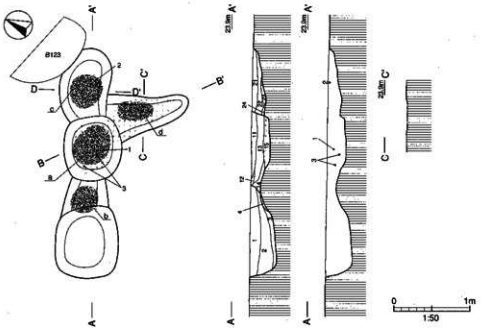
F288

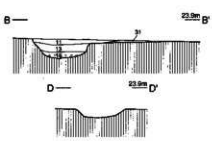
検出地区　L6-10gにて検出した。

遺　構　2基のピットの重複である。長軸2.68m×短軸0.80m×深さ0.12～0.20m、方位はN-71°-Wを測る。平面形は不整形である。火床2カ所検出され、火床aの赤化は弱く、火床bは淡く赤化していた。また、炉穴の埋没過程において2度の火の使用がみとめられた。

遺　物　条痕文が10点余出土している。

所　見　ピットとしては2基であるが、炉穴としては4回の使用と捉えた。火床aは7層に伴い、火床bは9層に伴うものである。また、覆土から新旧関係を火床b→火床a→覆土中焼土と捉えたが、覆土中の2カ所の焼土の新旧は捉えられなかった。





1 層	暗褐色土	暗褐色土と褐色土が混合　焼土微粒含
2 層	暗褐色土	暗褐色土と薄ったロームが若干混合
3 層	暗黄褐色土	薄ったローム主体　暗褐土少量含
4 層	暗赤黄褐色土	ロームが火熱を被り赤く変色
11 層	暗赤褐色土	薄ったロームと少量と暗褐色土がほぼ均一に混合　焼土多含
12 層	暗赤黄褐色土	薄ったローム主体　焼土微含
13 層	暗黄褐色土	薄ったロームと暗褐色土混合
14 層	暗黄褐色土	薄ったローム主体
15 層	暗赤褐色土	薄ったロームと暗褐色土が火熱を被り赤く変色
21 層	暗褐色土	暗褐色土と少量の薄ったロームが粗く混合　焼土微含
22 層	暗褐色土	暗褐色土と薄ったローム混合
23 層	暗赤褐色土	暗褐色土が火熱を被り赤く変色　焼土多含
24 層	暗黄褐色土	薄ったローム主体
31 層	暗黄褐色土	薄ったローム主体　焼土微含

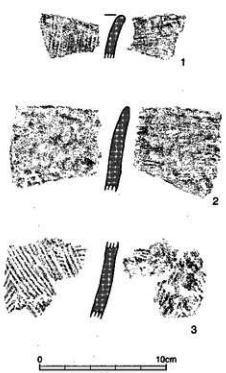
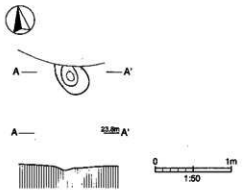
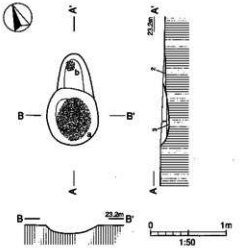


図98　F285

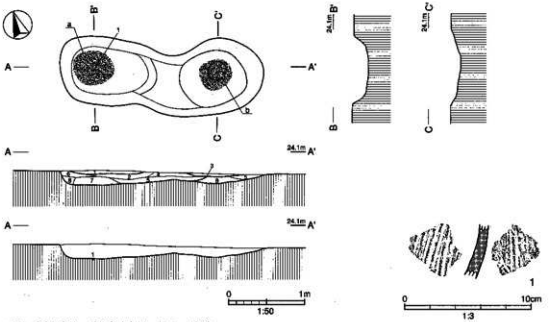


F286



1 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の湯ったローム混合　焼土少量含
2 層　暗黄褐色土　湯ったローム主体
3 層　暗赤褐色土　湯ったロームと暗褐色土混合　火熱を被り淡く赤色化

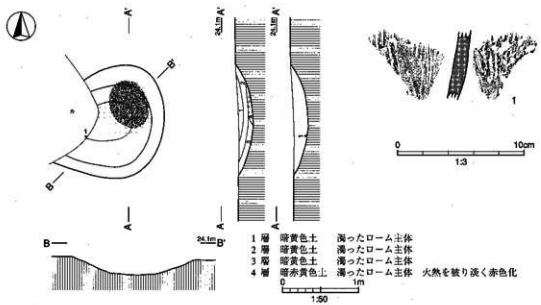
F287



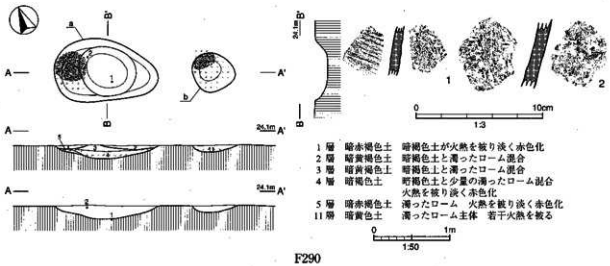
1 層　暗赤褐色土　暗褐色土と湯ったローム混合
2 層　暗褐色土　暗褐色土と湯ったローム混合　火熱を被り赤色化
3 層　暗褐色土　暗褐色土と湯ったローム混合　火熱を被り赤色化
4 層　暗黄色土　湯ったローム主体
5 層　暗黄色土　湯ったローム主体
6 層　暗赤黄色土　湯ったロームが火熱を被り淡く赤色化
7 層　赤褐色土　湯ったロームがとても強い火熱を被り真赤に変色
8 層　暗黄色土　湯ったローム主体　7層と同時期に埋まる
9 層　暗赤褐色土　湯ったロームと暗褐色土混合　火熱を被り淡く赤色化

F288

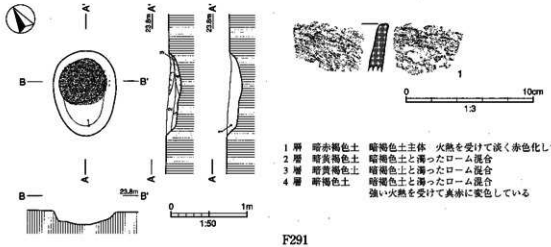
図99　F286・F287・F288



F289



F290



F291

図100　F289・F290・F291

F289

検出地区　L6-10gにて検出した。

遺　構　長軸1.64m×短軸1.48m×深さ0.20m、方位はN-1°-Wを測る。平面形はオムスビ状であった。火床は覆土４層に伴い、火床の西半は赤化が強いが、東半は淡く赤変する程度である。

遺　構　条痕文の小片が20点余出土している。

所　見　単独の炉穴である。火床範囲の中で赤化が異なることは、使用の範囲に若干の意識的な差異があったかもしれない。

F290

検出地区　L6-10gにて検出した。

遺　構　隣接した２基の炉穴である。

f290aは、長軸1.32m×短軸0.80m×深さ0.16m、方位はN-53°-Wを測る。平面形は不整楕円形である。覆土５層下の西壁際に、赤化の弱い火床を検出した。

F290bは、長軸0.56m×短軸0.48m×深さ0.08m、方位はN-13°-Wを測る。平面形は不整台形状となっている。坑底の火床範囲は滲むように赤変する程度であるが、壁立上がりにかけての範囲の赤化は強いものであった。また、焼土がピットの外へ広がる炉穴である。

遺　物　条痕文の小片が10点余出土している。

所　見　本来は別個の炉穴と捉えるべきだが、隣接した遺構のためａ・ｂとした。F209bは火床が遺構外に広がることから、炉穴の基底のみの遺存と判断した。

F291

検出地区　M6-1gにて検出した。

遺　構　長軸1.12m×短軸0.82m×深さ0.18m、方位はN-33°-Eを測る。平面形は楕円形である。火床の東半は赤化が強く、西半の赤化はやや弱いものであった。また、暗褐色土の自然堆積後、覆土１層において火の使用が認められた。

遺　物　条痕文の小片が19点出土している。１は条痕文というより、粗い擦痕状となっている。

所　見　F290bと同様に火床範囲内において、赤化の度合いの異なる炉穴である。また、炉穴として廃絶後の凹みにおいて、再度、炉穴として使用された遺構であると捉えられた。

F292

検出地区　M6-11gにて検出した。

遺　構　長軸（0.42）m×短軸0.76m×深さ0.20m、方位はN-14°-Eを測る。平面形は、遺構が重複すめため形状は不明瞭であるが、楕円形と捉えた。坑底に火熱痕が認められた

遺　物　条痕文が若干出土している。１は補修孔を有する口縁片で、外面はやや斜めとなる縦位の条痕文を施す。２はむ内外面とも横位の条痕文である。１・２とも口唇は丸みを帯びている。

所　見　D272との新旧関係はF292→D272と捉えられた。覆土などからこの重複はあまり時間差のないものと判断された。

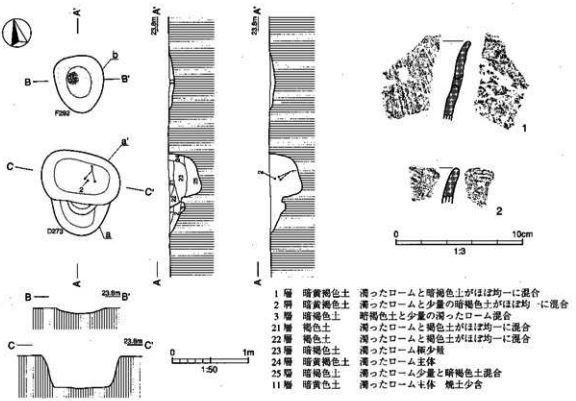


図101　F292・D273ab

F289

検出地区　L6-10gにて検出した。

遺　構　長軸1.64m×短軸1.48m×深さ0.20m、方位はN-1°-Wを測る。平面形はオムスビ形である。火床は覆土4層に伴い、西半は赤化が強いが、東半は淡く赤変する程度であった。

遺　物　条痕文の小片が20点余出土している。

所　見　単独の炉穴である。火床の赤化範囲が異なることは、使用の場所に若干の意識的な差があったのであろうか。

F290

検出地区　L6-10gにて検出した。

遺　構　隣接した2基の炉穴である。

F290aは、長軸1.32m×短軸0.80m×深さ0.16m、方位はN-53°-Wを測る。平面形は不整楕円形である。覆土5層下の西壁際に、赤化の弱い火床を検出した。

F290bは、長軸0.56m×短軸0.48m×深さ0.08m、方位はN-13°-Wを測る。平面形は不整台形状である。坑底の火床範囲は滲むように赤変する程度であるが、壁立上がりは赤化が強かった。また、焼土がピット外へ広がっている炉穴であった。

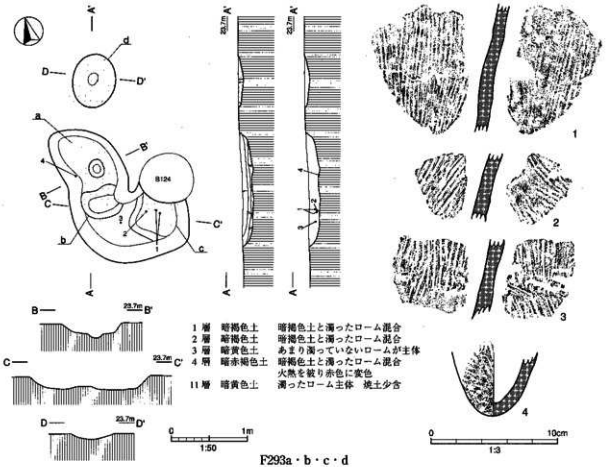
遺　物　条痕文の小片が10点余出土している。

所　見　本来は別個の炉穴として捉えるべきだが、隣接した遺構のためa・bとした。F290bは焼土が遺構外に広がることから、炉穴の基底のみの遺存と判断した。

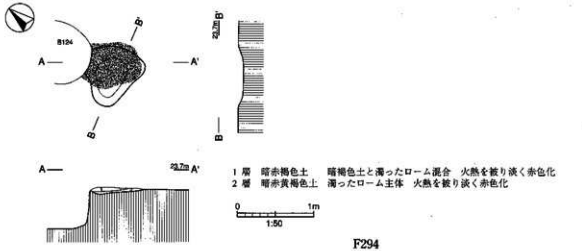
F291

検出地区　M6-1g検出した。

遺　構　長軸1.12m×短軸0.82m×深さ0.18m、方位はN-33°-Eを測る。平面形は楕円形である。火床の東半は赤化が強く、西半は赤化がやや弱かった。また、暗褐色土の自然堆積後、覆土1層において火の使用が認められた。



F293a・b・c・d



F294

図102　F293a・b・c・d・F294

F295

検出地区　　M6-11gにて検出した。

遺　　構　　2基の炉穴が直線的に重複した遺構であり、平面形は落花生状となっている。各ピットの坑底中央が凹む炉穴である。長軸1.52m×短軸はa；0.64m、b；0.72m×深さ0.08m、方位はN-37°-Wを測る。それぞれは楕円形である。火床aは赤化が強く、火床bは淡く赤変する程度であった。また2層中に焼土が認められ、炉穴廃絶後に新たに再使用されていた。

遺　　物　　条痕文の小片が出土しているが、稀であった。

所　　見　　覆土から新旧関係を火床 a →覆土２層→火床 b と捉えられた。

F296

検出地区　　M6-11gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.61m×短軸0.55m×深さ0.08m、方位はN-21°-Eを測る。平面形は略円形であり、規模は小さく、凹み状の炉穴である。坑底に滲むように赤変した火床を検出したが、他の炉穴に比し火床と言えるほどの遺存ではなかった。

遺　　物　　出土した遺物は無かった。

所　　見　　遺構規模や火床の範囲などから竪穴住居跡の炉跡とも考えらたが、周辺の遺構状況から炉穴と判断した。現状は小規模な炉穴であるが、基底の遺存と捉えた。

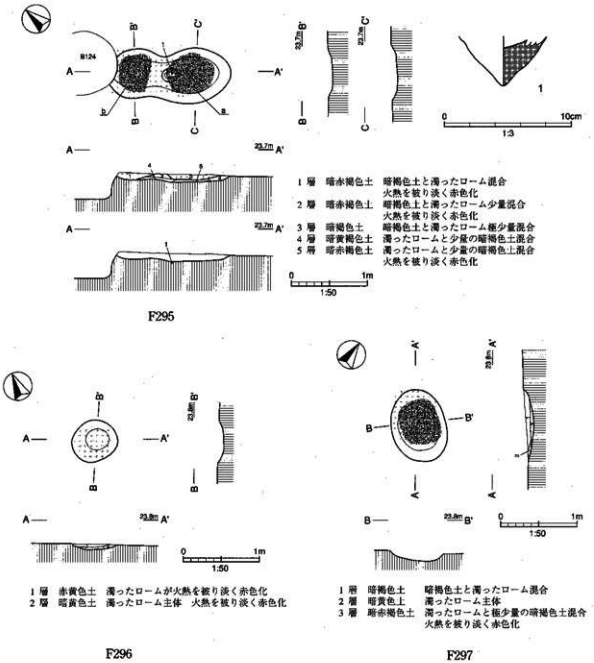


図103　F295・F296・F297

F297

検出地区　M6-11gにて検出した。

遺　構　長軸0.97m×短軸0.71m×深さ0.09m、方位はN-54°-Wを測る。平面形は楕円形である。坑底に赤化した火床が検出されたが、覆土上層に焼土があり、２度にわたって使用された炉穴と捉えられた。焼土はピット外へはみ出していた。

遺　物　条痕文の小片が１片のみ出土している。

所　見　焼土の遺構外への分布から、炉穴の基底のみ遺存した遺構と判断した。

F298

検出地区　L6-20・30gにて検出した。

遺　構　長軸1.08m×短軸0.56m×深さ0.08m、方位はN-34°-Wを測る。平面形は長楕円形である。火床は図示できなかったが、北東壁寄りの坑底から壁立上がりにかけて検出した。覆土上層の焼土はピット全体に認め、一部は遺構外にはみ出していた。

遺　物　出土した遺物は無かった。

所　見　炉穴の基底のみの遺存と判断した。

F299

検出地区　M6-31gにて検出した。

遺　構　長軸0.40m×短軸0.36m×深さ0.04m、方位はN-10°-Wを測る。平面形は円形である。小規模な凹み状の炉穴であった。火床は略ピット全体にわたり、一部はピット外へはみ出すが、淡く赤変する程度であった。

遺　物　出土した遺物は無かった。

所　見　あまりに小規模な遺構であるが、基底のみの遺構祖先と判断し、また、周辺の遺構状況から炉穴と捉えたものである。

F300

検出地区　M6-31gにて検出した。

遺　構　長軸1.72m×短軸0.80m×深さ0.24m、方位はN-24°-Wを測る。平面形はL字状である。赤化の強い火床が１カ所検出されたが、火床中に浅い凹みを認めた。

遺　物　条痕文片が出土しているが、稀であった。また、クルミの炭化物が出土した。

所　見　２基の炉穴の重複か判断に迷う遺構であった。

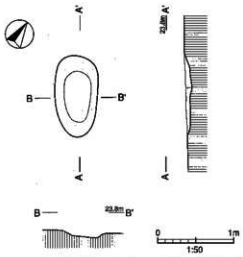
F301

検出地区　M6-21gにて検出した。

遺　構　長軸0.60m×短軸0.52m×深さ0.04m、方位はN-41°-Eを測る。平面形は隅丸方形である。火床は火熱を被って赤変した程度であった。ピットの東側を主体としていた。

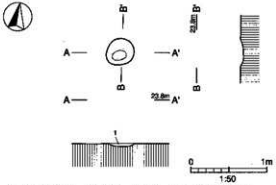
遺　物　条痕文の小片が出土するが、稀であった。

所　見　炉穴としては形状に疑問が残るものであるが、出土遺物から判断した。火床も焼土範囲と言う程度であり、火床と捉えてよいか疑問が残る遺構であった。



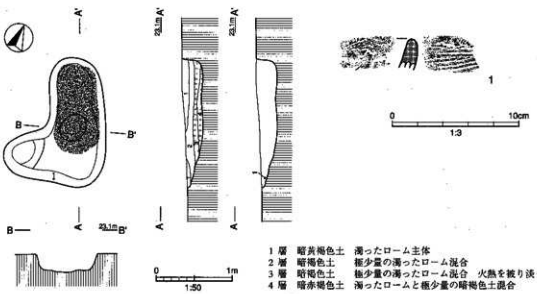
1 層　暗黄色土　湧ったローム主体　火熱を少し被る

F298



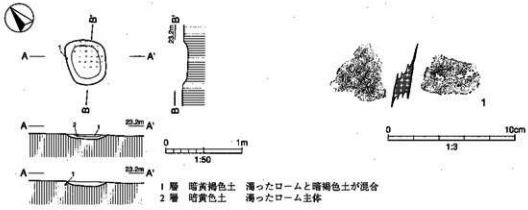
1 層　暗黄色土　湧ったローム主体　弱い火熱を少し被る

F299



1 層　暗黄褐色土　湧ったローム主体
2 層　暗褐色土　極少量の湧ったローム混合
3 層　暗褐色土　極少量の湧ったローム混合　火熱を被り淡く赤色化
4 層　暗赤褐色土　湧ったロームと極少量の暗褐色土混合

F300



1 層　暗黄褐色土　湧ったロームと暗褐色土が混合
2 層　暗黄色土　湧ったローム主体

F301

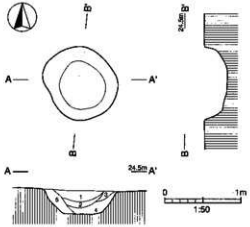
図104　F298・F299・F300・F301

第2項　土　坑

上谷遺跡Ⅳ地区では、縄文時代の土坑は62基の検出をみた。その主体は早期・条痕文期の所産であるが、中期・五領ヶ台期の遺構も検出した。早期の土坑は、火床などが検出されず、また遺構の状況から炉穴とは捉えきれなかった遺構も含まれている。

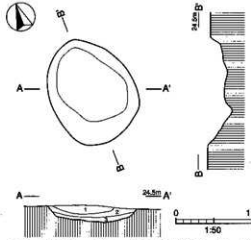
本地区は奈良・平安時代の掘立柱建物跡が集中して残されており、また弥生時代及び奈良・平安時代の竪穴住居跡も検出しているため、縄文時代の遺構の遺存状況は極めて悪い状態となっている。他の時代の遺構から条痕文を主体として、撚糸文も出土していることから、古い時代に損壊を被った可能性が大きく、検出した遺構以外にも数多く存在していたことが想定されるものである。

このような状況からその遺構の検出状況において、分布傾向を捉えることはできなかった。



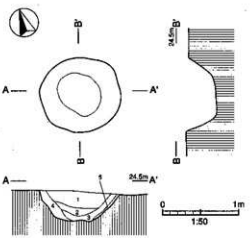
1 層　黒褐色土　汚れたロームを含
2 層　暗褐色土　径2mm大のロームブロック
　　径1mm大の焼土粒若干含
3 層　暗褐色土　汚れたロームを含
4 層　暗黄褐色土　汚れたロームを含
5 層　暗黄褐色土　汚れたロームを含

D185



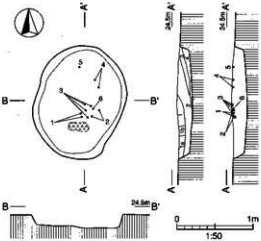
1 層　暗褐色土　径1mm以下の焼土粒子含　ローム粒子微含
2 層　暗褐色土　径1mm人の焼土粒子含　汚れたローム含
3 層　暗黄褐色土　径1mm大の焼土粒子含　汚れたロームが斑状に混入

D187



1 層　暗黒褐色土　径1mm大のローム多含　炭化物粒子微含
2 層　暗黄褐色土　径1mm大の焼土含　汚れたローム多含
3 層　暗黄褐色土　汚れたローム主体で黒色土微含
4 層　黄褐色土　径1mm大のロームブロック多含
5 層　黄褐色土　汚れたローム主体に斑状黒色土混入

D186



1a 層　暗褐色土　径1mm大の焼土粒子及び炭化物微含
1b 層　混貝土　暗褐色土主体の上にアサリやサルボウ主体の貝
2 層　暗褐色土　径0.5mm大の焼土粒子及び炭化物まんべんなく含
3 層　暗褐色土　径1mm大の焼土粒子含　汚れたローム斑状混入
4 層　暗黄褐色土　汚れたローム主体　微細な焼土粒子若　暗褐色土が混人

D188

図105　D185・D186・D187・D188

D185

検出地区　L6-24gにて検出した。

遺　構　長軸1.00m×短軸0.88m×深さ0.32～0.34m、方位はN-43°-Wを測る。平面形は略円形である。立上がりはやや急な壁で、坑底は平坦である。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　条痕文片が出土しているが、稀であった。

所　見　出土遺物から早期・条痕文期の土坑と捉えた。覆土５層は地山の可能性があったが、D186などとともに近似する覆土の堆積であり、土坑廃絶後の壁崩壊土の堆積と考えられる。

D186

検出地区　L6-24gにて検出した。

遺　構　長軸1.08m×短軸1.00m×深さ0.38m、方位はN-22°-Wを測る。平面形は不整な略円形である。壁はやや湾曲して立上がり、坑底の凹凸は激しい遺構である。覆土は、暗黄褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　出土した遺物はなかった。

所　見　時期を決定する遺物は無いが、覆土や周辺の遺構状況から早期・条痕文期の所産と捉えた。

D187

検出地区　L6-13gにて検出した。

遺　構　長軸1.44m×短軸1.12m×深さ0.32m、方位はN-1°-Wを測る。平面形は不整な卵形である。壁は緩やかに立上がり、坑底は凹凸が著しい土坑であった。覆土は焼土を含む暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　出土した遺物は無かった。

所　見　時期を決定する出土遺物は無かったが、覆土や周辺の遺構状況から早期・条痕文期の所産と捉えた。用途は不明である。覆土中に焼土が混入することから、炉穴の可能性もある。

D188

検出地区　L6-13gにて検出した。

遺　構　長軸1.48m×短軸1.20m×深さ0.34m、方位はN-3°-Eを測る。平面形は楕円形である。壁は垂直に近い状態で立上がり、坑底は平坦である。覆土は、暗褐色土を主体として自然堆積した後、覆土上層においてオキシジミ・アサリを主体とした貝の小ブロックを検出した。混貝土層であった。

遺　物　条痕文を主体として40点余が出土した。

所　見　用途不明の土坑であるが、土坑自体は早期・条痕文期の所産と捉えた。覆土１層の混貝土出土の貝種は鹹水性の貝種であった。

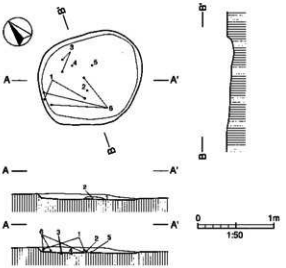
D189

検出地区　L6-15gにて検出した。

遺　構　長軸1.44m×短軸1.24m×深さ0.04～0.08m、方位はN-6°-Wを測る。平面形は不整な隅丸方形である。ソフトロームを浅く掘込んだ、断面形が盤状の土坑である。坑底は平坦であった。覆土は、坑底状にロームと焼土が混合した暗赤褐色土がブロックとして堆積していた。

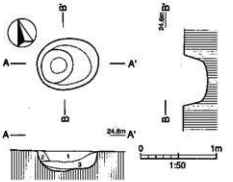
遺　物　条痕文片が10点余出土している。

所　見　極めて浅い皿状の土坑である。出土した遺物より、早期条痕文期の所産と捉えた。焼土がブロックとして堆積していることから炉穴とも考えたが、、焼土下に火熱痕が認められないため、土坑として扱うこととした。



1 層　黒褐色土　　径0.5mm以下の焼土粒子含
2 層　暗赤褐色土　ロームと焼土主体

D189



1 層　暗褐色土　　焼土粒・ローム少含
2 層　暗黄褐色土　暗褐色土とローム微含　焼土微含
3 層　暗褐色土　　ローム粒多含

D190

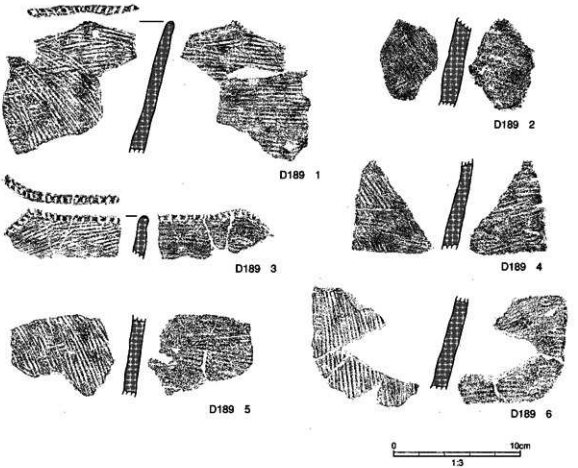


図106　D189・D190

D190

検出地区　L5-91gにて検出した。

遺　構　長軸0.80m×短軸0.72m×深さ0.28m、方位はN-83°-Wを測る。平面形は楕円形である。坑底の西壁際に、浅い凹みが検出されている。

覆土は暗褐色土・暗黄褐色土の自然堆積であった。覆土１・２層中には焼土が僅かに含まれていた。

遺　物　出土した遺物は無かった。

所　見　出土した遺物は無かったが、覆土の状況などから早期・条痕文期の所産と捉えた。土坑と捉えたが、覆土中に僅かながらも焼土が混入することから、火床の失われた炉穴の可能性も指摘しておきたい。

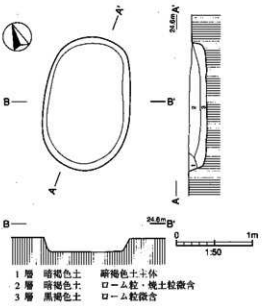


図107　D191

D191

検出地区　L5-92にて検出した。

遺　構　長軸1.76m×短軸1.16m×深さ0.24m、方位はN-32°-Eを測る。平面形は隅丸長方形である。壁は垂直に近い立上がりであり、坑底は比較的平坦であった。

覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であるが、覆土３層において掘込みが認められ、黒褐色土が堆積する。

遺　物　条痕文片を主体として若干出土している。

所　見　２層において焼土の混入が認められたが、土坑と捉えた。

D192

検出地区　L5-92gにて検出した。

遺　構　長軸1.58m×短軸1.26m×深さ0.28m、方位はN-35°-Wを測る。平面形はやや歪んだ円形乃至卵形である。坑底は平坦であった。坑底から壁へはやや丸みをもって立上がっており、壁は略垂直に近かった。一見、盤状の土坑である。なお、坑底の南西にピットが掘込まれていた。

覆土は、色調及び包含物によって４層に分層した。１～３層中には焼土を僅かながら包含しており、覆土全体にロームの包含も多かった。

遺　物　出土した遺物は17点と少なかった。条痕文片が主体であったが、五領ヶ台式が出土している。また、五領ヶ台式土器は２点の完形土器であった。黒曜石剥片も出土している。１は坑底から少し高く、北壁際に直立して出土した。文様は殆ど無く、櫛描の沈線によって雑描されたような装飾である。２は覆土中層から横位の状態で出土している。いずれも完形であり、内面にススが付着していた。３～６は外面は比較的丁寧な貝殻条痕文を施文する早期・条痕文期の土器片であり、流込みであろうと判断された。

所　見　中期の遺物は少なく、早期の条痕文片が多かったが、覆土堆積時の流込みと捉えられたため、完形土器の出土状態などから中期初頭・五領ヶ台期の土坑と捉えた。また、上谷遺跡Ⅱ地区及びⅢ地区の西域地区において中期初頭の五領ヶ台期の竪穴住居跡と土坑を検出しており、本土坑も出土遺

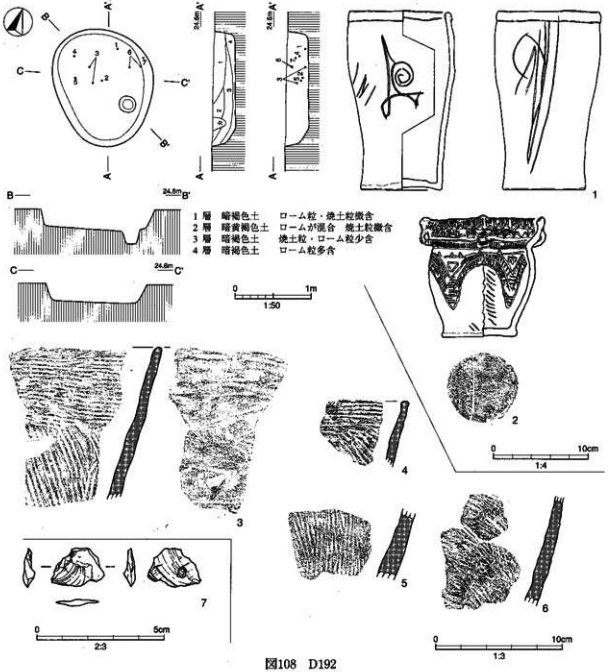


図108　D192

物から当該時期の所産と捉えた。

Ⅱ地区及びⅢ地区での当該時期の遺構検出は、各地区西側に偏在し遺構としてのまとまりを見せているが、本遺構はその地区からやや離れて所在していることとなる。八王子市神谷原遺跡の例などから、本遺構を墓壙と捉えたが、このことと竪穴住居跡から離れていることと関係があるかもしれない。

表8　D192遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 小型深鉢	108×88×192 外面　2面櫛描による幾何学的文様が描かれる 内面　ナデ後磨きが施される	暗橙褐 ～暗褐 普	砂粒多	完形	内外面スス付着
2	縄文 小型深鉢	125×77×129 口縁－4単位の把手　刻みを巡らし三角状の連続刺突を加える 胴－竹管状工具による半円モチーフ描かれ刻み三角刺突を加える 地文は縄文及び結節縄文を施す　底部－本葉痕	暗褐～ 暗橙褐 良	砂粒 雲母	完形	内面スス付着
3	縄文 深鉢	外面　口縁～頸部　横位斜位の条痕文 内面　口縁～頸部　横位の条痕文？	暗褐 暗橙褐	繊維	口縁片	
4	縄文 深鉢	口唇一部平坦面を作出　口縁に沿って煤沈潜？ 外面　口縁～頸部　横位斜位の条痕文	暗赤褐 普	繊維	口縁片	
5	縄文 深鉢	外面　胴部下半－縦位の条痕文	暗橙褐 褐 普	繊維	胴部片	
6	縄文 深鉢	外面　胴部下半－斜位の条痕文	橙褐 暗褐 普	繊維	胴部片	
7	石器	長軸15×短軸21×厚さ4.5　重量0.8g 小形の不定形剥片 二次加工痕はみられない			完形	

D193

検出地区　L6-13にて検出した。

遺　構　長軸0.92m×短軸0.88m×深さ0.34m、方位はN-88°-Wを測る。平面形は略円形である。坑底は平坦であり、壁の立上がりはやや急である。　覆土は暗黄褐色土と暗褐色土を主体とした、自然堆積である。

遺　物　条痕文片が若干出土しているが、いずれも覆土上層からの出土であった。1は口縁片で、口唇は尖頭状となり、内剥ぎ状となっている。口縁外面は横位、以下は斜位を、内面は横位とそれぞれ条痕文を施す。2・3胴部片であり、やや縦に近い斜位の条痕文を施す。

所　見　F160との新旧関係は覆土堆積がやや不明瞭であり判然としないが、本土坑が新しい時期の所産であるが、時間差はそうないものと捉えている。遺物や覆土から早期・条痕文期の土坑と捉えられるが、用途は不明である。

D195

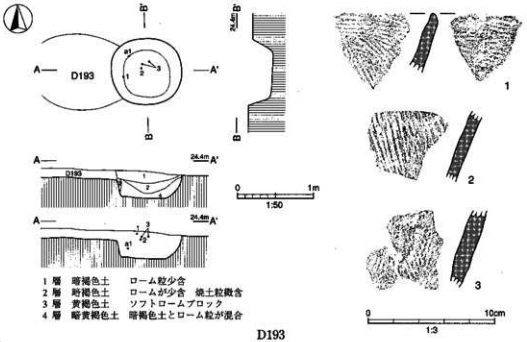
検出地区　L6-14gにて検出した。

遺　構　長軸0.96m×短軸0.84m×深さ0.28m、方位はN-89°-Wを測る。平面形は略円形である。坑底は平坦であり、壁は坑底からやや斜めに立上がっている。

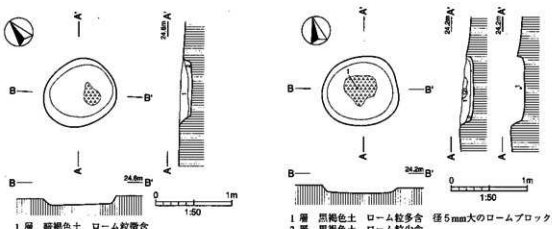
覆土はロームを僅かに含んだ暗褐色土を主体とした自然堆積であるが、本遺構の埋没過程においてハイガイ・カキの廃棄が行われており、混貝土層の小ブロックを検出した。

遺　物　土器片などの遺物の出土はなく、投棄された貝のみであった。

所　見　時期を決定する遺物の出土はなかったが、覆土の状況やハイガイなどの鹹水種の貝の投棄が遺構廃絶後に行われていることから、早期・条痕文期の土坑と捉えた。貝の廃棄も貝の構成種から時間差のないものと捉えている。



D193



D195　　D196

図109　D193・D195・D196

D196

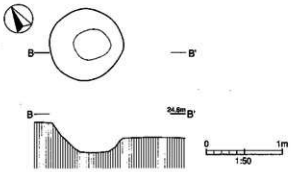
検出地区　L6-1gにて検出した。

遺　構　長軸1.00m×短軸0.90m×深さ0.16m、方位はN-74°-Eを測る。平面形は略円形である。斜面部に位置し、壁高は異なる。坑底は比較的平坦であり、坑底からの壁の立上がりはやや急である。

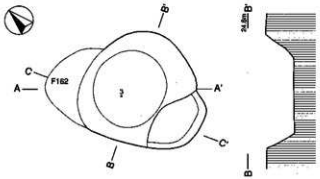
覆土はロームを多く含んだ黒褐色土の自然堆積であったが、覆土上層に貝の小ブロックが検出された。貝の構成種はハイガイを多く含むものであったが、量的には多くはなかった。

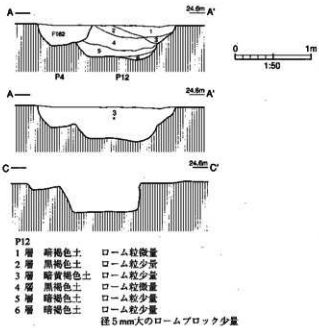
遺　物　条痕文片が1点のみ出土している。

所　見　時期を特定できる遺物は殆どないが、貝の出土から早期・条痕文期の土坑と捉えた。D195とともに貝が少量廃棄された土坑である。いずれもそれぞれの遺構に直接伴わず、貝の廃棄と時間差があるものである。



D199b





D199a

図110　D199a・D199b

D199a

検出地区　　L6-15gにて検出した。

遺　　構　　長軸(1.65)m×短軸1.57m×深さ0.36m、方位はN-12°-Wを測る。平面形は略円形である。南側に一段高いテラスを有する土坑である。坑底は緩やかな凹凸があり、壁はやや緩く斜めに立上がっている。

覆土は、暗褐色土・黒褐色土など色調としては複雑であるが、北側から流込んだ自然堆積であった。

遺　　物　　早期・条痕文片が出土している。

所　　見　　出土遺物などから本土坑を早期・条痕文期の所産と捉えた。

調査では明らかにできなかったが、覆土の堆積状況から南側のテラス部はD199aとは異なり、後に新たに掘込んだ土坑の可能性があることを指摘しておきたい。

D199b

検出地区　　L6-15gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.96m×短軸0.94m×深さ0.39m、方位はN-63°-Wを測る。平面形は略円形である。坑底は平坦であり、坑底から壁の立上がりは斜めとなっている。

覆土は、図示はできなかったが、調査時に暗褐色土の自然堆積と捉えた。

遺　　物　　出土していない。

所　　見　　覆土や周辺の遺構状況から早期・条痕文期の所産と捉えた。

D209

検出地区　　L6-5gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.24m×短軸1.09m×深さ0.18m、方位はN-84°-Eを測る。平面形は楕円形である。坑底は凹凸があり、中央が更に凹んでいる。壁の立上がりは垂直に近い土坑である。掘込みは若干あった

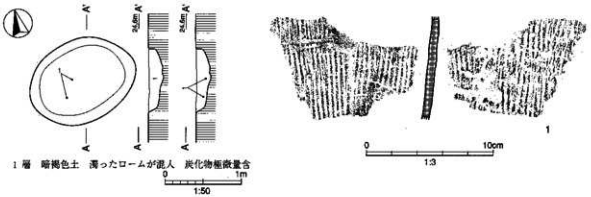


図111　D209

が、覆土は暗褐色土の１層のみしか捉えられなかった。炭化粒が僅かに混入している覆土であり、自然堆積と捉えた。

遺　物　条痕文片が稀に出土している。１は内外面とも縦位の丁寧な条痕文を施したものである。

所　見　用途不明の土坑であるが、遺物などから早期・条痕文期の所産と捉えた。

D210

検出地区　L6-5gにて検出した。

遺　構　長軸1.46m×短軸1.28m×深さ0.17m、方位はN-22°-Wを測る。平面形は楕円形である。遺構検出面において、多量の焼土と炭化粒の散布により確認した遺構である。坑底は平坦であり、壁は坑底よりやや急に立上がっている。覆土２層は自然堆積というより、人為的に充填した感じを受けるものであった。遺構検出面にて確認された焼土・炭化粒は１層では僅かに混入するのみであった。

遺　物　条痕文の小片が出土しているが、極めて稀であった。

所　見　遺構検出面において確認した多量の焼土・炭化粒も、土坑内において殆ど検出することができず、また、火床などの比の使用を確認することはできなかった。遺構検出面の下げ過ぎであったかもしれない。本土坑の基底が検出されたためと考えられるが、失われた遺構上部において火の使用乃至焼却残滓の廃棄が行われたような土坑である。出土遺物から早期・条痕文期の土坑と捉えた。

D211

検出地区　L5-6gにて検出した。

遺　構　長軸1.14m×短軸0.80m×深さ0.28m、方位はN-40°-Wを測る。平面形は略円形である。坑底は壁際から中央にむけて僅かに凹んでいる。壁は斜めに立上がっていた。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　出土した遺物は無かった。

所　見　時期決定の遺物が出土していないので判然としないが、覆土などより早期・条痕文期の所産と捉えた。

D212a・b

検出地区　L6-14gにて検出した。B057・F167と重複している。

遺　構　aは、長軸(1.51)m×短軸1.18m×深さ0.14m、方位の計測はできなかった。平面形は隅丸長方形と捉えられた。緩やかに湾曲している。壁の立上がりは垂直に近かった。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

bは、長軸1.16m×短軸1.15m×深さ0.44m、方位は計測できなかった。平面形は略円形である。坑底は平坦であり、壁の立上がりは垂直に近かった。覆土は暗褐色土と黒褐色土の自然堆積である。

遺　　物　それぞれ条痕文片が若干出土しているが、覆土中層以上がその主体を占めている。

所　　見　新旧関係はD212a→D212bと覆土より捉えられ、いずれも早期・条痕文期の所産である。

D213

検出地区　L5-14gにて検出した。

遺　　構　長軸1.52m×短軸1.10m×深さ0.35m、方位はN-88°-Wを測る。平面形は略円形である。坑底は平坦であり、壁の立上がりは垂直に近いものである。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　　物　遺物の出土は無かった。

所　　見　覆土から早期。条痕文期の所産と捉えた。

D214

検出地区　L5-24gにて検出した。

遺　　構　長軸1.00m×短軸0.91m×深さ0.21m、方位はN-16°-Wを測る。平面形は楕円形である。坑底は南北軸は北から南に次第に下るものであり、北壁の把握は難しい遺構である。東西は平坦であった。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　　物　出土遺物は無かった。

所　　見　時期を確定する遺物の出土は無かったが、覆土や周辺の遺構状況から早期・条痕文期の土坑と捉えた。

D215

検出地区　L6-16gにて検出した。

遺　　構　長軸m1.58×短軸1.04m×深さ0.23m、方位はN-0°-Eを測る。平面形は隅円長方形である。坑底やや凹凸があり、壁の立上がりは垂直に近い。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　　物　条痕文片が若干出土している。

所　　見　覆土４層は充填したような状態であった。早期・条痕文期の所産と捉えた。

D216

検出地区　L6-75gにて検出した。

遺　　構　長軸1.24m×短軸0.96m×深さ0.20m、方位はN-7°-Wを測る。平面形は楕円形である。凹凸ある坑底で、壁は斜めに立上がる。覆土は色調的には様々であるが、焼土を含んでいる。

遺　　物　条痕文片が稀に出土している。１は内外面とランダムに、２は縦位を主として、３は外面斜位に、内面横位を主として条痕文を施している。

所　　見　覆土から２項の重複であるが、B061によって損壊を被り判然としない。火床が検出されず土坑としたが、炉穴の可能性も否定できなかった。早期・条痕文期の所産と捉えた。

D217

検出地区　L6-25・35gにて検出した。

遺　　構　長軸1.89m×短軸1.59m×深さ0.24m、方位はN-31°-Wを測る。平面形は楕円形である。坑底は平坦である。覆土は暗褐色土を主体としている。

遺　　物　条痕文片が出土しているが、稀であった。

所　　見　F174との新旧関係は、本土坑が新しい遺構である。

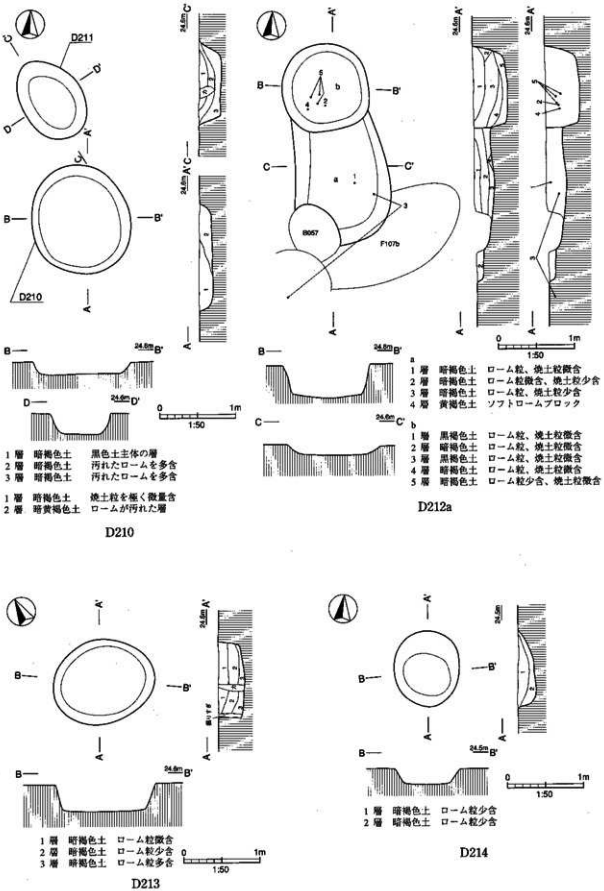


図112　D210・D211・D212a・D213・D214

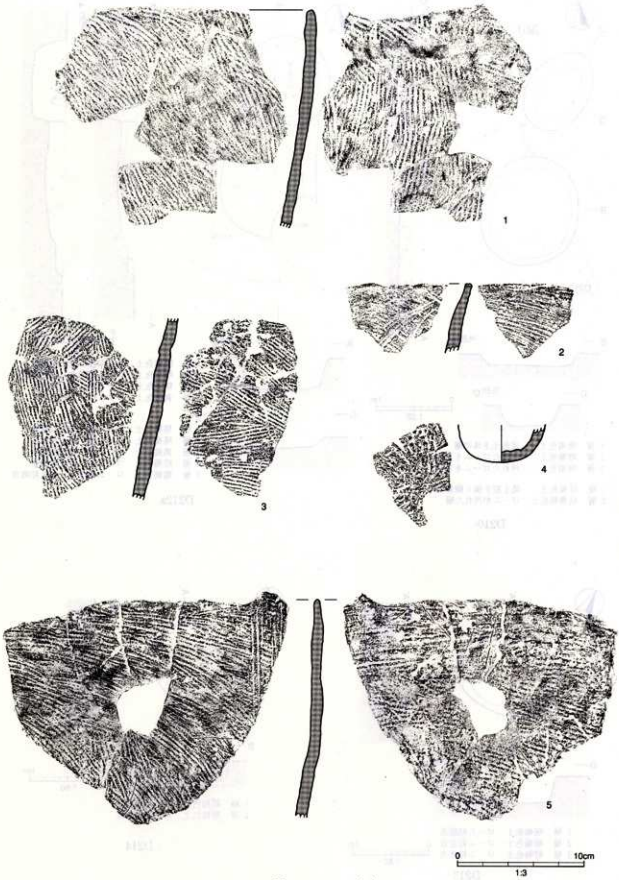
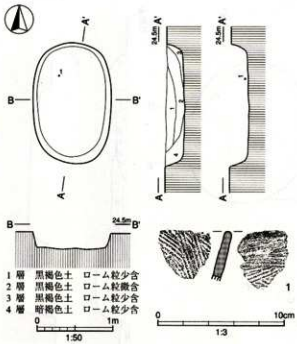
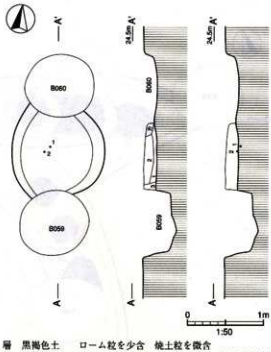


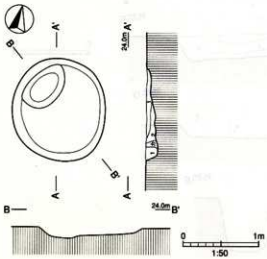
図113 D212a（2）



D215

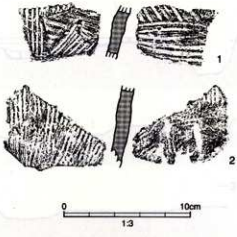


1 層　黒褐色土　ローム粒を少含　焼土粒を微含
2 層　暗黄褐色土　暗褐色土とソフトロームが混合　焼土粒を微含
3 層　暗褐色土　ローム粒,焼土粒を微含



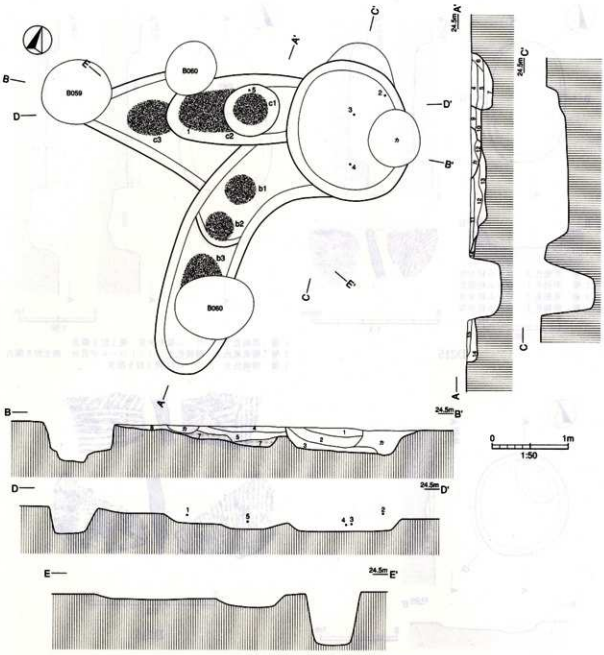
1 層　暗褐色土　ローム粒　焼土粒を微含
2 層　暗褐色土　暗褐色土とロームが混合

D218



D216

図114　D215・D216・D218



1 層　暗褐色土　　ローム粒少含　焼土粒微含
2 層　暗褐色土　　ローム粒　焼土粒微含
3 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混合　焼土粒微含
4 層　暗褐色土　　ローム粒　焼土粒微含
5 層　暗褐色土　　ローム粒　焼土粒少含
6 層　暗褐色土　　ローム粒を多含
7 層　暗赤褐色土　暗褐色土と焼土が混合
8 層　暗黄褐色土　暗褐色土と焼土が混合　焼土粒微含
9 層　暗黄褐色土　暗褐色土と焼土が混合
10 層　暗黄褐色土　暗褐色土と焼土が混合　焼土粒微含
11 層　黒褐色土　　ローム粒を微含
12 層　黒褐色土　　ローム粒　焼土粒微含
13 層　黒褐色土　　ローム粒少含　焼土粒多含
14 層　暗褐色土　　ローム粒を微含
15 層　暗褐色土　　ローム粒　焼土粒少含

図115　D217

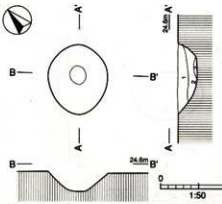


図116　D220

D218

検出地区　L6-48gにて検出した。

遺　構　長軸1.36m×短軸0.84m×深さ0.12m、方位はN-11°-Wを測る。平面形は楕円形である。坑底の北西壁際に浅いピットが掘込まれているが、坑底は北壁から南壁にかけて凹凸をもって下っていく。覆土は、暗褐色土の自然堆積であるが、南壁際は後世に掘込まれている。

遺　物　出土した遺物は無かった。

所　見　坑底が著しく凹凸の激しい土坑である。覆土などから早期・条痕文期と捉えた。

D219

検出地区　L5-82gにて検出した。

遺　構　長軸0.88m×短軸0.76m×深さ0.24m、方位はN-42°-Eを測る。平面形は略円形である。やや小さな坑底から壁は丸みを帯びて立上がっている。覆土は黒色土と暗褐色土の自然堆積であるが、坑底には3層が廃棄されたように堆積していた。

遺　物　条痕文片が若干出土している。

所　見　遺物より早期・条痕文期の土坑と捉えた。

D225

検出地区　L5-84gにて検出した。

遺　構　重複が大きく遺構規模は計測しなかった。坑底は2基とも凹凸が激しい遺構である。a坑は暗褐色土を、b坑は暗褐色土と黒褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　条痕文片が若干出土している。1は内外面とも斜位に条痕文を施文摺るが、外面は縦に近いものである。

所　見　2基の土坑であるが、覆土より新旧関係はb→aと明確に捉えられた。

D232

検出地区　L5-63gにて検出した。

遺　構　長軸0.93m×短軸0.64m×深さ0.45m、方位はN-35°-Eを測る。平面形は楕円形である。坑底は北壁から南壁に向かって次第に下る土坑であり、壁は内湾して立上がっている。覆土はロームを包含したもので自然堆積であったが、2層は充填したような堆積である。

遺　物　条痕文片が出土しているが、稀であった。

所　見　炉穴とも捉えられる遺構であったが、火床が検出されないことなどから土坑と判断した。

D233

検出地区　L4-54-2g・55-1gにて検出した。

遺　構　2基の土坑の重複である。aは、長軸(1.60)m×短軸1.48m×深さ0.16m、方位はN-43°-Eを測る。平面形は不整楕円形である。坑底は若干凹凸があり、坑底に小ピットが掘込まれていた。埋没過程においてカキ・ハイガイの廃棄が行われていた。

bは、長軸0.72m×短軸0.68m×深さ0.28m、方位はN-18°-Eを測る。平面形は楕円形であった。凹凸のある坑底である。

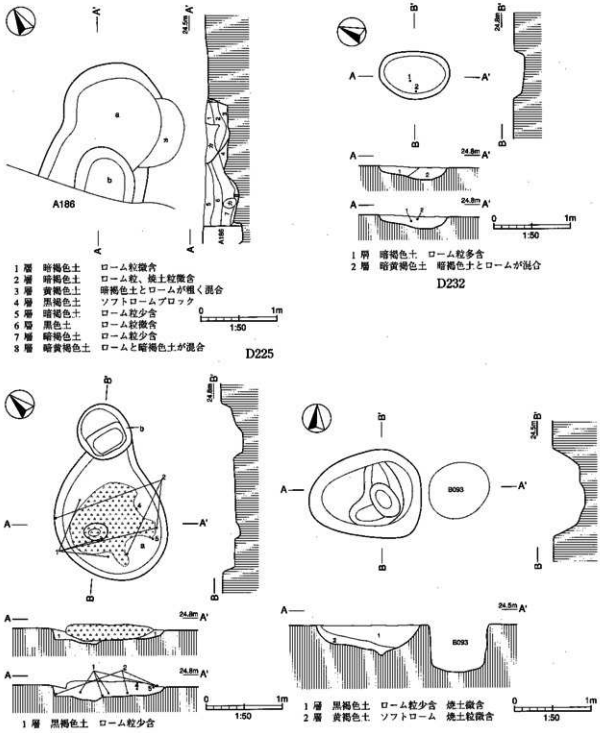


図117　D225・D232・D233・D235

遺　物　a坑を主体に10点余の条痕文片が出土している。a坑の遺物は、貝の廃絶とほぼ重なるような出土状態であった。

所　見　2基の新旧関係は捉えられなかった。a坑は、土坑廃絶後、時間をおかずに貝の廃棄を行っていた。

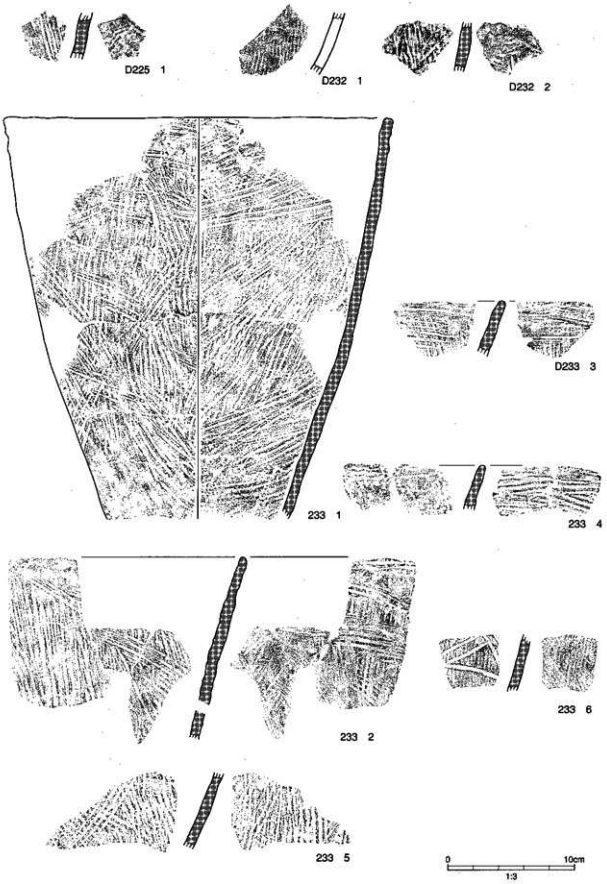


図118　D225・D232・D233・D235（2）

表9　D233遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(300)×－×(319) 外面　不定方向の条痕文 内面　不定方向の条痕文	暗褐 普	繊維	口縁～ 胴部片	
2	縄文 深鉢	口唇　斜めの刻み？ 口縁　外面－縦位、斜位条痕文　内面　不定方向の条痕文	暗茶褐 良	繊維 砂粒	口縁片	
3	縄文 深鉢	外面　縦位横位の条痕文 内面　縦位横位の条痕文	暗褐 良	繊維	口縁片	
4	縄文 深鉢	口縁　外面一部に横位縦位の条痕文 頸部　横位斜位の条痕文	外暗褐 内暗橙褐 普	繊維	口縁片	
5	縄文 深鉢	外面　縦位斜位の条痕文 内面　縦位斜位の条痕文	外暗赤褐 内暗褐色 良	繊維	胴部片	
6	縄文 深鉢	縦位の条痕文施文後沈線による幾何学状モチーフを描く 内面　縦位の条痕文　斜位の擦痕？	外橙褐色 内暗褐色 普	繊維	胴部片	

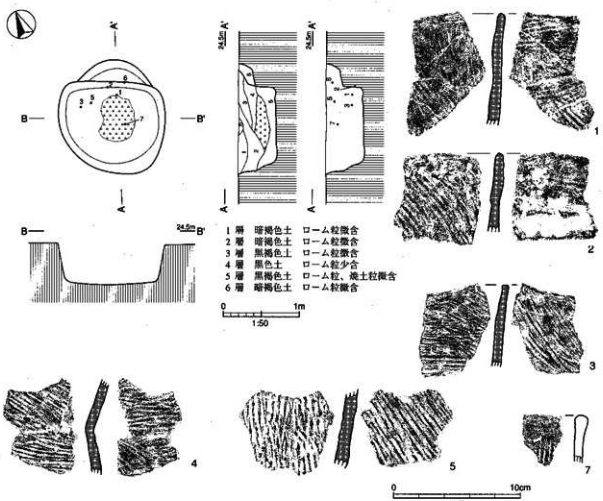


図119　D234

D234

検出地区　L5-64gにて検出した。

遺　構　2基の土坑の重複である。

a坑は、長軸1.49m×短軸1.21m×深さ0.56m、方位はN-32°-Wを測る。平面形は隅丸長方形状である。b坑を掘込んで遺構を形成している。坑底は若干凹凸があり、壁の立上がりは急で垂直に近いものとなっている。遺構廃絶後ハイガイを主として貝が多量に廃棄されている。また、その後の自然埋没後に再度掘返されている土坑である。

b坑は、遺構規模は不明であるが、掘込みの深さは0.22mであった。

遺　物　aを主体として条痕文片が30点余で土しており、また、撚糸文や礫なども少量出土している。

所　見　覆土から新旧関係はb坑→a坑であるが、b坑は大きく失われており規模・性格などは不明である。

D235

検出地区　L5-66gにて検出した。

遺　構　長軸1.48m×短軸1.12m×深さ0.32m、方位はN-83°-Eを測る。平面形は卵形である。凹凸ある坑底中央に南北に縦断するように凹みが検出された。掘込みから丸みをもって坑底中央に下るもので、坑底と壁の区別がつきにくい土坑である。覆土は黄褐色土と自然堆積であり、西側から埋没が認められる。

遺　物　条痕文片が若干出土いている。

所　見　用途不明の土坑である。覆土に焼土が僅かだが包含されるため、炉穴とも思える遺構であったが、火床の出土もなく土坑として扱った遺構である。早期・条痕文期の所産と捉えた。

D236

検出地区　L5-70・77gにて検出した。

遺　構　長軸1.56m×短軸1.12m×深さ0.24m、方位はN-7°-Eを測る。平面形は楕円形である。凹凸ある坑底であり、断面形は丸みを持つ遺構である。覆土は、ロームを含んだ黒褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　条痕文片が出土しているが、稀である。

所　見　炉穴とも捉えられる遺構であるが、火床も検出されないため土坑としたものである。早期・条痕文期の所産である。

D237

検出地区　L5-75・74gにて検出した。

遺　構　長軸3.42m×短軸0.94m×深さ0.12～0.32m、方位はN-88°-Wを測る。平面形は長楕円形である。坑底は緩やかな凹凸がある。

3基が重複した土坑である。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　出土はなかった。

所　見　一見、形状から炉穴とも考えられるが、火床が検出されなかったため、土坑として扱った。早期・条痕文期の所産と捉えた。

D238

検出地区　L5-74gにて検出した。

遺　構　長軸1.92m×短軸1.20m×深さ0.64m、方位はN-83°-Wを測る。平面形はダルマ状の不整楕円形である。坑底は凹凸があり、壁の立上がりは垂直に近いものであった。掘込みは深かった。覆土はロームの包含の多寡はあるものの、暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　微隆起区画をもつ条痕文片が出土している。1は外面は微隆起により三角に区画し、沈線を引いたものであり、内面は横位の条痕文を施している。

所　見　本地区の縄文時代の土坑としては、掘込みの深い遺構である。出土遺物及び覆土の色調・包含物などより、早期・条痕文期の土坑と捉えた。

D245(F222と同図)

検出地区　L6-47gにて検出した。

遺　構　長軸1.04m×短軸0.92m×深さ0.20m、方位はN-30°-Wを測る。平面形は楕円形である。坑底は若干凹凸のあるもので、壁はやや斜めに立上がっている。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　条痕文の小片が出土しているが、F222の影響もあるかもしれない。

所　見　F222との新旧関係は、本土坑がF222の埋没過程において掘返していることが、覆土より捉えられている。

D246

検出地区　L6-37gにて検出した。

遺　構　長軸1.24m×短軸0.92m×深さ0.20m、方位はN-5°-Eを測る。平面形は楕円形である。坑底は平坦であり、壁の立上がりは急である。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　条痕文の小片が数点出土しているのみであった。

所　見　本地区の縄文時代の土坑としては、やや掘込みが深い部類に入る遺構である。用途は不明であるが、遺物より早期・条痕文期の所産と捉えた。

D247

検出地区　L6-37gにて検出した。

遺　構　長軸0.68m×短軸0.48m×深さ0.16m、方位はN-53°-Eを測る。平面形は楕円形である。書規模な土坑であり、坑底は平坦であった。壁の立上がりは急なものであった。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　遺物の出土は無かった。

所　見　本地区の土坑としては、規模の小さな遺構である。時期を知る遺物の出土は無かったが、覆土や周辺の遺構状況から早期・条痕文期の所産と捉えた。

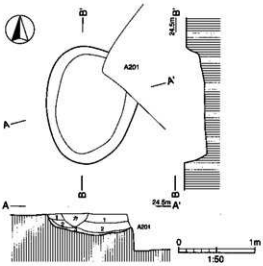
D248

検出地区　L5-87gにて検出した。F234と重複している。

遺　構　長軸1.12m×短軸1.04m×深さ0.26m、方位はN-24°-Eを測る。平面形は円形である。坑底はや凹凸があり、壁の立上がりは垂直に近いものであった。覆土は坑底及び壁際層に暗褐色土が、壙の中央に黒色土が堆積していた。その黒色土中に小型のカキが少量廃棄されていた。

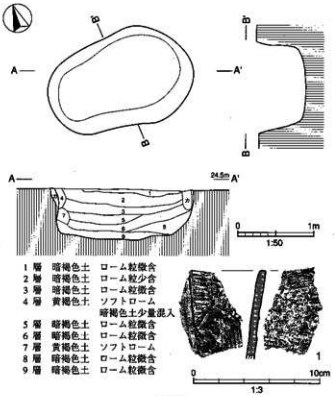
遺　物　条痕文片が出土しているが、稀であった。1は外面は縦位、内面は斜位の条痕文を施文する胴部片である。

所　見　土坑廃絶後の埋没過程の中で再度掘込まれ、貝が廃棄されたものと捉えられた。覆土1・



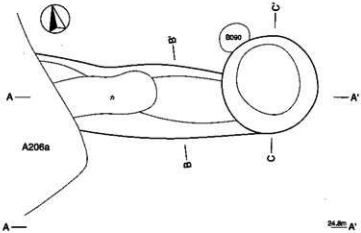
1 層　黒褐色土　ローム粒少含
2 層　黒褐色土　ローム粒少含
　　径5mm大のロームブロック微含
3 層　暗褐色土　ローム粒多含

D236



1 層　暗褐色土　ローム粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒少含
3 層　暗褐色土　ローム粒微含
4 層　黄褐色土　ソフトローム
　　暗褐色土少量混入
5 層　暗褐色土　ローム粒微含
6 層　暗褐色土　ローム粒微含
7 層　黄褐色土　ソフトローム
8 層　暗褐色土　ローム粒微含
9 層　暗褐色土　ローム粒微含

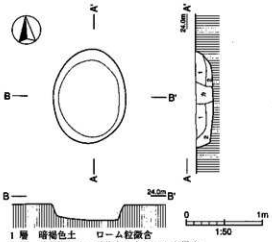
D238



1 層　黒褐色土　ローム粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒少含
3 層　暗黄褐色土　暗褐色土とソフトロームが混合
4 層　暗黄褐色土　暗褐色土とソフトロームが混合
5 層　暗褐色土　ローム粒多含　焼土粒微含
6 層　暗褐色土　ローム粒少含
7 層　暗褐色土　ローム粒多含

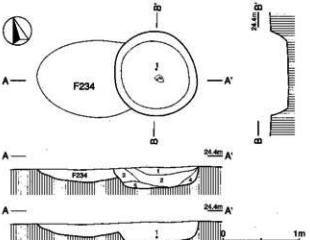
D237

図120　D236・D237・D238



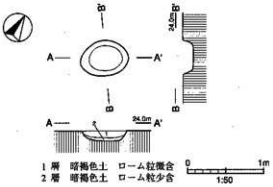
1 層　暗褐色土　ローム粒微含
2 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混合

D246



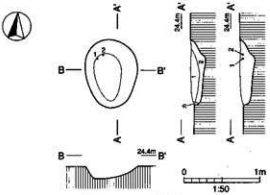
1 層　黒色土　ローム粒少含
2 層　黒色土　ローム粒径5mm大のロームブロック少含
3 層　暗褐色土　ローム粒微含　焼土粒微含
4 層　暗褐色土　ローム粒微含
5 層　暗褐色土　ローム粒少含

D248



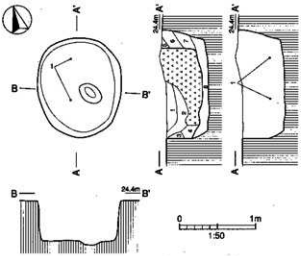
1 層　暗褐色土　ローム粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒少含

D247



1 層　暗褐色土　ローム粒少含
2 層　暗褐色土　ローム粒微含

D249



1 層　黒褐色土　ローム粒少含
2 層　黒色土　ローム粒少含
3 層　黄褐色土　ソフトロームブロック
4 層　黒褐色土　ローム粒少含
5 層　暗褐色土　ローム粒少含
6 層　暗黄褐色土　ロームと暗褐色土が混合
ローム粒径5mm大のロームブロック少含
7 層　暗黄褐色土　ロームと暗褐色土が混合
ローム粒径5～10mm大のロームブロック少含
8 層　暗褐色土　ローム粒径5～20mm大のロームブロック少含

D250

図121　D246・D247・D248・D249・D250

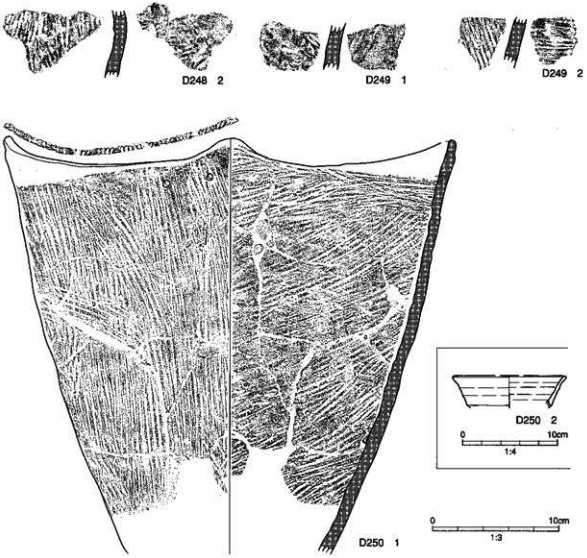


図122　D248・D249・D250（2）

２層が黒色土であることから、土坑と改廃期の間に時期差があるのではないかと考えられるものである。

D249

検出地区　L5-87gにて検出した。

遺　構　長軸0.88m×短軸0.68m×深さ0.18m、方位はN-11°-Eを測る。平面形は卵形である。北壁側は凹凸をもちながらも壁は斜めに立上がり、南壁側は直立するような壁の立上がりである。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　覆土上層を主体として条痕文片が出土するが、稀であった。１・２とも条痕文を施文するが、１は内外面とも斜位に、２は外面縦に近い斜位、内面は横位に施している。

所　見　断面形などから炉穴とも考えられたが、火床などが検出されないことから土坑と捉えた。早期・条痕文期の所産と判断した。

D250

検出地区　L5-87gにて検出した。

遺　構　長軸1.28m×短軸1.12m×深さ0.52m、方位はN-14°-Eを測る。平面形は楕円形である。掘込みはやや深く、タライ状である。坑底は略平坦であり、壁の立上がりは垂直に近い遺構である。覆土は暗黄褐色土を主体として自然堆積しているが、埋没過程において掘込まれ、小型のカキやハイガイが廃棄されている。また、貝ブロックも掘込まれており、黒色土が堆積していた。

遺　物　条痕文片を主体として20点余の出土をみている。また覆土上層からは、土師器・坏が1点出土している。1は器形が窺える大型接合片であり、丁寧な条痕文を施文している。出土は貝ブロックの下層であった。

所　見　土坑としての用途は不明であるが、貝ブロックとの関係から早期・条痕文期の所産と捉えている。また、貝ブロックも時期差のないものと捉えた。貝ブロックの堆積状況から、貝殻を採取するように後世に掘込まれていることが考えられた。土師器坏の出土から、覆土1・2層は貝殻採取のための掘込みかもしれない。

表10　D250遺物観察表　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	357×－×330 波状口縁 口縁一補修孔2カ所有する　口唇貝殻の腹縁の圧痕か？ 胴部一斜位縦位　内面　横位、斜位の条痕文	外暗褐色 内橙褐色 良	繊維	2/3	
2	土師器 坏	120×－×35 口縁外反　ロクロ成形 腹部下半ー回転ヘラケズリ	外暗橙褐 内橙褐色 良	砂粒	口縁片	

D251

検出地区　L5-87gにて検出した。

遺　構　長軸1.20m×短軸1.12m×深さ0.64m、方位はN-52°-Eを測る。平面形は楕円形である。坑底は平坦で、壁立上がりは垂直に近かった。覆土は複雑な堆積であり、人為堆積を窺わせる。その中にハイガイ・カキの貝が廃棄されている。

遺　物　条痕文片が若干出土している。また、礫も出土した。1は、外面は微隆起によってランダムに区画し条痕文を斜位を主体として、内面は丁寧な条痕文を縦位に施文したものである。2は胴部下半で、内外面とも縦位に条痕文を施文する。

所　見　貝ブロック下に自然堆積の暗褐色土が薄く堆積しており、掘返しがおこなわれたか不明瞭であるが、土坑の埋没前に貝殻の廃棄が行われたような状態を示している。土坑と貝の廃棄はあまり時間差のないものと捉えている。

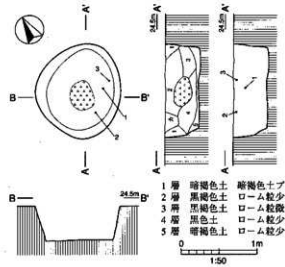
D252

検出地区　L5-97-1gにて検出した。

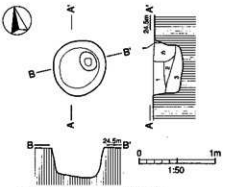
遺　構　長軸0.60m×短軸0.44m×深さ0.12m、方位はN-26°-Wを測る。平面形は楕円形である。断面丸みを帯び、坑底と壁が意識されないスリ鉢状の土坑である。覆土は1層のみ捉えられた。

遺　物　遺物の出土は無かった。

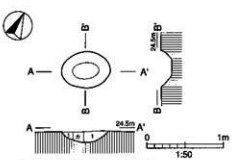
所　見　本地区としては規模の小さな土坑である。覆土などから、早期・条痕文期の所産と捉えた。



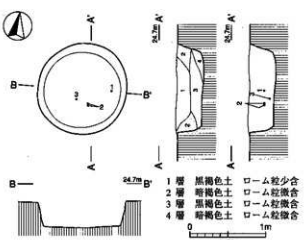
D251



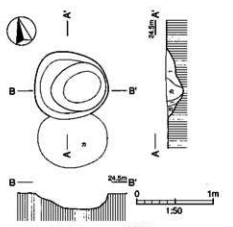
D255



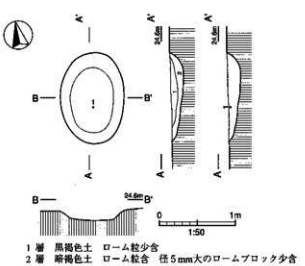
D252



D256



D253



D258

図123　D251・D252・D253・D255・D256・D258

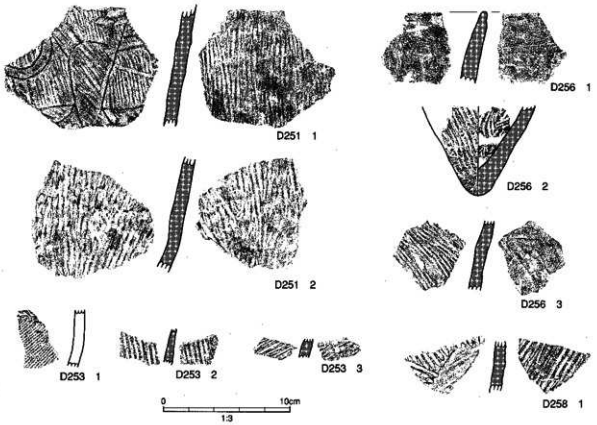


図124　D251・D252・D253・D255・D256・D258（2）

D253

検出地区　L5-87gにて検出した。

遺　構　長軸0.96m×短軸0.88m×深さ0.20m、方位はN-11°-Eを測る。平面形は隅丸方形と捉えた。撹乱が入り不明瞭であるが、スリ鉢状の土坑である。覆土は1層のみ捉えられた。

遺　物　条痕文片が主体だが、弥生土器片も出土している。1は附加条縄文の弥生後期の甕である。2は内外面ともやや斜位となる縦位の、3は内外面とも斜位の条痕文を施文している。

所　見　撹乱が大きく、不明瞭な遺構である。弥生の土器片は撹乱による混入と捉えた。遺物や覆土から早期・条痕文期の土坑と捉えた。

D254（F237と同図）

検出地区　L5-96gにて検出した。

遺　構　長軸0.94m×短軸(0.80)m×深さ0.24m、方位はN-39°-Eを測る。平面形は卵形である。坑底は略平坦であり、壁の立上がりは垂直に近い。覆土は図示できないが、自然堆積の土坑である。

遺　物　条痕文片を主体としているが、須恵器片も出土していた。

所　見　一見、掘立柱建物跡の柱穴に近似するが、早期・条痕文期の土坑と捉えた。F237との新旧関係は、捉えられなかった。

D255

検出地区　L5-96gにて検出した。

遺　構　長軸0.72m×短軸0.69m×深さ0.39m、方位はN-30°-Eを測る。平面形は略円形である。坑底は比較的平坦であり、壁立上がりは垂直に近い。覆土は坑底直上に黒褐色土が堆積した後、暗黄褐色土・褐色土が堆積しており、人為堆積かもしれない。

遺　物　遺物の出土は無かった。